

小西芳之助導源

わが主イエスよ

恵心流キリスト教・説教集

小西芳之助導源

わが主イエスよ

恵心流キリスト教・説教集





小西芳之助先生（ロマ書大観・祝祷）（昭和37年12月23日）

① 主とよびて

② はげま けふもまた 手にくるわざを

③ みくにめあてに



生きらば**耕名**このままで  
目の前の行ふべきをわし  
死ねば**天国**キリストに迎え  
らるその時の喜ばいかん  
生きしにともに**賜**

一九七七一、二一、二一  
真源

ローマ人への手紙 第一〇章九節—一三節

九 すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。

一〇 なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。

一一 聖書は、「すべて彼を信じる者は、失望に終ることがない」と言っている。

一二 ユダヤ人とギリシヤ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。

一三 なぜなら、「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」とあるからである。

## まえがき

高円寺東教会での小西芳之助先生の説教は、聖書の講解しかもパウロ書簡の講解を中心として実施されました。そのわけは、本文にも書かれている通り「キリスト教の真理は聖句の真理による。聖書のある一箇所の聖句の意味を、別の箇所の聖句をもって説明することができる」という、先生の持論によるものであります。

福音書のある箇所の理解が困難である場合でも、パウロ書簡のある箇所を十分に学ぶことにより、その真意が理解できるようになるということになります。このようにして、私たちは聖書のすべての箇所を理解し、福音の真理をわがものとするのが可能である、ということになります。

また先生は、パウロ書簡を非常に重視されましたが、その理由は、上記のような聖書による福音の理解に關してパウロ書簡は最適の書である、というのがもう一つの先生の持論でもありました。

先生は、さらに、夏休み明けとかクリスマスの時とか合間を見て、本書に示されているような聖書の信仰全体にわたる特別説教を実施されました。ここに述べられた説教は、上記の趣旨を小西先生という一人の人間の信仰生活に具体化したものと考えられます。信仰は思想・学説ではありません。それは、この世に生きる人間の生きる目的・その意味を指し示す具体的な力のあるものでなければなりません。

聖書の本文とともに、本書に収められた特別説教を読むことによって、私たちはその力を頂くことができます。

最終的な人生の目的とは何でしょうか。

イエス・キリストの十字架の贖いにより、自分は罪許され、復活し、永遠の生命を与えられること。そのためには、救い主の御名を呼びつつ、目の前に置かれた、今なすべきことをなすことである。

これらのことは、すべて神の意志によるものであり、私たちが実行する力は聖霊によりもたらされるものであることが、本書を精読することによって明確になっていくことを衷心より望み、祈念するものであります。

平成二八年九月二八日

編集幹事 佐生健光

# 目次

講解説教

表題

講解年月日

頁

第一講	イエス復活の意義	(昭五一・四・一八)	1
第二講	贖いの無限の深さ	(昭五一・六・二七)	8
第三講	信者生活第六〇年・伝道者生活第三〇年所感	(昭五一・一〇・二四)	17
第四講	妙行を中心として	(昭和五一・一二・一九)	29
第五講	夏休み中の三大発見	(昭五二・九・一一)	37
第六講	お彼岸中に示された一つの大発見	(昭五二・九・二五)	43
第七講	称名の意義	(昭五二・一〇・二三)	48
第八講	信仰より称名へ	(昭五二・一二・二五)	58
第九講	死に勝つ生涯(その一)	(昭五三・一・一)	69
	死に勝つ生涯(その二)	(昭五三・一・八)	77
第一〇講	私の信仰	(昭和五三・三・二六)	81
第一一講	まさに知るべし、ロマ書一〇章一二、一三節により称名する者、決定往生するを	(昭五三・九・一〇)	89

(その一)

(その二) (昭和五三・九二四) .....

第二二講 難信と易行 (昭五三・一二・二四) .....

第二三講 唯一つだけ (昭五四・一・七) .....

第一四講 私の信仰および忘れ得ぬ内村先生のお言葉 (昭五四・四・一五) .....

第一五講 唯一つのこと (昭五四・五・一三) .....

第一六講 善導・源信・源空に学ぶ (昭五四・六・一〇) .....

補遺 A 私の人生 (昭四三・六・二) .....

補遺 B 私の信仰——恵心流キリスト教—— (昭四二・八・六) .....

補遺 C 私の信仰——信仰はただ一つ—— (昭四二・八・二七) .....

補遺 D ロマ書大観 (昭三七・一二・二三) .....

あとがき ..... 185

## 第一講 イエス復活の意義

### ロマ書四章二五節、一〇章九節―一三節

(昭和五一(一九七六)年四月一八日)

ただ今、松田幸次郎兄弟が金澤常雄先生の復活の信仰についてお話しいただきましたが、当教会が始まりました昭和二四年の三月二七日、教会を始めましたときに、金澤常雄先輩においでいただきました。そして、私の牧師館の教会において、金澤常雄先輩がお話しいただきました。金澤常雄先輩は、そのとき既にご健康があまりよくなって、その日はすぐにお帰りにならず、石館兄弟のお宅にお泊まりいただいたことを、昨日のごとく思い出しております。

本日は、「イエスの復活の意義」ということに対しまして、小さな私の説教をしたいと思えます。

かつて、金澤常雄先輩と非常にお親しい矢内原忠雄先輩がNHKから頼まれました、「イエスの復活の意義」について、放送された。私はその放送を聴いた。もう何年前になりますか。三回にわたって朝、放送された。そのときの矢内原先輩の放送では、イエスの復活の意義について、「第一・科学的意義」「第二・歴史的意義」「第三・実践的意義」、そういうふうな三つの方面から「イエスの復活の意義」をお話しになった。しかし、われわれの救い、キリスト教の救いに関して、イエスの復活はどういう意義を持つかについては、お話しにならなかった。われわれ信者にとっては、イエスの復活の意義というものは、われわれの救われることと同意義を持つていること、これが問題なのです。ところが、内村鑑三先生の信仰をしっかりと受け継いでいらっしゃる矢内原先輩が、NHKから頼まれて放送するときに、救いの意義を話されなかった。私は

不思議に思っております。

今日私は、イエスの復活がわれわれの救いとどういう関係にあるか、救いに関してイエスの復活はいかなる意義を持つかということに限定して、イエスの復活の意義をお話しいたします。

キリスト教では救いということが一番大切なのです。キリスト教は、救われていなかったら意味がない。『聖書』では、「救い」ということを、「新たに生まれる」、「新生」という言葉、「神の子となる」という言葉、「永遠の命を受ける」、「贖われる」、「義とされる」、「和解する」、こういう風な言葉が聖書では使われています。この六つとも救われるという同じ内容を言い表したもののなのです。

そして、この救われるとはどういうことかという点、内容は、イエスの十字架の贖いによってわれわれは罪を赦され、われわれの信仰によらず、われわれの行ないによらず、イエス・キリストの贖いによって、罪を赦され、神の子とせらるると思ひ、この世においては神に守られて、主の名を呼びつつ自分に与えられた義務をなして、この世が終わつたら、キリストに迎えられて天国に生まれて、キリストが来給うときに復活するのである。これをキリスト教で救いという。

この救われるためにイエスの復活はどういう意義を持つかということは、イエス・キリストが十字架について、われわれの罪とがを滅ぼして、贖ってくだされて、そしてイエスは復活した。ですから、イエスが復活したということは、われわれの罪とがを贖って、われわれに神の子たるの生命を与えてくださった、その救いの全部を成就してくださったという意義を持つ。イエスの復活とわれわれの救いの関係、すなわち、イエスの復活の意義はこれに尽きる。

繰り返して言えば、われわれの救いの成就なのです。われわれの信仰によらず、われわれの行ないによら

ず、われわれの救いは成就した。これをイエスの復活という。よろしいか。

それを今、石館(守三)兄弟に読んでいただきましたロマ書四章最後の節、二五節のところでパウロはこれを簡潔に言い表しまして、「イエスはわれわれの罪の故に十字架に架けられ、われわれの義の故にイエスは復活した」と書いてある。「われわれが義とされるために復活した」と日本語に訳してありますが、あの訳は適当でない。原語は「われらの義の故に復活した」と書いてある。原語の前置詞は、英語で訳したら、「for」と Revised Standard Version に訳してありますが、あれは適当ではなう。「because of」と訳さなくてはいけない。われわれの義の故に復活したと訳さなければ原語の意味が表れない。

われわれの救いは成就した。これを信ずることを信仰という。信仰によって救われるという。われわれの信仰、われわれの行ないを必要としない。イエスの贖いだけで十分。これをルターは「信仰だけで救われる」と言った。

信仰だけで救われる、贖いだけで救われるというのは、ロマ書、キリスト教の建前です。しかるに不思議なことには、本日石館先生に読んでいただきましたロマ書一〇章九節、一〇節によりますと、救いの条件が二つ書いてある。一つは、イエスの復活を信ずる、すなわち贖いの成就を信ずること。心ではイエスの贖いを信じて、口では主は救い主なりと告白する、「わが主イエスよ」と言うことを救いの条件としてパウロは挙げた。

注目すべき場所。私は七〇になるまで、この意味が分からなかった。救いの条件として、主を言い表す「わが主イエスよ」、「主は救い主なり」と。今、松田兄弟が言われたトマスが「わが主、わが神よ」と告白した、その「主よ」という言葉を救いの条件としてパウロは挙げた。これが私は分からなかった。内村鑑三

から贖いを聞いて五〇年間分らなかった。

ところがここに、パウロはロマ書一〇章九節において、「心で信ずることだけで救われる」と言ったが、それともう一つ、一〇節において、「主の名を言い表す」、口で言う「わが主イエスよ。主はわが救いなり。主よ、われらの主よ」とトマスが言ったごとくに口で告白するということを、救いの条件として挙げた。

そして、このロマ書一〇章の九節から一三節までをよくよく読みますと、信ずるということよりも、主の名を呼ぶことのほうにパウロは *emphasis* (重点) を置いた。あの九節・一〇節は、原文では一節(ワンセンテンス)でありますけれども、「主の名を呼ぶ」という字がこのセンテンスの初めに出てきて、終わりにも出てきている。ですから、パウロがいかに「主の名を呼ぶ」ということに *emphasis* を置いたかということが、文章の構造から出てくる。

そして、一〇章の九節から一三節までをよくよく読んでみますと、始めの「主の名を呼ぶ」という字は、「主は救い主なりと告白する」という字になっていきますけれども、最後の二三節になると、「主よと呼ぶだけで救われる」とパウロは書いている。これは注目すべきパウロの使い方です。

日本語の訳でも、始めは「イエスは主であると告白する」となっておりますけれども、一三節の終わりには、もう「主の御名を呼び求める者は」となっている。日本語でも、それはよく出ております。いかにパウロは「主の名を呼ぶ」ということに重点を置いているかということが分かる。これも私は最近その *emphasis* が分かったのです。

「救い主の名を呼ぶ」ということは、キリスト教の歴史では、はつきり説明されていない。幸い、わが日本では、「救い主の名を呼ぶ」ということは千年間、われらの先輩がこれを研究してくれ、実験してきた。

浄土宗において、浄土真宗において、あるいはまた日蓮宗において、救い主の名を呼ぶことは、日本においては千年間も研究し、実験されている。まさに日本仏教史は、このパウロのロマ書一〇章九節から一三節までの旧約と見てよろしい。

親鸞は源信を褒めたたえて、『高僧和讃』において、「源信広く一代の教えを研究して、念仏の入門を開いて濁世じよくせのわれわれを教えている」、「極重悪人、他の方便なし、ただ救い主の名を称してぞ、浄土に生まると述べたまう」と言って、親鸞は源信を褒めたたえる言葉を閉じた。この救い主を称えるということは、日本においては研究済みです。

われわれは、「主の名を呼ぶ」というパウロの教えに従って、「わが主イエスよ」と言うときに贖いの力がわれわれに移ってくる。贖いの力を吸う。麦わらで牛乳を吸うようなものなのです。そうでしょう。牛乳が入っているけれども、吸う道具がなかったら入らないでしょう。われわれは「贖い、贖い」と口でばかり、頭で知っているけれど、贖いという力がわれわれに移ってこない。頭で知っているだけなのだ。そんなものは駄目。頭の中だけでは、悲しみ、苦しみに遭ったときに、そんなものは間に合わない。

由来、信仰というものはあてにならない。信仰だけで救われると言っているけれども、信仰というものは、われわれの頭にあるだけでは、じきに飛んでしまう。若存若亡にやくそんにやくもうと先輩は言いましたが、それを知っているかと思つたら飛んでしまっている。そんなものはあるかないか分からない。由来、人間の信仰というようなものはあてにできない、そんなものは。

動かないものは、贖いです。それがどうして移るかという、主の名を呼んだときに移る。

罪のため主ともいませんを知らねども、御名を称えてこれを知るなり

そして、ロマ書一〇章九節に「信ずる」という字が出てくるし、「御名を称える」という字も九節に出ています。一〇節にまた「信ずる」と「称える」という二つが出てきますけれど、この九節と一〇節で動詞の態が違う。九節のほうは能動態、アクティブですけれど、一〇節のほうの「称える」とか「信ずる」という字は受動態と見てよろしい。受け身なんです。パウロはなぜ九節と一〇節で動詞の態を変えたか。一〇節のほうは聖霊の働きによってわれわれは信ぜしめられ、聖霊の働きによってわれわれは主の御名を呼ばしめられるということ、パウロは言い表したものと私は信ずる。

法然上人が仰せになった言葉に、「信じても信ずべきは」、ただ十辺称えるものまで「乃至十念の言葉、頼みても頼むべきは」、必ず極楽に生まれる「必得往生の文なり」と言われた。「信じても信ずべきは乃至十念の言葉、頼みても頼むべきは必得往生の文なり」と言われた。乃至十念という言葉。必得往生という文句。これは信じても信ずべき、頼みても頼むべきものだと言われた。由来、宗教の信仰というのは、お経の文句を信じて実行することです。

この法然の言葉を私に当てはめましたら、

「信じても信ずべきはロマ書一〇章九節から一二節まで、頼みても頼むべきはロマ書一〇章九節から一二節まで」

われわれの信仰の根拠は、『聖書』の文句です。

これを要するにイエスの復活の救いに関する意義は、イエスの復活がわれわれの救いの全部だということなのです。われわれの信仰、われわれの行ないによらない。イエスの復活、すなわち贖いの成就、復活のみによってわれわれは永遠の命に入り、永遠の命を全うするのだ。

この信仰のうえに、「わが主イエスよ」と、トマスが言った。彼が「主よ、わが神よ」と言ったのを、「神よ」「主よ」と主を言い表すことは、贖いの信仰の成就、クライマックスとなる。イエスの復活の意義の完成は、われわれの称名にある。イエスの名を呼ぶことにある。

内村先生は、大正一〇（一九二一）年五月一日、ロマ書三章二一節を講義なさいまして、われわれはその講演会に出席した。ここにいる鈴木（秀夫）兄弟も、私と一緒にその講義を聴いたので。そのときに、あの講義をして、内容は神の義の顕現、現われについて言われた、すなわち贖いです。きょうのイエスの贖いの成就の話なのです。われわれの信仰、われわれの行ないによらない、イエスの贖いによって救われるということをお話された日なのです。

その日の日記に、内村鑑三は「我は今日は福音の意義を闡明した。私の人生の目的は達せられた」と述懐された。先生の日記に出ている。私はその講義に列席した。

私とその先生の言葉を借りるならば、そのとき先生は満六〇歳、私は現在満七七歳、一九七六年四月一日のこの復活節において満七七歳をもって、貧しき無学無徳の身をもって大胆にもロマ書一〇章九節から一三節までの意味の大意を述べた。これをもって私の人生の目的は達せられたりというふうには、内村先生とともに言いたい。

## 第二講 贖いの無限の深さ

### ロマ書一〇章九節―一三節

(昭和五一(一九七六)年六月二七日)

去年の六月の最後の聖日に、「恵心流キリスト教」と題しまして、私の学びました信仰を少しお話しいたしました。今年の六月の一〇日は恵心僧都の九六〇回の年忌に当たっておりますので、毎年六月の一つの聖日を「恵心僧都に学ぶ」と題してお話ししたいと思っておりますのですが、今年は、幸い『ローマ人への手紙 略記別冊』ができてまして、ここへ本屋から届いておりますので、皆さんにお分かちできます。誠にありがたい。皆さんのご協力によりまして、こんな立派な『略記別冊』ができました。本日は、その感謝の意味の礼拝を持ちたい。特に、本年は恵心僧都の九六〇回忌に当たっておりますので、恵心僧都の御徳をしのびつつ、この『略記別冊』完成の感謝礼拝したいと思います。

「贖いの無限の深さ」という題を付けましたが、これはエペソ書三章八節に「イエスの無尽蔵の恵みの富」とありますが、今月からエペソ書に入ることになっておりますので、このエペソ書の文句が非常に適当であると思っておりますので、この題を付けました。

私がこの七八年に少しく福音に学びましたその信仰の度合いといたしまして、ロマ書一〇章九節から一三節までの『聖書』の文句の意味につきまして、大体六つの点について申し上げます。それから、最後に『略記』と『略記別冊』を比較しまして、違ふところ二カ所ほどについて申し上げて、今日の話が終わりたいと思います。

六つの点の第一は、九節と一〇節との動詞の態が違うということです。これは何遍も申し上げているのですが、私が一九六四年に気が付いたことであります。すなわち、第二回ロマ書講解が一九七一年ですから、それより七年ほど前に気付いた点であります。すなわち、九節と一〇節の「信ずる」という字、「口で告白する」、この二つの動詞の態が違う。九節のほうは能動態、アクティブであります。一〇節のほうは受け身、受動態であります。

殊更にパウロは九節と一〇節において動詞の態を変えた。一〇節には受け身にした。すなわち、われわれは、イエス・キリストを主であると告白すると言ひ、また、神がイエスを蘇らせた、すなわち贖いを成就したということ信ずる。この「信ずる」という字、イエスを主なりと告白するというこの動詞が、九節ではアクティブ（能動態）になっておりますのに、一〇節では受け身になっている。

これは、最近いよいよ私ははつきりしてきたのですが、われわれはイエスの贖いを信ずるといふ「贖い」というのがわれわれの信仰の客体になっておりますけれども、客体でなくして、これは主体でありまして、その贖いがわれわれに現われてくるのです。われわれを教え、われわれを導いて、われわれに信仰を告白させ、イエスの贖いを信じさせるのです。

ですから「われわれは告白せしめられ」、「われわれは信じせしめられて」と訳するほうが正しいと思ひます。私は、将来この一〇節の訳は受け身の訳となって、日本文にも現われる日があると信じます。

六つのうちの第二は、イエスは主なりと告白するという称名が、救いの条件をなしていることであります。すなわち、われわれロマ書三章の終わりにおいても、信仰によって義とされる、「信仰だけで」となっております。

司会者、三章の終わりはどうなっていますか。三章の終わりの、二八節。ちょっと立って読んでください。  
○司会者「わたしたちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである。」

「信仰によるのである」と。ルターは「信仰だけ」という字を入れたくらいに「信仰だけで義とされる」、救いに入る。これは、「信仰だけ」と私は思っていました。しかし、この一〇章をよく読んでみますと、心で贖いを信ずることと、口で「イエスは主なり」「わが主イエスよ」と告白すること、この二つで救いは完成すると書いてある。

そうですから、信じていただけでは救いは成就しない。口で「わが主イエス」と言わなければ救いは成就しない。すなわち、救いの条件としてイエスの名を呼ぶことをパウロが要求していることに気が付いた。これは一九六八年、私が満七〇歳のときに気が付いた。これが第二の点であります。

第三の点にうつります。第三の点は、この九節、一〇節は、原文では一文をなしております、イエスはわが主なりと主の名を「告白する」という動詞が、この文の最初に出てきている。最後にまた「告白する」という字が出てきている。そうですから、パウロがいかにかこの「主の名を呼ぶ」ということを強調しているか。信ずるということよりも、主の名を呼ぶことのほうに重点を置いている。

これは驚くべきことでもあります。パウロ先生は、信ずることよりも、「イエスはわが主なり」と称えることを重要視している。そういうことを、私はこの文章をたびたび読むことによって発見いたしました。これが第三点であります。

この第三の点は驚くべきことでありまして、われわれは「信ずる」「信ずる」と言って、信ずるだけで救

われると今まで教わってきたのです。ところがここにパウロは、九節、一〇節の one sentence (一つの文章) において、信仰よりも、主の名を呼ぶことの方を重要視している。これは将来学者が注目する日が必ず来ると私は確信する。

第四の点は、イエスは主なりと「告白する」という動詞と、これは九節、一〇節に出てきますが、一二節、一三節になりますと、「呼び求める」「呼び求める者」となっております。「告白する」という動詞と、「呼び求める」という字は、よく読んでみますと字の意味が違う。これも私は最近気が付きました。

「告白する」という字は、原語でも、ドイツ語でも、英語に訳している字でも、ただ口で言うだけではな  
いのです。「告白する」という字の意味は、同意するとか、それを認める、agree、acknowledge という意味があるのです。そうですから、口で告白するためには、イエスが主であることを認める、あるいは、同意することが元になっている。それがあって、「イエスは主なり」と口で告白している。そういう字なのです。

そうですから、告白するという字は、そういう意味を含んでいます。主の名を呼ぶ」というほうは、特に一二節では「主を呼ぶ」となっていますが、一三節では「主の名を呼ぶ」となっている。そうですから、呼ぶのに「名を呼ぶ」というのが一番簡単なのです。一三節で明らかに説明していますが、主の名を呼ぶとなれば、「イエスさま」「イエスさま」と簡単にイエスの名を呼んだらいいのです。これが一三節です。

そうですから、この九節、一〇節では「告白する」、すなわち告白するからには「イエスは主なり」と同意し、「イエスは主なり」と認めるといことが条件となっておりますが、一二節、一三節ではそれを条件としていない、ただ、口で動かしただけいいのです。「わが主イエスよ」と口で言ったらい。

私はこの差違、これはパウロがことさらに口で言う九節・一〇節のときと、一二節・一三節のときに口で

言い表しているのを変えたということは、非常に深い、広い意味があると信ずる。非常に簡単にした。パウロは誰でもいける、誰でもどんなときでもいける方法にしたのです。このことについては、もう少し語りたければ時間も時間がない。

第五番目。第五番目は、一二節、私はこの九節から一三節までのうちで最も好きな節は第一二節。これは私に最も魅力がある。ここには「ユダヤ人とギリシヤ人との区別はない。イエスの名を呼ぶ人に無限の富が主の名を呼ぶ人に向かっている」と書いてある。ここには贖いという字は消えてしまっています。ここではもう、イエスが復活したと信ずるとか、そういうことは消えています。

そしてここには、ユダヤ人とギリシヤ人との区別はないと書いてある。この字に注意してください。ユダヤ人とギリシヤ人との区別がないということは、白と黒との区別がないということだ。万人に対してイエス・キリストの贖いの無限の深さが、名を呼ぶ者に向かっているということです。イエスの名を呼ぶすべての人に贖いの無限の深さが向かっている。これは条件にあらずして、その無限の愛の深さを吸い取る麦わらみたいなものなのです。牛乳を吸うのに何か道具が要るでしょう。その神の無限の贖いの富を吸い取るのに、称名という口を、パウロは説明したのです。

今日は讚美歌を歌いましたが、「頼り行く者にこの神の恵みを与える」と書いてある。頼り行くといったらどうするのですか。「主の御許に行く」と讚美歌で歌いますけれども、イエスの御許に行くと言ったら、どうするのですか。そんなものは、讚美歌で歌っているだけで、具体的方法ではないじゃないですか。その頼り行く者、主の御許に行くといったらどうするかというと、方法は「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶということなのです。

私は浄土宗の家に生まれました。私は、浄土宗に非常に尊敬を持っておりませんが、今まで浄土宗とキリスト教はよく似ているなと思っていました。このごろは、その二つの救いがびたっと一つに見えだした。「阿あ波之介のすけという一文不知の陰陽師が申す念仏と、源空が申す念仏と変わりなし」と法然が言った。

私芳之助と阿波之介はよく似ている。そうですから、法然上人が、芳之助という一文不知の陰陽師が申している称名と、私が申しておる称名は変わりがないと源空・法然上人がおっしゃっているような気がする。パウロは、無尺蔵の贖いの富とエペソ書三章八節に言いました。贖いの無限の深さなのです。

第六番目に感じますことは、一一節と一二節です。一一節は、彼を信ずる者は失望に終わることなく救われるということでしょう。彼を信ずる者は救われるということです。この一二節は、彼の名を呼ぶ者に、称名する者に救いの富が無限にある。一一節は信を言い、一二節は行を言っている。この信のほうをあまり難しく言っではいかん。

ここで、高円寺の駅に行くのはどの道ですかと聞いたたら、「そこへ出て、その角を右に曲がって、それから電車道に沿ってずっと左へいらしたらよろしい」と。そうですかと行って、そして、ずっとその道を行ったら、高円寺駅へ行くのです。それを、「土地で道を聞いたたら、こう行けと人が教えてくれた。私はそれを信じて、歩いて行って着きました」なんて言う人はいないでしょう。信ずるということを難しく言ったらいかん。そう言うとおりにしたら信じたことになる。そうでしょう。言われたとおりにその道を歩いて、電車道に沿ってずっと行けば、教えてもらった言葉を信じたことになるでしょう。言った人の言葉を信ずるんだ、信ずるんだと言って、この点でみんなが引つ掛かっているのです。

行だけ言いたまえ、行だけ。私は『歎異抄』を読みまして、「親鸞におきてはただ念仏して助けられまい

らすべしと、よき人の仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」と最初に書いてあります。最初の章に書いた。私はあの書き方で、最後に「信ずる」とあるけれども、私だったら信ずるとは書かない。私だったら、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せを被りて念仏するよりほかに子細はない」と、私は信ずると言わないで、念仏すると言います。

あれを「信ずる」と唯円が言ったために、本願寺ではごたごたやっているのです。要らないことをするのはないと言う学者が出てきた。どこに「念仏する」という字があるのですか、称名がどこにあるかと言う学者がいるのです。

信ずるというのを客観的に言う場合は、道を教えてくれた人の言葉を信じて行ったと客観的に言う場合には「信ずる」という字は要るけれども、主観的に言えば、信ずるということは必要ない。言ったとおりにしたらいいのです。そうしたら、主の名を呼んでいたら救われると『聖書』に書いてあるのだから、主の名を呼んだらよろしい。理屈は要らん。

大体以上、六つの点について申し上げました。

最後に、『ロマ書略記』と『ロマ書略記別冊』を比較しまして、区別を二つほど申し上げます。

『略記』の初めのところ、一章一七節の後半の文をルターは「義人は彼の信仰によって生くべし」と訳した。内村先生は、「信仰による義人は、信仰によって生きる」とお訳しになった。私は「信仰による義人は称名によって生かされる」と受け身に読む。「称名によって生かされる」という理由は「称名は信仰よりも易いから」と私は説明しました。しかし今度の『別冊』の最後のところに「再びロマ書一章一七節後半について」と書きまして、私は、略記の初めに書いた「称名は信仰よりも易いから」という理由を改めまし

て、ロマ書一章九、一〇節において、「称名ということが救いの条件となっている」としました。もう一つは、称名ということが一〇節、一一節において、信仰よりも強調されている。この二つの理由によって、内村鑑三先生は「信仰によって生くるべし」とお訳しになったが、私は「称名によって生かされるべし」と訳した。そういうふうには私は改めました。どうぞその点を二つ、よく見てください。

それからもう一つ、『略記』と『別冊』の区別は、『略記』の題字では「私のキリスト教の凡てはロマ書一章一三節を信じて行ずるにある」と書いてきましたが、『別冊』の題字では「信ずる」という字を取りました。「信じて行ずる」の「信ずる」を取ってしまったて、「一〇章二三節によりて主イエスと称えるにつき」と、「称える」一本にしました。そこが異なります。

以上、この九節から一三節までについて六つの点。また、『略記』と『別冊』との区別の二つについて述べましたが、九節から一三節までについて述べました六つの点は、世界的に有名な注解書、ICCのヘッドラム、サンデー両先生、あるいはまた、NTDのアルトハウス大先生、この世界的な大先生、また内村鑑三先生も、私のこの六点については、九節から一三節までの注解では述べていらっしやらない。これは、私が諸先生からこういうふうには教えられることが、私の申し上げる六点であります。

私は、こういうふうなお話ができますのは、私はこの七八年、信仰を勉強しようとか何も思わなかった。ただ、目の前に来る自分の義務を、不十分ではありますが、それをなそうと務めてきただけなのです。自分の目の前に置かれた務めを、不十分ながら真面目に少しくやってきました。そのおかげで、こういう話ができるようになったのです。

諸君も、目の前に置かれた義務をどうぞお尽くしになりまして、そして、主の名を呼びつつ目の前の義務

をなさいまして、そして、私は高円寺東教会、杉並区高円寺南五丁目の二三の一〇番地におきまして、主の名を呼びつつ、目の前の義務をなしつつ、そしてここで少しでもこの場所に輝くように神様からいただきたい。

伝教大師が、一隅を照らす、これすなわち国宝、日本の国の宝だよとお教えになりましたが、私もこの一隅、日本の高円寺の一隅を少しでも照らすものとなることができまして、伝教大師の遺風を学ぶものとなりたい。

## 第三講 信者生活第六〇年・伝道者生活第三〇年所感

ロマ書一章一七節、一〇章九節―一三節

ヨハネ伝一四章三節

(昭和五一(一九七六)年一〇月二四日)

一〇月の第三聖日、本年昭和五十一年の一〇月の第三聖日は、ちょうど私の信者としての教会生活の第六〇年に当たっておりますし、伝道者の生活として第三〇年目に当たっておるわけであります。

第三聖日、この前の一七日の日に、そういうわけで私の教会生活第六〇年、伝道生活第三〇年の所感を申し上げました。畑中兄弟が証言をしていただきましたので、私の申し上げる時間が少なくございましたので、本日はもう一回、この前申し上げました私の所感を繰り返して詳しく申し上げます、この前触れなかった点にもちよつと触れて申し上げたいと思います。ご了承願います。

私はいつも申し上げるとおり、内村鑑三先生から学生時代に福音を聞かせていただきました。そういう関係で私の福音の理解は、内村先生の理解を通して聖書を知るところに従っているわけでございますので、本日この記念の所感といたしまして、内村鑑三先生から学びました五つの点につきまして所感を申し上げますと思います。

第一の点は、内村先生が「自分の信仰は一つの文章、簡単な文章で言い表せると、そうならなければ力にならない」ということを仰せになりました。

私の一文、信仰の一文を申し上げます。「生きらば称名、死ねば天国」であります。もう一度、「生きらば

称名」、救い主の名を呼ぶこと、わが主イエスよと、「死ねば天国」であります。

これをもう少し引き伸ばしますと「生きらば称名、このままで、目の前の義務をなし、死ねば天国、キリストに迎えられる。そのときの喜びは、言葉をもって述べべからず」と、これが引き伸ばした私の信仰の告白であります。繰り返して申し上げますと「生きらば称名、このままで、目の前の義務をなすべきことをなし、死ねば天国、キリストに迎えられる。そのときの喜びは、言葉をもって述べべからず」。

この「生きらば称名、このままで」、「このままで」という副詞は、称名するという方にも掛かりますし、「目の前のなすべきことをなす」という、これにも掛かります。このままでなす。気張ることも必要なし、このままで目の前のなすべきことをなす。「称名する」という方は、これはロマ書一〇章一三節によっておりますし、「目の前の務めをなす」という方は、ロマ書一二章の三節から八節に根拠を持っているわけであります。

それから「死ねば天国、キリストに迎えられる」というのは、これはヨハネ伝一四章三節に根拠を持ってるのであります、われわれはこの世を終わればキリストがお迎えに来てくださって、キリストの国に迎えられる。このことがいかに幸いなことであるか、いかにこれが喜ばしいことであるかということは、これは天国へ行ったときに私は分かることなのであります、現在は、われらはキリストが迎えに来てくださることを、待ち望むわけであります。

これが私の信仰告白であります。一文で、私の現在の信仰生活を申し上げた言葉であります。

われわれは信仰、信仰と申しておりますけれども、われわれはそのキリスト教信仰によって、われわれの日々の生活がどれだけ力づけられておるか、パウロがガラテヤ書において「聖霊の結ぶ実は、愛、喜び、平

和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」と申しましたが、われわれの生活において、心がこの聖霊の實をどれだけ持っているかということは、各自それは反省する必要があると思います。これが第一であります。

第二は、内村先生の最期の亡くなる前のお言葉であります。昭和五年三月二八日に先生はお亡くなりになりましたが、その三月のある日、九州から先生の弟子が先生を訪問いたしました。そして先生の病氣をお見舞いした。その日先生がご気分が良かったので、弟子にお会いになりました。そしてその弟子が申し上げるのに、「お見受けするところ、先生はご重体だと、直にお隠れになるだろうと、どうぞ先生、最期のご教訓をいただきたい、先生のキリスト教を一分で話してもらいたい」と言ったそうであります。先生はおもむろに「主イエス・キリストを見上げよ」と。「この主イエス・キリストは、十字架に架かり、復活し、再臨なさる主イエス・キリストである」とこう仰せになったそうであります。そうですから最後、先生の信仰を一分で言ってくれといわれたときに先生は、信仰のお話もなさらず、望みのお話もなさらず、愛のお話もなさらずして、「主を見上げよ」とおっしゃった。

このことは非常に注目すべきことでありまして、これは先生がお若いときにアマースト大学のシーリー総長から、「内村君、君は自分の心の中ばかりを見ている、それではいかん。主を見上げよ、そこにわれわれの救いがある」と言われましたが、そのとき、「主を見上げよ」と言われた。この「主を見上げよ」というのと、最期の内村先生が自分の信仰の全部として「主を見上げよ」とおっしゃったのと、私は「見上げる」というのは違うと思います。

お若いときシーリー先生から聞いて信仰の奥義が分かった「主を見上げる」というのは、自分の心の状態、自分の行ないの状態で自分が悩み、特に自分の信仰、行ない、どうして救われるかという、その自分の行な

いというか、そういうことに悩んでおったときに、われわれの行ないによって救われるのではなくして、主イエス・キリストの贖いによって救われるんだと、主を見上げるんだという、その救われる、救いに入る方法としてのアマースト大学総長の指示でありまして、これはむしろ自分の行ないの状態の解決としての「主を見上げる」、いわゆる贖いの信仰の指し示しであると思うんであります。

最期の「主を見上げよ」と死ぬ前におっしゃったのは、これはわれわれの信仰、われわれの心の状態と、こういうことを信仰によって救われると言うけれども、われわれの心の状態、行ないの状態というのは、いつも妄念によって動いているのであるから、われわれとして救いに入るべき唯一の方法は、主を見上げることであるという、この信仰も行ないもすべてを含んだ、いわゆる全体をひと言で言われた「見上げる」であります。先生のおっしゃる深い意味が最近まで分かりませんでした。私はこの七〇の年に、称名のごことが救いの条件になっていることに気が付きました。以来、先生の主を見上げることが、これは一つの妙行として、こうして見上げる。こういうふうにする、こう見上げる。これが私は先生の遺訓であると思えます。これは無教会の信者の方々も、この内村先生の「見上げる」と言われた深い意味についてご理解なさっている方が、あるいは少ないかもしれないと思うのであります。これが第二の点であります。

第三の点は、私は先生の話をお聴きしているうちに、先生が、君たちは私が今ここで十字架の贖いの話をして、いるが、分かってあるう、分かってでもよろしい、覚えておけ、これは君たちが臨終のとき、死ぬときにこれが間に合う、だからこれを覚えておけというふうなことをおっしゃったことを私は覚えている。

われわれは十字架の贖いということは、現在のわれわれに関係ないように思いますから、何遍聴きましても馬耳東風と申しますか、なにかわれわれの生活、信仰生活と関係ないことと思ってしまうのかうか聴いてお

りませけれども、いよいよ死ぬとき、われわれが臨終のときになるときに、われわれの信仰、われわれの行ないによらない、イエス・キリストの十字架の贖いのゆえにわれらは救われて天国へ行き、キリストが迎えに来てくださるといふこと、これを知っておくといふことは、これはキリスト教において、もうこれほど大事なことではない。これほど大事なことはない。世の中に、いよいよ死ぬときに力になるといふ、そういうものほど大切なものはない。

内村先生が、君たちは分からんでもよろしい、ぼやぼや聴いていてもいい、覚えておれ、死ぬときに間に合う。私はこの死ぬときに間に合う、臨終のときに間に合うといふものが、私はこれが宗教だと思ふ。これが宗教です。

その「臨終のときに間に合う」についてですが、私の友人のお母さんは数珠を繰っておられた。たぶん念仏行者でしょう。「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と、それを数えるのに浄土宗では数珠で、一〇数えたら、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と数えて、多くを数えるために数珠を用いる。その方は数珠を持っておられたので、たぶん浄土宗の信者でしょう。友人の母です。それでいよいよ死ぬ前になられたら非常にお苦しみになりました、「うるさい！」と言って数珠を捨てられたそうです。平生は南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言って信仰の数珠を繰っておられたが、いよいよ死ぬ間際にお苦しみになったときに、うるさい！ と言って数珠をお捨てになったそうです。私そのときに、ああそのときに、そのときに役立つものがが必要です。うるさい！ と言って、数珠を数える数珠までもうるさくなったとき、そのときに間に合うもの。

私は、そのときに聞くのを忘れた。そのときに南無阿弥陀仏と言われたのだらうと思ふ。数珠を捨て、数珠はもううるさい！ といふときでも、うるさいと言える言葉で、南無阿弥陀仏といふことは言える。救い

主の名を称えるということは可能なのだ。数珠を繰るのがうるさいというその苦しみのときにでも、南無阿彌陀仏と救い主の名を呼ぶことは可能です。

私はその友人の奥さんに聞くことを忘れた。「そのときに、お母さんは南無阿彌陀仏とおっしゃいましたか」と聞いたらよかった。私はそれを残念に思っている。私はきつと、数珠を持つのもうるさいという、そのうるさい！ ということは言えるんだから、南無阿彌陀仏ということは、私は言える可能性があると思う。うるさい！ ということは言えるんだから、口を動かす可能性があるんだから、私は救い主の名を呼ぶことはできるだろうと思う。南無阿彌陀仏ということは言えるだろうと思う。おっしゃったかしらん。

そうでありますので、死ぬときに役立つような、そういうものを宗教という。そして、死ぬときに役立つというそのことが、われわれ現在と無関係に思っておりますけれど、そうではない。現在のわれわれの悲しみ、苦しみのときに、それが役に立つ。やってみたまえ！ 主の名を呼ぶことを。自分の現在の、この世の達者なときの悲しみ、苦しみに役立つ。そのときに役立たないようなものだったら、死ぬときも役立たないですよ。われわれは宗教といったら死ぬときのように思っていますけれど、本当に死ぬときに役に立つものは、現在の悲しみ、苦しみに勝つ力を持っている。それを宗教という。

私はキリストが「われ、平安を汝らに残す」とおっしゃったが、われわれに平安が無くして宗教を論じたらいかん。われわれは日々、主の与えたもう平安を知らずして、宗教あるいは信仰ということを振り回すことを、われわれ慎みましよう。

第四は、内村先生はこういうことをおっしゃった。「信者になつて聖霊をいただいたら、自分で聖書の続きを書くようにならないといかん」と言われた。この意味は、この間も兄弟からお話があったのですが、黙

示録の最後に、この聖書には一言一句加えてもいかんし、一言一句引いてもいかんと書いてある。

それに内村先生が、言ってみたら、使徒行伝の続きを書くようにならないといけないということになったら、これは黙示録の聖書の大精神と非常に反しますが、何も聖書に新しき真理を加え、聖書の真理を引いてしまうというのではなしに、聖書の真理をより明らかにするために、自分の言葉で自分の聖書の真理を表すようにという意味であろうと思う。私は、内村先生の意味は、自分で、自分の言葉で聖書の解釈を書けど、そういう意味であると思います。

私は先生のご遺訓によりまして、三カ所の聖書の文句に注釈を加えたい。この三つとも、きょう司会者に読んでもらいました場所であります。

第一、ロマ書一〇章一三節。これは「主の名を呼び求める者は、救われる」とありますが、その「主の名を呼ぶ」というところへ、私はその意味をはっきりさせるために「このままで」という副詞を付け加えたい。「このままで」というのは、これは英語から来ているのです。私の「このままで」という意味は“just as I am”から来ている。このままでやる。

これは主の名を呼ぶときのみならず、自分の日々の義務を尽くす、日々の仕事をするときもこのままでいい。腹が立ったまま、むしゃくしゃしたままでいい。自分のなすべきことをなしたらいい。勤め人は、上司から言われて腹が立ってけんかしたい、そのとき腹立ったままで自分の命ぜられた仕事をしたらいい。そのままで自分の義務を尽くしたらいい。私はそうしている。

私は日曜日の朝、教会へ来ること、これが私の務めですから、日曜日の朝礼拝に出ること。これは、自分がうるさいなと思ったら、うるさいという心のままでここへ出ている。私は、毎日気持ち良い日だけではな

いですよ。このままでいい。これが一三節の称えるという意味であります。

この一〇章一三節は、私は第一回のロマ書の講義のときには、この意味が分からなかった。「主の名を呼ぶ」ということは、聖書が救いの条件としていることが分からなかった。私は贖いだけ、イエスの贖いだけで救われるということを、第一回の際は講義していた。ところが七〇歳になって、この一三節「主の名を呼ぶ」ということが救いの条件となっていることが分かった。何遍も言うとおりに。

そして、第二回の七〇の年に、これが救いの条件となっていること、一つの条件となっていることを示されまして、第二回の講義のときにはそう話しましたが、第二回の講義をした七二年からもう四年間たちました。第二回目のロマ書講義をして四年間たちました現在では、「主の名を呼ぶ」ということが、人間側のすべての救いの条件となってきた。第二回の講義のときには、これは救われる一つの条件として私は思ってた味わっておりましたが、現在におきましては主の名を呼ぶということが、救いの人間側のすべての条件となってきました。

ですからこれからも健康が与えられて、第三回のロマ書講義をやるとき、一九八二年には、この「主の名を呼ぶ」ということが人間側としては、これは救われるすべての条件となっていると講義するであろうと思います。

このことから浄土宗、浄土真宗に興味のある方もございますから、『歎異抄』と『一枚起請文』とに触れたいと思います。

私は称名の理解ができてきましたから、『歎異抄』の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せを被りて信ずるほかに、別の子細なきなり」という、あの『歎異抄』の有名な

言葉がありますが、親鸞におきては「信ずるほかに、別の子細なきなり」というところを、あそこを私は「称名をするよりほかに、別の子細なきなり」と、私の説明は、「信じる」という字を「称名」という字に替えたい。

もう一つ、法然上人『一枚起請文』の「ただし三心四修と申すことの候うは、皆決定して南無阿弥陀仏と申して往生するぞと思ふうちにこもり候ふなり」という、あの「思ふうちにこもり候ふ」という「思ふうちに」というのを、「ただし三心四修と申すことの候うは、皆ただ称名するうちにこもる」と、そういうふうには注釈を加えたいと思います。

これは、『歎異抄』からは「信じる」という字を取り、『一枚起請文』から「思いうちに」という、自分で思うというこの「思う」という字を取ってしまった。両方とも「称名」にしてしまった。これが私の、お二人の日本の大指導者のお言葉に対する、私の小さな解釈であります。

それから、聖書の一つの場所、ロマ書一〇章一三節、これは私の命の言葉ですから、一〇章一三節は、ここに私のすべてがかかっておる。私のすべては、ここにかかっている。私のキリスト教信仰のすべてが、ロマ書一〇章一三節にかかっている。

今度はヨハネ伝の一四章の三節。

私は自分の思いを語ったり、自分の経験を語っているのではない。私は聖書の言葉を語っている。

もう一つの場所は、ヨハネ伝一四章の三節。すなわち、キリストが「私が所を備えたら、また来て、お前を迎えて、私のいる所に連れていってやる」と書いてある。キリストが迎えに来ると言うことが書いてある。この言葉、これほどありがたい言葉は聖書の他に無いかもしらんですよ。ヨハネ伝一四章三節、これが死ぬ

ときに、役に立ちますよ！ こういうすごい、喜びと平安に満ちた、こんなすごい言葉を、もつと教会で先生が教えてくれませんか。

そして、このヨハネ伝一四章三節に、私は注解を加えまして、「そのときの喜び、言葉をもって述べべからず」、これを私が注解として付け加えたい。一四章三節。

それから三つ目、ロマ書一章一七節後半、「義人は信仰によって生きる」という言葉。内村先生は「信仰による義人は、信仰によって生きる」と言われた。内村先生が「信仰による義人は、信仰によって生きる」と注釈なさいましたが、私は「信仰による義人は、称名によって生きる」。信仰という字を称名という字に代えて、内村先生の「信仰による義人は、信仰によって生きる」というのを「信仰による義人は、称名によって生きる」。

その理由は、ただ称名が易いからというではなしに、これは一つは称名ということが救いの条件となっている。

それから第二には、このロマ書一〇章九節、一〇節によると、これは一文をなして、強調点は、パウロは信ずるよりも称名のほうに重点を置いている。何遍も言いますとおり、ロマ書一〇章九節、一〇節は、原文においては一文でありまして、この一文のうちの始めと終わりに「称名」が出てきている。ですからパウロは、イエスが復活した、神がイエスを蘇らせたと信ずるといふそれより、信ずるよりも、口でイエスを主と言ひ表すというほうに重点を置いておる。ロマ書一〇章九節、一〇節を見ますと、すなわちパウロは信仰よりも称名に重点を置いている。ですから、これは「信仰による義人は、称名によって生きる」とすることが、パウロの精神にかなうと思います。

その以上三つが、この聖書の文句に対して私の注解を加えたい所。

第五には、これはこの前の日曜に話しませんでしたけれども、内村先生は「真理というものは考えただけでは分からない。実行してみても、自分が体験してみても初めて真理は分かる」と言われた。

私は誠に先生のこの言葉を思い出しまして、例えば散歩するということは健康にいいという真理、私はこれは真理だと思いますが、散歩というものが、歩くということが健康にいいというこの真理も、実行してみなければ分かんない。

冷水摩擦、冷水浴というものが皮膚の健康にいいということは、私は真理だと思います。これは実行してみなければ分からない。大正七年、八年、大きなスペイン風邪がはやりました、みな風邪ひいた。人がよく死んだ。そのときに私は旧制高等学校の寄宿舎におりました、毎朝冷水浴をやっていた。大きな水の風呂があった。毎日、水風呂に入っておった。そして、冷水摩擦をやっておった。そんなことをしていたのは私一人だけなんです。一つの部屋に二三人いた。一人風邪ひきました、僕だけが風邪ひかなかった。そういう経験をわたしは持っている。実験した人が知っている。私はこの実験して分かる、福音の真理も実験してみても分かる。称名の力、効力も実験してみても分かる。

私はもう人に対する説教はやめです。私は今日の信者第六〇年、伝道者第三〇年のこの礼拝から、人に説教することはやめです。私は自分に説教をしたい。自分にこの福音を知らせたい。今までは大きな声でしゃべっていましたが、これからは小さい声で静かに、小声でしゃべろうと思っている。人に説教しているのではないんですから、自分に説教してからです。大きな声を出す必要がない。

そう言っても私は、実際大きい声出しますよ。出しますけども、原則として小さい声でゆつくりと、自分

に話すというのが、これからの私の伝道方式。それは人に伝道するんじゃない、私は今日から、自分に伝道する。

真理は、自分が経験しなければ分からない。自分が福音を経験しなければ、人に言っても分からないですよ、自分が経験してこそ「小西はいつも称名している。いつ会っても静かな、平安な心を持っているな」、そういうふうになりたい。パウロ先生は六〇歳過ぎにしてイスパニアへ伝道しようと思っただけでしたが、私は今日から、私の体でまだ福音が行き渡ってないところへ、自分の体へ伝道してみたい。そしてこの自分の体を、福音によって照らすものとしていただきたい。そして続いて私の家庭、私の家庭に私の福音の光を分け与えたい。

伝教大師が、「一隅を照らすもの、これ国宝」と仰せになった。私も伝教大師の遺風を学んで、自分自身のこの一隅を照らし、自分の家庭の一隅を照らす者になりたい。

## 第四講 妙行を中心として

ロマ書一〇章一節―一三節、一二章六節―八節  
ヨハネ伝一四章三節

(昭和五一(一九七六)年二月一九日)

本日は当教会にとりまして二八回目のクリスマスでございますが、私個人にとりましては、伝道者となりまして第三〇回目のクリスマスを迎えるわけでございます。それから信者といたしましては第六〇回目のクリスマスでありますので、私にとりましては大変忘るべからざるクリスマスでございます。

本日は「妙行を中心として」という題をもちまして、私の現在の信仰、毎日の信仰生活について、それから私の願い、願望について、それから第三番目には私の神に対するお祈りについて、この三つについて申し上げます、クリスマスのお祝いを申し上げます。

「妙行を中心として」という題は、私「妙行」と申し上げているのですが、「妙」というのはとにかくありがたいということ、「行」は行ない、「妙行」というのは、そのことをすれば必ず救われる、そういうふうなことが聖書に二つ書いてある。それで私は、それを「妙行」と言ったのであります。

妙行の一つは、私は内村先生から聞いたのですが、「仰ぎ見る」、「主を仰ぎ見る」。仰ぎ見るというのはすでに、「モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子も挙げらるべし。すべてこれを仰ぎ見る者は救われる」という旧約の時代からの妙行であります。内村先生は昭和五年の三月にお亡くなりになりましたが、三月に私の知人である、先生の弟子が訪問した。ご病気は重かったが、先生はお会いになった。その弟子が言うの

に、先生お見受けするところ病気は重い、先生亡くなるかも分からん、そうですから「最期に一分でキリスト教の教義を伝えてもらいたい」と言った。先生は、ああそうかと言って、先生は「キリストを仰ぎ見よ」と言われた。

そのときには信仰という話もなく、望という話もなく、愛という話もない。「仰ぎ見よ」と仰せになりましたが、この「仰ぎ見よ」という字はロマ書には無い。ロマ書には「主の名を呼ぶ」、「わが主イエスよ、主は救い主なり」と告白するという、わが主イエスと呼ぶという行がある。

私は内村先生に学びましたが、この妙行の二つのうちでは、私は「主の名を呼ぶ」、「わが主イエスよ」と言う、名を呼ぶという行を取っている。

なぜ先生の弟子であるのに先生の行を取らずに、主の名を呼ぶという行を取ったかという点、これは私の実家が浄土宗ですが、浄土宗では「南無阿弥陀仏」と言って、救い主の名を呼ぶ。これは私の家だけでなく、あるいは日蓮宗において「南無妙法蓮華経」と言って救いの力を持っている法華経の名を呼ぶ。これはもう日本においては、自分の救い主の名を呼ぶということは千年にわたって研究している。そうであるので、私は妙行を選ぶときに、内村先生の「仰ぎ見る」という行を取らずに、「主の名を呼ぶ」という行を取った。特にこれはロマ書において、パウロが仰せになっておることでありますから、私はこれを取ったわけであります。

これを中心といたしまして、きょうはお話をしたいと思いますが、申し上げましたとおり第一に、私の現在の信仰について申し上げます。

内村先生は、自分の信仰を一つの文章でぱっと簡単に言い表せると、そうならなければ力にならないと言

われた。先生の信仰は今言うとおり、主を仰ぎ見よということなのだ、先生の一言は。

先生に倣いまして、先生の弟子ですからなるべく先生のまねをしたいと思うんですが、私の一言は「生きらば称名、死ねば天国」、これが私の一文。生きていたら主の名を呼ぶ、「わが主イエスよ」と言う。死んだら天国。今司会者に読んでいただきましたヨハネ伝一四章三節、はっきり書いてある。キリストが、お前らが死ぬときに私が迎えに行くと。そして私のおる所に、天国にお前もおらせると、ヨハネ伝一四章三節に書いてある。私はそれを信じまして「生きらば称名、死ねば天国」、これが私の一文であります。

これをもう少し引き伸ばしますと、「生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストを迎えらる。そのときの喜び、言葉をもつて述べべからず」と、こう伸ばすことができる。この文章は私の、自分のことはちっとも無い。「生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストを迎えらる。そのときの喜び、言葉をもつて述べべからず」。私は毎日これを言って、これを毎日実行したいと思っています。小さい範囲でそれを実行させていただいているのですが、この文句のうちで、私の考えというのは一つもない。

「生きらば称名」というのは、これはパウロの称名、パウロの考え。「このままで」というのは、私の尊敬します恵心僧都のお言葉に、妄念のままで念仏せよと、妄念のままで称名せよという言葉がある。「妄念のまままで」という字がある。その精神をとりまして「このままで」となる。「このままで」というのは自分の発明ではなしに、これは“Just as I am”という英語から来ている。“Just as I am” 自分に何も足す必要はない。そのまま、あるがままでやる。

「目の前のなすべきをなす」というのは、これは私の考えでない。これは今先生に読んでいただきました、

ロマ書の有名な一二章の初めの精神です。すなわち教える者は教え、説教する者は説教して、与えられた恵みにおいて説教をせよと言った。すなわち自分の前に置かれた仕事、自分の前に置かれた義務をまずするということ。ですから、自分のしたいことをするのではなくして、目の前の自分のなすべきことをなす。これは私の考えではなくて、パウロの考え。

それから「死ねば天国、キリストに迎えられる」と、これはヨハネ伝一四章三節の精神。

それから「そのときの喜び、言葉をもって述べべからず」。これは恵心僧都の有名な『往生要集』という著書がありますが、その著書に明記されているのですが、すなわち死んで救い主の国阿弥陀仏の国に生まれるとき、「そのときの喜び、言葉をもって述べべからず」と源信・恵心僧都は言った。私はその精神をとりまして、すなわち「死ねば天国、キリストに迎えられる。そのときの喜び、言葉をもって述べべからず」と、そうとったわけでありませう。

そうでありますので、この一文は私の考えは少しも混じっていない。これはパウロ、ヨハネ、源信のお三人のお考えが混ざってそこに出ているだけです。

私の信仰について、毎日の行ないについて申しあげた。それをもう一遍簡単に申しあげれば、これは心と口と手、三つに分かれているわけですが、心では、自分の行ない、自分の信仰によって救われるのではない、ひとえにイエス・キリストの復活の贖いの御功によってわれらは救われて永遠の命を与えられると、心ではそう思う。口では、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶ。手では、自分の目の前に来るなすべきこと、自分のなしたくないことではなしに、自分のなすべきことをなす。心と口と手、それが私のキリスト教。

くどいけれども言えば、

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えられる。  
そのときの喜び、言葉をもって述べべからず。

これが私のキリスト教であります。

以上、私の信仰を終わります。

その信仰につきまして、説明は終わったのですが、贖いということ、これが要するに私の心と口と手に現われてきた。何が現われてきたかと言えば、それはイエス・キリストの贖いが現われてきた。イエス・キリストの贖いが根本にある。イエス・キリストの贖罪ということが、私の心、口と手に現われた、そういうふうになってきた。それで贖いということについて、少し説明をします。

「贖罪」、このイエスの「贖罪」というのは二つの意義に考えられる。それはロマ書一〇章の九節に、心では神がイエスを復活させたと信じて、これによって義とせられる。それから口では「わが主イエスよ」と言って救われるということ、ロマ書一〇章九節、一〇節に書いてある。

そうですから、この救いということについて、救いというのは贖いで救われるんですから、その説明にパウロはイエスが復活した、神がイエスを復活させた、それを信ずるといふことと、信じて義とされるんですから、信じるということと、それからもう一つは、「わが主イエスよ、主はわが救い主である」と、そう言っている現わ世という二つをもって救いの条件としている。

これは、私は七〇の年に気づいた。主の名を呼ぶということが救いの条件となっているということに気がついた。今までは、七〇までは、私は贖いを信じたなら救われると思っていた。ところが七〇の年に、このロマ書をよくよく読んでみますと、信じると言ったら義とされる、救いが決まるだけ。救いが決まることは信

仰だけでいいけれども、今度は救われると、救いが実現するためには、主の名を呼ぶということを条件としている。そういうことに気がついた。

そういう意味におきまして、贖いには二つの意義がある。一〇章九節の前半、すなわち神がイエスを蘇らせた。すなわちイエスを十字架につけて、イエスを復活させて、そしてわれわれの罪とがを贖うて、贖いを成就した。九節の前半、これが贖いの第一の意義です。贖いの第一の意義はすなわち、われわれがイエス・キリストの復活によって贖われたという、これがその信仰の客体なのである。何を信ずるかと言えは、これを信ずる。これが贖いの第一義。

第二の意義は、九節の後半、すなわちイエスを主なりと告白する。これが九節の後半になっておりますが、これが贖いの第二の意義。この第二の意義はすなわち、贖いの信じ方を示している。贖いを信ずるとはどのようなふうに信ずるかという、信じ方を示している。信じ方は、「わが主イエスよ」という、そして信ずる。主の名を呼ぶということが、How to believe、いかに信ずるかということ、方法を示している。よろしいか。

贖いというのは二つの意義を持っている。これは、ロマ書一〇章九節に宣誓してある。前半は第一の意義、後半は第二の意義。第一の意義は、信じられるもの、信仰の客体を書いている。第二の意義は、すなわち信ずる方法を書いている。

これが以上、私の信仰の理解であります。

今度は第二に、私の願い、願望を申し上げます。私は、今日のこの第三〇回のクリスマススをきっかけといたしまして、人に説教をすることはやめます。これからは私自身に説教したい。毎日曜、人に話をする機

会があれば、それはその人に話しするのではなくして、自分自身に話ししているものとご理解願いたい。

それは内村鑑三先生が、日本に本当のキリスト信者が一人できたら、日本の国は改まると言った。私は先生の弟子ですから、少なくとも先生が希望しておられるような本当の信者になりたい。

私はこれからは人に説教することはやめて、自分自身に説教したい。毎日曜、こういう機会あって、話しをする機会があったらこれはその人に、相手に話しているのではなくして、自分自身に話していると私は思っております。今日のこの説教も、自分自身に説教してると思っております。これが私の願望。自分自身に説教したい、自分一人を教えたい、自分一人が真実のクリスチャンになりたい。これが私の願望。

第三には、最後には私の祈り。神様に祈ります。祈りは、私が死にまして、死んだ後二五年間の間に二人の人が、普通の人、学者だとか偉い人でない普通の人で、平信徒の伝道者で二人の人が、私が死んでから二五年間の間に二人の人が伝道者になってもらいたい。そしてそれは、自分の家で伝道を始めてもらいたい。ちょうど石館先生がこの家で伝道をお始めになっておるようなものです。自分の家で、初代教会のように自分の家で伝道を始めてもらいたい。

初めは、自分の奥さんと二人だけでやってもらいたい。「二、三人の集まる所、われもそのうちにあるなり」とイエスは言った。それで自分の家で、奥さんと二人で伝道を始めてもらいたい。

その人はなるべく、偉い学問があるとか、偉い人であるとかいう人を望まない。大工であるとか、漁夫であるとか、そういう人が望ましい。私がそうである。私はサラリーマンですよ。キリスト教のことは何も知らん。わたしは、内村先生から福音を聞いただけです。そうですから、サラリーマン、普通のサラリーマンでよろしい。つまり六〇歳で定年になったら、六〇歳から始めてもらったら結構。六〇歳から二五年、八五

歳までやつてもらえたらいい。二人出てもらえたらいい。

私は私の生きている間、信仰の友人を求めない。一人も信仰の友人を与えられなくてもいい。現在この私が生きている間に、信仰の友人を得ようという考えを持っていない。それは聴きに来てくれたらいいですよ、嬉しいですよ。聴きに来てくれたら嬉しいけれど、私は君たちに求めていない。私は死んでから二五年の間に、平信徒の伝道者が自分の家で二人、伝道者が出てくれたらありがたい。

私、ちよつと計算してみた。その二人が出るような、そういうふうな私は信者になりたい。私の弟子から二人伝道者が出るような伝道者になりたい、私は。死ぬまで、これから勉強するつもりでしています。

それを計算しますと、五〇〇年後には一〇〇万人できる。一〇〇万人以上になる、五〇〇年後には。ですから私もこれから勉強して、キリスト教の信仰を分かせてもらえる可能性があるんですよ。本当のキリスト教とはどういうものかということに分かる可能性はある。

また私かもしれないその可能性があつて死んだら、また二人弟子が出る可能性があるんですよ。それがもし可能性があるとすれば、その可能性がいけば、五〇〇年たつたら一〇〇万人、一〇〇万人の伝道者ができる。一〇〇万人の伝道者ができたら、日本の国は変わる、確かに。

私は五〇〇年は長いと思わない。私の最も尊敬して、最も真剣に読む本はロマ書です。二〇〇〇年前に書かれた本です。その次に読むのは源信・恵心僧都の書かれた文章。これは九〇〇年前に書かれた文章。だから一〇〇〇年、二〇〇〇年、九〇〇年は問題になりません。そんなものは問題にならない。

「古今に通じて謬らず 之を中外に施して悖らず」と明治天皇は言った。私の祈りは、私の死後二五年の間に親しい伝道者二人。それも学問のない普通の大工、漁夫が望ましい。

## 第五講 夏休み中の三大発見

### ロマ書一〇章一節―一三節

(昭和五二(一九七七)年九月二一日)

今日は順序からいきますと「信仰生活の基礎」と題してエペソ書講解の第三回目、エペソ書四章一七節から二四節までの講義をいたすことになっておりますが、その前に、「夏休み中の三大発見」と題しまして、三つの気づいたことを申し上げたいと思います。

三大発見と仰々しいのですが、発見と申しますのは、私がこの八〇年の生活において初めて気づいたこと、それで「発見」という字を用いました。それから、大なる発見と「大」と付けましたのは、私にとりまして非常に大きなことでございましたので、「大」という字を付けまして「三大発見」とさせていたできました。ご了承願います。

私は、ご存じのとおり、キリスト教の信仰ならびに学問につきましては、年はとっておりますけれども、幼稚でありますので、私が発見と申ししても、既にキリスト教の二〇〇〇年の歴史において、先輩方がちゃんと味わっていらつしやることであるかもしれません。たぶん、そうでしょう。私が無学なために、自分で発見と申しておりますけれども、これは既に、二〇〇〇年のキリスト教の歴史において先輩たちがお味わいになって、もう筆になつて残っているのかもしれない。私が、ただ知らなかったから発見と申しているわけでございますから、これまたご了承願いたいと思います。

八月二一日八月の第三日曜日、この日は村山(愿)君が「妙行」ということで証言してくれました。私は

いつも日曜日の朝は、大体その日の説教の本文を日本語と、貧しい知識の英語とドイツ語とギリシャ語の四カ国語で、当日のテキストの文章を読むことにしております。

八月二二日は、村山君が「妙行」という題で話してくれましたから、ロマ書の一〇章一節から一三節までを読んでおりましたが、日本語で読んでおりましたときに気づいた、二つのこと。

第一は一〇章の四節、「キリストが律法の終わりとなられた」と、このことでもあります。これが、今まで気づかなかった。

律法というのは、既にロマ書三章二一節の講義のときに申し上げましたごとく、内村先生がおっしゃった、律法・道徳・宗教・すべての教えと見てよろしい。

そうですから、この律法のほかに神の義が現われたという、そういうふうなものと、「ほかに」という字は、内村先生はこれを「無関係に」と言われた。

その律法という字を思い出しまして、この律法の終わりとなられたというのは、律法のうちには宗教も含まれておりますから、宗教のうちにも最も大切なことは「信」と「行」なんです。行ないと信仰なのです。

そうですから、イエス・キリストは、信仰と行と、二つの終わりとなられたということに気づいた。終わりという字は、これは日本語でも英語でもドイツ語でも「終わり」と訳してありますが、原語は「終わり」という意味のほかに、英語で言ったら「goal」「決勝点」という意味がある。

そうですから、決勝点に着くということとは、日本語で言えば完成を意味する。そうですから、このイエス・キリストは、平たく言えば信仰と行ないとの完成ということなんです。

われわれは、行ないについての悩みは信仰で解決できるように思っていますし、この信仰の問題について

はいつも引つ掛かる。最後に、引つ掛かるのは信仰なんです。

われわれは、誰でも一〇年も二〇年もキリスト教をやられた人は、「いや、私は信仰がありませんから、私は信仰がありませんので」と言つて、謙遜のごとくわれわれは申しますけれど、そう言う必要はない。信仰も、行ないも終わりとなるから完成なんです。

コリント前書一章三〇節に、「イエス・キリストはわれらの義、聖、贖いとなりたまえり」。あの言葉は、われわれのすべてとなられた。すべてというのは、信仰も行ないも皆含まれている。

いつも言うとおりストレプトマイシン、結核菌を殺す力は、ストレプトマイシンがすべての力を持っている。

そうですから、われわれはこの信仰ということについて議論し、それに悩む必要がない。その律法の完成、イエスを信じること、真とすること。

「信じる」という字は、非常に皆難しく言うんですが、これは例えばストレプトマイシンを飲むとか注射するということ、それは難しいと言わんでしよう。結核菌を殺すのは、ストレプトマイシンにある。

われわれが永遠不滅の命をいただくのは、イエスの贖いによつてゐる。それを信ずるといふのは、それを本当とすること。

だから、ルターが信仰のみによるといふのは、われわれ人間側の信仰を振り回しているわけではない。贖いだけということ。それを、真として受けるといふことです。

そうですから、これは私は、内村鑑三先生が、福音の理解は、既に日本の仏教、浄土門が旧約であると見てよろしい、実に日本の仏教浄土門が、すなわちこの福音を証明していると見ていいと、おっしゃいました。

私は、この信ずるということを理解するのに、われわれ先輩の浄土門の祖師方、あるいは善導、源信、源空という方々がおっしゃったことは、非常に注意する必要がある。

善導大師は、信ずるといふ字を取ってしまつて、「まさに知るべし、称名する者は極楽へ行くこと」と言われた。だから「知るべし」、「知る」と言われた。だから、「知る」といふ字がいいか。もう一つは、「受ける」といふ字がいいかしらん。「receive」、この字がいいかしらん。

そうですから、要するに私は、もうキリストで完全だ。われわれは信仰、行ない、何一つプラスする必要はないということが、このキリストの「贖いとなりたもうた」といふ、この文句によつて一層、コリント前書一章三〇節の意味が明らかになつた。これが第一点。

第二点は、ロマ書一〇章六、七節。「しかし、信仰による義はこう言っている。あなたは心のうちで誰が天に上るであろうかと言ふな。これは、キリストを引き下ろすことである。また、誰が底知れぬところにあるであろうかと言ふな。それはキリストを死人の中から引き上げることである」。

この六節、七節の意味が分からなかつた。その日の朝、こういうふうには私は解釈が浮かんだ。「あなたたちは、だれが天に上るであろうか」と、天に上るといふことは人間の努力なんです。これは、そうしたら、行ないの方にしてみましようか。すなわち、行ないといふ努力をもつて、天に上つて救いを得ようといふことを言ふな。

それは、この人間の努力といふものは、キリストを引き下ろすこと。キリストを引き下ろすといふのは、復活したキリストを引き下ろすことになる。復活したキリストを引き下ろすといふのは、復活といふのは贖いの成就ですから、贖いを邪魔し否定することになると、私はこう解した。

それと同じく、「誰が底知れぬところに下るだろうかと言うな」というのは、底知れぬというのは人間的な努力、これは、信仰の努力と見てよろしい。

信仰のためにどういう努力をして、どういう信仰を持ってというふうには、信仰のことをかれこれ言うな。そういうことを言うことは、キリストを死の中から引き上げることになる。キリストが死んだのは十字架なんだから、十字架から死んだそのキリストを、十字架から引き上げることになる。すなわち、キリストの贖いの行為を邪魔することになる。贖いを否定することになるんだと、そういうふうに私は解釈した。

ですから、ここは人間的努力、すべての人間的努力、行ないの努力、信仰の努力、学問の努力、そういう努力は、イエス・キリストの贖いを邪魔することになり、贖いを否定することになるんだぞという、パウロのこれは警告なんです。そう解した、それが第二点。

第三点は、「主の名を呼び求める者はすべて救われるべしとあるからである」と。

これは八月二八日、ここで畑中(至純)が証言しました。畑中が証言しまして、三つの点について証言した。そして、第三の点において、畑中が第三の最後の点において、「私は称名、イエスの名を呼ぶことを先生から教えられているが、どうも怠慢であつて興味はない」、悲しいとき、苦しいときには「わが主イエスよ」という言葉は出るけれども、元氣なときには出てこない、これもしかし、出るように学びたい」ということを言われました。

私はそのときに、後で「畑中、それでいいんだ」、われわれみたいなこの俗物は、悲しいとき、苦しいときだけでよろしい。そのときだけに「わが主イエスよ」と、畑中、おれもおまえも一緒だ。元氣なときには、そんな称名というものは出てこない。悲しいとき、苦しいときに「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と

言ったらいいんだと、言った。

この一三節には、何遍言ったら救われるということは書いていない、一遍でもいいんだと、私はそう言った。

そうしたら、金子（金一郎）長老が、「これは、今日いいことを聞いた。一遍でもいいのだったら、皆及第。これはもう、これでいこうか」と金子兄弟が言っていました。

まさに、これは一遍でよろしい。数は書いていない。称えれば救われると書いてあるから、これは「How often」ということは書いていない。これは、われわれみたいな俗物は悲しいとか苦しいだけにしか出てこない。

そうですから、悲しいとき、苦しいときだけでよろしい。われわれは死ぬまで、悲しいとき、苦しいだけで「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と言ったら、必ずキリストは迎えに来る。八月二八日に、そういうことを分かった。

これは、エペソ書を学んでいるときに、こういうことが分かったということが誠にありがたい。エペソ書の三章八節には、「無尺蔵のイエス・キリストの富」という有名な字が出てくる。

親鸞は、「願力無窮がんりきむきゆうにましませば散乱放逸さんらんほういつもすたらず」と言った。救いは贖いの力にある。ストレプトマインシにある。

以上、今日はこれで休ませてもらいまして、三大発見で終わりました、次の第四日曜日にエペソ書第一六講をやらせていただきます。今日は、これをもちまして終わらせていただきます。

## 第六講 お彼岸中に示された一つの大発見

ロマ書三章二節、一〇章一節—一三節

(昭和五二(一九七七)年九月二五日)

司会者に読んでいただきました、エペソ書の四章一七節から二四節まで、これの大意を話すことになっておりますが、それに入ります前に、大げさに「一つの大発見」と書いておきましたが、このお彼岸中に示されました真理を申し上げたいと思います。

この二週間前の第二の聖日に、私は「夏休み中に示された三大発見」と大げさなことで申し上げましたが、その「大発見」という字は大げさな字でございますけれども、私にとりましては発見、この八〇年の生涯において新しく発見したことでした。私にとりまして大きなことでした。そうでありますので、大発見という字を付けましたが、きょうの気づきましたことも、私にとりましては八〇年の生涯で新しいこと、私の生涯の信仰にとりましては大きな出来事。そうですから、「大発見」という字を用いさせてもらったこと、前回のとおりであります。

その「発見」とか「大」とか申ししても、私はキリスト教の学問につきましては非常に無学でありますので、既に二〇〇〇年の歴史において学者たちが申しておられる、もう既に、こういうことをはっきり文章になって申しておられるということがあるかもしれません。そうですから、そういう場合には、私の無学、無知のためでありますのでお許しを願いたいと思います。

端的に申しますと、「信ずる」、「イエスを信ずる」、また、「イエスの救いを信じる」、あるいは、「イエス

を神の子と信じる」、あるいは、「神の義を信じる」、あるいは「神の愛を信ずる」、「神は愛なりと信ずる」、  
こういうふうには、「信ずる」ということはたくさん聖書に出てきますが、これはみんな内容は同じことな  
です。

これは、「神の義を信ずる」と同じでありまして、「イエス・キリストの贖いを信じる」ということです。  
言葉はいろいろになっておりますけれども、聖書にヨハネ伝あるいはロマ書、いろいろ字は変わっております  
すけれども、内容は同じことです。「イエスの贖いを信じる」ということです。

これを、はっきり知っておく必要がある。「イエスを信ずる」と言っても、どこをどういうふうに信じて  
いるかということによって皆結果が違う。

そうですから、聖書に「イエスを信じる」、あるいは「イエスを神の子と信ずる」、あるいは「イエスの救  
いを信ずる」、あるいは、「神は愛なりと信ずる」と言ったら、その内容は、神がイエスをこの世に遣わして、  
そしてわれわれの罪とがを贖って、われわれに永遠に命を与えてくださったという、その贖いを信じること  
をいう。これを、はっきり知っておく必要がある。何十年、教会に来ていても分からない人が多い。

それから私はきょうの発見というものは、「贖いを信ずること」と、「イエスの名を呼ぶこと」とが同じで  
あるということが分かった。「イエスを救い主と信ずること」と、それから「わが主イエスよ」と唱えるこ  
とが、同じであるということが分かった。

その根拠として三つ挙げます。これが、「イエスの贖いを信ずるということ」と、「イエスの名前を称える  
こと」、「わが主イエスと称えること」は同じであることが分かったということが、これがこの彼岸中の大発  
見なのです。

その理由、根拠を三つ挙げます。

第一の根拠、これは『よろこび』四月号に、英文で書きました。ここに既に表れている、その言葉。よく読んでください。

これは、ロマ書一〇章の一一節から一三節についての私の講解が書いてありますが、これは由来、キリスト教信仰というものは聖書の文句による。聖書の文句に明らかな根拠がなければ、それはキリスト教信仰とはいわない。キリスト教信仰というものは、聖書の明文にはつきりした根拠が必要になる。

ロマ書一〇章一一、一二節、「聖書は、『すべて彼を信じる者は失望に終わることはない』と言っている。ユダヤ人とギリシャ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである」。

この一一節、一二節を読んでください。これは、聖書はすべて彼を信ずる者は失望に終わることがないと書いてある。そうですから、「彼を信ずる者」と言ったら、どうする者かということを一二節は説明している。そうですから、一二節は信仰、「彼を信ずる」ということは、どういうことであるかという説明と見てよろしい。

この一二節には、「恵んで下さるからである」という「から」という字が書いてありますが、原語ではこの一二節の初めに「その訳は」という字、英語でいう「for」という字があるんです。

そうですから、これは「彼を信ずる者は失望に終わることはない」。「彼を信ずる者とは、どうすることか」ということを説明しているわけです。

だから、この一一節、一二節をよく読めば、彼を呼び求めるといふ称名、彼を呼び求めるといふことが、

彼を信ずるといふことと同じ意味であるといふことがこの文章からはつきり分かる。

これが、私が「贖いの信仰」と、「イエス・キリストの名を呼ぶ」のは同じであるといふ根拠の一つ。これは、『よろこび』四月号に私の英文をもつて書いておきました。よく読んでください。

第二の理由、これもロマ書の本文から。三章二二節とこの一〇章一二節とは、三章二二節の方は、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義であつて、すべて信じる人に与えられるものである」。「神の義」といふもの、すなわち「神の義」といふのは「贖い」です。「贖い」といふものが、信ずる者に与えられると。原語は、「与えられる」といふ動詞はありません。これは、「信ずる者の方に」といふ前置詞なんです。英語の「for」は、「その方に」といふ字なんです。そうですから、その「神の義」といふものは、信ずるすべての人に向かつていふといふ字なんです。そうですから、二二節は、ここは信ずる人に、すべて信ずる人に向かつていふとなつていふ。

それから、一〇章の一二節の方は、彼を呼び求めるすべての人に、「恵んでくださる」といふ動詞になつていますけれども、これも原語は「向かつていふ」といふ字なんです。三章二二節と全く同じ前置詞。そうですから、これはすなわちイエス・キリストの恵み、恵みといふのは贖いです。神の義と一緒、贖いと一緒です。贖いが、彼を呼び求める方に向かつていふ。その方に向かつていふといふ前置詞は、原語の前置詞は、その向かつていふといふ字と、その向かつていふ中へずっと入っていくといふ意味がある。

原語の前置詞では、その方に向かつていふといふのが、その方の中へずっと入っていくといふことになる。そうですから、三章二二節の神の義は、贖いは、すべて信ずる人に向かつてその方へずっと入っていく。だから、この訳は与えられると訳していふ。

一〇章一二節は豊かに恵んでくださると書いてある。これは神の恵みが、イエスの贖いが、彼を呼び求める人にずっと向かって、その中へ入っていくという、全く同じ言葉。三章二節と一〇章の一二節は全く同じ言葉です。

そうですから、全く同じだ。パウロは、信ずるということと彼の名を呼ぶということは、全く同じ意味に解している。この期間にこれが分かった。

第三の理由。「信ずる」ということは心の状態でしょう。信じて、贖いを信ずるとか、自分は罪人であると、万人すべては罪人であると信じてとか、あるいは神の子とせられたと信じてとか、復活を望むということとは心の状態です。

この心の状態、信ずるということ、すなわちロマ書八章までに書かれたことは心の状態なんです。この心の状態は、われわれは怒り、悩み、それから心の乱れておるときには、この信仰とわれわれの心の乱れとは共存しない。

よろしいか。われわれの心が乱れているときは、信仰の望みというのはもうない。われわれは危ない。信仰を望むだけに頼っている、いつなくなるか分からない、いつも隠れている。

ところが、称名、名を呼ぶということは、心の乱れと共存しうる。恵心僧都は、「妄念のうちより称名せよ」と言った。

私は、この意味において、同じであるというよりも、信仰より称名の方が優れていると信ずる。なぜかという、乱れた心と共存しうる。信仰、望みは、乱れた心と共存し得ない。

これ、以上三つが、私の称名と信仰と同じであるという根拠です。

## 第七講 称名の意義

### ロマ書一〇章一節―一三節

(昭和五二(一九七七)年一〇月二三日)

私が伝道師として説教を始めましたのが、昭和二二年の一〇月の第三聖日でございまして、ちょうど三〇年前であります。それは本所緑星教会の信者のお宅で集会をもった。昨日のごとく思うのであります。当日ご出席のうちのお二人が、きょうも出席していただいているのであります。

そうでありますので、この前の日曜日、一〇月一六日の聖日は、私の三二年目の最初の説教の日でありました。すなわち、伝道第一の三〇年を終わりました、第二の伝道三〇年の第一日がこの前でありました。

本日は第二回目の聖日でございますけれども、この前の日曜日は佐生(健光)君が話してくれました。そうでありますので、本日が私の伝道第二の三〇年の初の説教であります。

どういってお話をしたらいいかと思っておりましたが、前の日曜日からちよつと健康の具合が悪うございまして、ふせつてずっと床についておりましたから、聖書の勉強の準備もできませんので、今まで既に聖書の理解について与えられている場所につきまして、すなわち本日司会者に読んでいただきまして、ロマ書一〇章一節から一三節について、これを「称名の意義」と題しまして、大意をお話ししたいと思います。

最初この講義に入りますまでに、過去三〇年の私の伝道生活、説教生活といえますか、そしてその私の信仰を一瞥したい。

最初の昭和二二年三月の第三聖日の説教は、ヨハネ伝三章一四節、一五節の、いわゆるイエスのお言葉、贖いの信仰、これを仰ぎ見て救われるという、このヨハネ伝三章一四節、一五節の説教をいたしました。

この第一回目の聖書講義の講解説教は、三〇年続きました、ことしの一〇月、一日で終わりました三〇年間を、一言にして尽くしたような説教でありました。すなわち、この贖いの説明というものは、実に私の三〇年間の説教を要約したものでありました。誠に今から考えてみて、私として正しき聖書講解であったと思います。

由来、キリスト教の信仰は聖書の文句による。聖書の言葉による。聖書の言葉を離れて、正しき信仰はあり得ません。

それから、その時の贖いの信仰、そしてこれは誠に、私三〇年聖書を勉強させていただきました、贖いということが、これが聖書の中心であり、聖書の中心であるというよりも聖書の全部であります。イエス・キリストの贖い、神がイエス・キリストを世の中にくだして、われわれ罪人を贖って、われわれに永遠不滅の命を与えてくださったという、これは聖書の中心の問題であるのみならず、これは聖書全体です。そういうことは聖書を勉強すれば勉強するほどはつきり分かる。

幸いにして私は良き先生内村鑑三を与えられました、教会をつくって信者を増やすとか、あるいは大きな教会堂を建てるとか、そういうことは少しも考える必要がなかった。内村鑑三先生が「もし日本に一人の信者ができたならば、日本の国が変わる」と言われた。ですから、われわれはそういう先生から講義を聴いたものですから、決して信徒を増やそうとか、大きな会堂を建てようとか、そういうようなことは全然思っておりません。もし私の聖書の説教が、その一人の信者が、本当の信者ができるために少しでも役立つならば、

私の伝道説教は成功です。

この三〇年の私の説教は、そういう先生から学びましたから、従って聖書の勉強になりました。そうすから三〇年間、毎日、病氣その他の事情がない限りは聖書に親しむことができて、少しく贖いの聖書の意義、すなわちイエス・キリストの贖いの意義が分かった。

三〇年にして少しく分かったと申しましても、その分かり方が、司会者が祈ってくれましたが、聖霊は徐々に下る。そうですから、この贖いの理解というものは、聖霊の降臨によって贖いの理解ができる。聖霊の降臨の無きところ、贖いの理解が起こつてこない。

そうですから私の贖いの理解は、夏休み中の三大発見とか、あるいはこの九月に示された彼岸中の一大発見と申しまして、本年七月、八月、九月、一〇月上旬と、このころに贖いの理解が少しずつ進んできた。はつきりしてきた。そうですから、三〇年の私の信仰生活を顧みるときに、その大部分は三〇年ぎりぎり、二九年数カ月にして分かった。そうですから、古人が言いました言葉に「百里を行く者は九十九里をもつて半ばとす」という言葉がありますが、私はこの言葉が実に味わい深い言葉と思うのであります。

そして三〇年間聖書を読ませていただきました、この聖書の信仰、贖いの信仰というものは、聖書の勉強と深い関係があることを知りました。由来、深い聖書の勉強なくして深いキリスト教の信仰は起こつてこない。

私は確信する。内村鑑三が終始聖書の研究をもつて終わられ、彼の説教は終始聖書講義をもつて終わった。そういう先生に会ったということは、非常に私は幸福と思います。そのまねをしたい。

前置きはそのぐらいとしまして、本日の聖書講義。

説教の重大なる中心は聖書の講義です。聖書の正しき理解なくして信仰は起こってこない。繰り返し、このことは申し上げて差し支えない。諸君もそういう時間があるならば、繰り返し、少しでも聖書をお読みになることを勧める。聖書の最も良き注解は聖書の本文それ自身。

ロマ書一〇章一節から一三節までは、もし健康が許されましたならば、第三回のロマ書講義をする時にこれを譲ります。その時に詳しく申し上げます。本日は時間がありませんし、準備もしておりませんし、全く一節から一三節の大意にとどめます。ご了承ください。これは既に、この場所は最近、私、三大発見とか一大発見と申しまして説明した場所でありますから、繰り返しになりますからどうぞご了承ください。簡単にしたいと思います。

○一節「兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈りは、彼らが救われることである」  
○二節「わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない」

○三節「なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである」

○四節「キリストは、すべて信ずる者に義を得させるために、律法の終わりとなられた」

ここに同朋の信仰の誤りを指摘しておられますが、これがわれわれの信仰の誤りです。われわれは聖書を信じていると言っておりますけれども、自分の義を立てて、聖書を参考に読んでいただけです。自分の義を振り回している。自分の分かるところだけ聖書を読んで、そして聖書を読んだような顔している。そうですから、少しも謙遜に聖書を学ぶという精神が無い。自分の分かるところだけずっと読んで、「ああ、聖書はこんな

ものが書いてあるな。ああ、こうだな」という、自分の考えを振り回しているだけです。われわれは自分の考えを主として、聖書の考えを従としてやっている。それが、すなわちこれです。救いの書いてある贖いの義をわれわれは認めない。そうでしょう。すなわち神の義、贖いの神の救いを認めないで、自分の考えを振り回している。

そういう者を救うために、キリストは律法の義となられた。律法の義の終わりとなられた。律法のうちには道徳も含まれますから、律法の終わりといったら、律法の中には道徳も宗教も含んでおりますから、そうです。すなわちこれは「宗教の終わりとなられた」と、こう解している。

宗教のうちには信仰と行ないを含みますから、終わりとなられたと言ったら、キリストは信仰の終わり、行ないの終わりになられたと、そう解釈できる。この言葉は非常に大切な言葉でありまして、われわれが行ないをもつて救いにあずかろうとし、また、われわれは信仰が足りないからと言って信仰ということで心配しておりますけども、われわれの行ない、信仰の終わりとなられたと、この意味であります。

終わりというのは、これは原語では英語の "Goal"、決勝点という意味があります。決勝点というのは「完成」の意味ですから、「終わり」という意味は「完成された」。キリストの贖いはわれわれの行ないの完成であるということをよく理解しておりますけど、われわれの信仰の完成であるということをわれわれは理解しない、まだ。そして、いつまでも「わたしは信仰がありません」「信仰がわたしは薄いです」と言って、信仰でわれわれはごたごたやっています、すなわち行ないの解決と共に、信仰の解決をキリストはしてくださっている。注目すべき場所であります。

○五節「モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いている」

○六節「しかし、信仰による義は、こう言っている」

モーセは律法による義を行なう人は生きると書いている。「しかし私（パウロ）は」です、信仰による義はこう言っている。これは軽々に読むべき場所ではない、この五節、六節こそは、これは旧約聖書を放棄した場所です。放棄というよりも、放棄という言葉はまずいが、旧約聖書を廃棄して、完成した場所です。

キリスト以外にこういう言葉を言った人は、私はいないと思います。これは、パウロが、キリストの霊を受けて書いた言葉でありまして、この言葉は誠に宇宙的な言葉です。モーセ以上のことを私は、キリストによつてこれから言う、ということをやった。

○六節（続き）「『あなたがたは心のうちで、誰が天に上るであろうかと言うな』。それは、キリストを引き降ろすことである」

○七節「また、『誰が底知れぬ所に下るであろうかと言うな』。それは、キリストを死人の中から引き上げることである」

これは、この前説明いたしましたから簡単にいたしますが、要するに、天に上るといふ努力、また地に下がるという努力、これは信仰的努力、あるいは行ない的努力、すべてを含めてよろしい。その信仰的努力あるいは行ない的努力というものは、イエス・キリストが十字架に上つて復活して天に上りたもうた、このイエスの贖いを邪魔する、それを妨げる行為になると、こういうことをここで言っている。

ですから、われわれは信仰のため、われわれの救いをかち得るために行なう人類のわれわれ人間の行為というものは、キリストの贖いの力を邪魔している行為である。

信仰の言葉とは、

○九節「自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる」

○一〇節「なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである」

これは私の説明を待つまでもありません。よく読んでください。

イエスが死人からよみがえったと信ずる、これはイエスが贖いを成就したということを信ずることです。贖いを成就したということは、自分は贖われたと信ずる。自分は贖われたと信ずるといふのは、自分は復活する者とされたと信ずる。

そうですから、口では「わが主イエスよ」と言って、そして心では「自分は復活させてもらう者である」と信ずる。これが救いの条件。ここにパウロは救いの条件を二つ挙げた。口の条件と心の条件。口では「わが主イエスよ」と言う。心では「自分は復活させてもらう者である」と。これが救いの条件です。これで全条件。九節、一〇節、これがパウロは、述べている信仰だと言った。

ここで終わったらいいのに、不思議にパウロは一節、一二節、一三節を付け加えた。九節、一〇節の二節をよく玩味しますれば、これで救いは完成している。一節以下を付け加える必要はない。それにもかかわらずパウロは一節から一三節までを付け加えて、九節、一〇節の意味を述べ伝えた。説明した。

それは、この九節、一〇節のイエス・キリストの贖いの力の強さ、深さ、無限の贖いの力、深さをパウロは説明して、九節、一〇節では救いの条件として二つ挙げて、心で贖いを信じて自分は復活する者である、天国に行く者であると信じて、口では「わが主イエスよ」と言う、口と心と二つ条件を挙げましたが、一節以下では、称名だけになっている。贖いを信ずるといふ「信ずる」が消えている。「わが主イエスよ」

と主の名を呼び求める者、「わが主イエスよ」と言う者に贖いの富が与えられると、そういう文句になっている。

よく読んでみてください。これは原語で読めば、「主の名を呼ぶ」という字は、何遍も同じことになりますけども、九節、一〇節に「主の名を呼ぶ」という字は原語では「告白する」という字になっている。「告白する」という字は、言うことを自分でそれに同意して、それを認めるということです。「告白する」という原語の意味は、英語でいえば agree とか acknowledge とか、そういうことになる。「イエスは救い主なり」と告白する。

「告白する」というのは、そういうものに同意し、そのものを認めておると、「救い主と認めている」という「告白する」という字になっている。□で言い表すことになっておりますけども、一一節以下では「告白する」という字が消えてしまって、「呼び求める」になっている。「イエス様、イエス様」と、名前を呼んだらいい、ということになっている。厳格にこの言葉からいえば、イエスが救い主であると、贖い主であるということ信じ、これを認める必要はない。一一節以下では条件になっていない。そうですから、非常に簡単になっているんですよ。□で「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と、「お母さん、お母さん」というようにいさえすればいい。

「告白する」というのは、えらい難しい言葉ではないですよ、「わが主イエスよ」という言葉は。呼び求めるといえるのは、口を動かしただけでよろしい。万人ができる。これが「称名の意義」です。

もう少し詳しく申し上げたいと思いますけれども、といっても同じことでもあります。どうぞ、聖書ロマ書一〇章一節から一三節まで、これはひとつ、繰り返し繰り返し読んでいただきたい。牧師の説教を必要とし

ない。あなた方は分かる。これを繰り返し、繰り返し、繰り返し、繰り返し読んでいたら、聖霊自身が教える。

これからまた私の第二の伝道三〇年が始まります。何カ年間、天が許しますか、それは分かりませんが、モーセは一二〇歳まで生きた。私のような弱い人間でも来年死ぬとは限らない。まだ、いつまでいるか分からない。そうですから、私の生きている間は聖書を勉強して、皆さんと一緒に聖書を勉強したい。そしてここでは、過去三〇年間やってきましたごとく、必ず聖書講解説教をもって皆さんに相對したい。

それから最後に、内村先生が「われわれの信仰が一つの文章になるまでは力がない」と、「自分の信仰生活を導く力がない」と仰せになりました。私は先生その言葉に励まされて、私の信仰を一つの文章にしました。最近できた文章でありますから、これを、何遍も言っていますから、皆さんご存じでしょうが、もう一遍申し上げます。

生きれば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えられる、その時の喜びや如何。されば、生くるも死ぬるも賜物。

ちよつと注解を加えますと、「生きらば称名、このままで」、このままです。大切な言葉。この「このまま」というのは、「称名する」方にも掛かるし、「目の前のなすべき」方にもかかる。目の前のなすべきをなすのに、えらい力こぶを入れてやる必要ない。自分のそのままで、このままで自分のなすべきことをなしたらよらしい。

「死ねば天国、キリストに迎えられる」、「迎えられる」というのは、自分が行くのではない。迎えられるから、キリストが迎えに来る。ヨハネ伝一四章一三節を見たまえ。「われは迎えに来る」。お前を私の所にいるため

に私は迎えに来ると書いてある。

それから「死ねば天国、キリストに迎えらる、その時の喜びや如何。さらば、生くるも」、生きて称名している称名も、これは賜物ですからね。毎日の日々のなすべきことをなす力も、これは神から頂いている。みんな賜物ですから、「されば、生くるも死ぬるも賜物」。

## 第八講 信仰より称名へ

### ロマ書一〇章一節—一三節

(昭和五二(一九七七)年二月二五日)

クリスマス、おめでとうございます。本日の説教は大体五つの点について申し上げたいと思います。

第一の点は「いかにして救われるか」という問題であります。石館守三先生に読んでいただきました聖句によりますと、ロマ書一〇章の九節、一〇節では、救われる条件が二つ書いてあります。

一つには心、信仰であります。すなわち、イエスが復活したもうて、そしてわれわれの罪咎とがを処分して天に帰したもうた、われわれの贖いを成就したもうたという、このイエスが我々の救いを成就、復活したもうたこと、それを信ずることとあります。すなわち「わが救いは成就せり」と、そう信ずることとあります。これが一つの条件。

それからもう一つの条件、第二の条件は、「イエスはわが主なり」と口で告白すること。「わが主イエスよ」と称えるということ、称名、これが救いの条件になっております。

ゆえに九節、一〇節では、「信仰」と「称名」と二つが救いの条件になっております。

救いとは、いつも申し上げますとおり、これは永遠の命を頂くことであります。すなわち、現世においては神に、イエス・キリストに守られ、そしてこの世が終われば来世において天国へ帰り、そして時来たならば復活して、イエス・キリストの復活と同じ体を頂き、永遠無限に神とともに生きる、これが救いの内容であります。

われわれクリスチャンは、この救いということについてははっきりと知っておく必要があります。

この救いの条件は、今申すとおり九節、一〇節では二つ、「信仰」と「称名」と二つありますが、一二節、一三節になりますと、信仰という条件が無くなっております。ただ一つの条件になっておりまして、「主の名を唱える者は救われる」というただ一つの条件になっております。これは注目すべき、驚くべきことです。

これは心の状態を信仰無くして、ただ口で唱えるだけで救うという、この無限の神の知恵、これが一二節、一三節に展開されておりまして、これこそはロマ書の画竜点睛ともいべき場所でありまして、ロマ書のみならず、これが新約聖書の画竜点睛ともいべき場所であります。それゆえにペテロも、あのペンテコステの大説教において、「主の名を呼び求める者は救われる」という、このヨエルの預言をひいて大説教を展開したのであります。

そして、この「称名だけで救われる」という、われわれが称名するということがすなわち、よくよくつらつら考えてみますと、神の称名のこの救いをそのまま実行しまして「わが主イエスよ」と称えますと、称名しますと、これはイエスを信ずる信仰が含まれている。

例えばいつも言う例ですけれども、「ここから高円寺東教会に行くにはどこに行きますか」と言ったら、「ここを出て、そこを曲がって、環七を通って、もう少しいらっしやると行くんだ」と教えてくれたら、「そうですね」と言っておりに言われたとおりにずつと歩いていくと、高円寺東教会に行ける。そのことは、その人の言ったことを、その人を、教えてくれた人を信ずることになる、歩いていったら。そのとおりにしたら。

そうですからわれわれは、「わが主イエスよ」と口で称えれば、イエスを信ずるといふ信仰が含まれている。これは驚くべき神の知恵であります。以上、救われるためには、われわれは「わが主イエスよ」と称えれば足る。

今度は第二の点に入ります。われわれが救われる、すなわち救われて称名するようになりますとどういふご利益があるか、という点に入ります。

消極的ご利益は、われわれに平安が臨むということです。われわれの心に平安が臨む。イエスが「われは平安を残す」、「平安を与える」と、これは、この世の与える平安ではないんだと言われた、この平安。すなわち、天国を望む平安。この平安が臨む。これはイエス・キリストがわれわれと共にいます、守っていてくださる、死ねば天国と、この心が消極的にわれわれの心が安らかになる。これがご利益であります。

また積極的ご利益になりますと、その消極的ご利益によってわれわれは、自分のなしたことをなすのでなくして、なすべきことをなす力が与えられる。分相応に、己に勝つ力が与えられる。これは積極的ご利益です。己に勝つ、なすべきことをなす、このご利益こそは、この力に、われわれ人類がどれほどこの力を持っているかということに、人類の幸福はかかっている。

パウロという人は「私はなしたい善はなすことはできない」と、「なしたくない悪をなしている」と、「この死の体より救わん者は誰ぞ」とロマ書七章で声をあげましたが、この救いにあずかって以後、ついに彼は「われは、われに力を与えるキリストによって何事をもなし得る」と豪語した。そして言葉で言ったのみならず、彼の生活をもって証明した。これがご利益であります。

このキリスト教のご利益は実に実に、この救いというものは実に、内村先生の言葉をもって言えば――こ

れは、内村先生の言葉を申し上げます。

「福音、もしいたして神の真理ならば、わが民族の過去において包有せしすべての良き信仰、良き思想、良き精神を満たすものでなくてはならない。すなわち、わが民族の過去において包有せしすべての良き信仰、良き思想、良き精神は、福音の裏書きたらねばならぬのである。そして、われらはそのことをしかりと断定するのである。実にわれわれの祖先の抱きたる最も尊きものは、さらに純化せる姿において福音のうちに満たされるのである」

と先生が仰せになっていますが、私も「然り、福音の内に完成されるのである」。

私は内村先生の言葉について、先生の「純化」ということに対して、私は「完成」という強い言葉を使いたいと思います。すなわち、われわれの祖先が抱いた、あるいは念仏の信仰、あるいはお題目の信仰、あるいは禅宗の座禅の信仰、あるいは武士道、あるいは儒教、そういう粋が実にこの福音のうちに完成されている。故に、一〇章四節においてパウロが言っている「キリストは律法の終わりとなった」。あの終わりという原語は決勝点という意味がありますから、Goalという字です。そうですから、あれは「完成」と訳したらい。

故に、このキリスト教の救い、称名こそは、われらの祖先が持ったすべての思想、すべての信仰の完成です。パウロの言葉で言えば「テロス」。

第三の点に移ります。第三の点は、キリスト教の真理というものは人知を超えている。生まれつきの人知を超えている。人知をもってしては分からない。これは、そのまま素直にそれを実行するしか手がない。イエスは「幼子のごとくならなければ天国へ入れない」と仰せになった。この間の消息を言う。内村鑑三先生

は「真理は考えただけでは分からない。実行してみたら分かる」と言われた。真理は、真理それ自身が証明する。天理教のおみきばあさんは「学者と金持ちは後回し」と言った。

私も最近、分相応に称名を実行しまして平安を与えられ、また自分の前に置かれた小さな義務を少しずつ実行させていただいて、誠に平安な人生を送っております。諸君もどうぞ称名をして、平安な人生をお送りになるようにお勧めいたします。これが第三番目であります。

第四番目には、私、旧制の高等学校を終わって六〇年になりますので、われわれの旧制高等学校の同窓が最近、感想を書き合いました。小さなパンフレットになっておりますが、その中から私の文章と、私の一人の友人の文章と二つ紹介したい。私はキリストを信じて称名をしておりますし、彼のほうは信仰の無い方ですから、二人の文章をひとつ聞いてもらって、比較して聞いてもらいます。

私の文章は「向陵三年信仰六〇年」と題しまして書きました。向陵というのは、私の旧制第一高等学校の寮のあった所、今の農学部になっている場所でありますが向陵と申しましたから、「向陵三年信仰六〇年」、私の文章。

「大正六年（一九一七年）九月、中寮一〇番の部屋に入寮した。同室には、英法では佐々木、樋口、独法では大村、仏法では前田、工科では兎玉、山田、農科では中野、医科では橋本、余語の諸君が頭に浮かぶ。中野君の紹介で、小石川白山教会の米国宣教師ミス・モークを訪ね、同年一〇月より白山教会の集会に出席することとなり、爾来現在まで六〇年続いて、キリスト教の集会に毎日曜出席することになった。中野君との出会いは、私の一生の流れの方向を決めることになった。

「中寮一〇番は神聖なところ、朝のはよから後光がさす」とデカンシヨ節は、誰がつくってくれたか

はつきり記憶はしないが、頭に残っている。

翌大正七年（一九一八年）五月、白山教会にて、ホーリネス派の監督、中田重治師の特別伝道集会において、『イエス・キリストの血、すべての罪よりわれをきよむ』の福音に接し、英法の笹垣、新谷、石井の諸君と共に、翌六月二日、同教会にて洗礼を受けた。この日はちょうど四〇年前、一八七八年六月二日、内村鑑三先生他数名が受洗された記念の日であった。

同七年一〇月、中寮七番在室中、英法の松沢君より、内村鑑三先生が神田キリスト教青年会館にて説教あるを教えてください、幸い先生の集会が日曜日の午後であったがため、一〇月より引き続き出席することにした。

この年のクリスマスの内村先生の集会の集会は、この神田キリスト教青年会館で行われた。そのとき先生は不敬事件の実情を話され、「私の頭の下げ方の角度がこの程度であったためだ」と、先生が実演されてお見せになったような記憶である。

翌大正八年（一九一九年）五月より、先生の集会は大手町の私立衛生会館に移り、集会の時間も午後より午前が変わっていった。そこで、ここでの先生の集会は大正一二年六月まで続く。

私は毎日曜白山教会の朝のバイブルクラスに出席して、直ちに大手町の内村先生の集会に出席した。表門は一〇時に閉まったが、裏門は一〇時半まで開いていたので、かろうじて間に合った。大正一〇年一月より大正一一年一〇月まで二カ年続いた先生のロマ書の講義は、私のキリスト教信仰を決定した。すなわち、大正七年の五月に白山教会で聞いた福音の意義がはつきりした。

話は前後するが、大正九年六月一九日、英法の一高卒業謝恩会が赤門前の燕楽軒で催された。数名、

所感を述べたが、私も阿部君に次いで所感を述べ、「君たちは将来、学者、政治家、実業家として活躍されるだろうが、私はキリスト教の伝道師になりたい」という意味のことを述べた。向陵三年の生活が、私をして日本の外交官より天国の外交官に希望を変えさせた。

爾来五七年の歲月は流れた。二二年間は会社員の生活。その後、伝道者の生活に入ることができ、数年前よりは、英法の鈴木（秀夫）君夫妻が私の小さい集会に出席していただき、向陵三年間に学びし「イエス・キリストの血、すべての罪よりわれをきよむ」の福音を、毎日曜共に学ばせていただき、口マ書の著者パウロの学び、日々おぼろげながら天国に近づきつつあることを信知して、「わが主イエスよ」と主の名を呼びつつ、自分の目の前の小さい義務を尽くさせていただいていることは、誠に筆紙に尽くしがたい喜び、また感謝である。

なお、大正一〇年、一年に内村先生より学びしロマ書講義は、昭和三六年、三七年に第一回目、昭和四六年、四七年に第二回目はこれ終わり、もし健康が与えられるのなら、昭和五六年、五七年に第三回目の講義をしたいと思います。

筆を擱おくにあたり、向陵の運動場において夜を徹して、共にイエス・キリストの名によって祈りし英法の新谷（旧姓神原）、佐々木の両君。および、一高卒業の夏休みに一緒にモス・モークを訪問して彼を紹介した英法の広野君。彼は熱心なる求道者となり、大学卒業後直ちに伝道界に入るの準備をなし、一、二年にしてこれを実現し、私は二〇年遅れて彼に続き、一高英法卒業同期二名の伝道者を出すのレコードを向陵七五年史のうちに残すことを得たのは、誠に幸いである。

「百里を行く者は九十九里をもって半ばとす」と先人は言った。廣野は、天国に行ったが私はまだ修

業中だ。

なお大正八年八月、英法の土田と共に恩師島村先生を奈良県郡山市のご自宅を訪問し、「仏教浄土門の信心を学ぶためには、法然上人の『和語灯録』を読め」との教訓を頂き、爾来『和語灯録』は引き続き六〇年座右の書として、日々信仰の真の意義を教えられつつある。

以上、英法の新谷、佐々木、広野、土屋に対し、深き感謝をささげたい。天国における再会を待ちつつ。これが私の文章であります。

今度は友人の文章。

「ことしになってから体の具合が悪くて、何をするのも億劫だ。もう俺も死に日が近づいたのであると思う。夜になってもなかなか寝つかれない。毎晩一〇時ごろになると床に入らんだが、なかなか寝つかれない。一一時、一二時と時計の進むばかり気になって、目はますます冴えてくる。一時か二時ごろだろうと思う間になって、やっと眠りに落ちるらしい。朝五時になるとパツと目が覚める。枕元のラジオのスイッチを入れてラジオを聞く。それが八時ごろまで。それから床を出て、顔を洗って食堂に行く。四つの新聞を見ながら食事をする。それが一〇時ごろまでだ。用事があって出掛けなければならぬならば、そのまま午後三時までサンルームに座ったままだ。

こんな具合で毎日、大概済んでしまう。外出も億劫だ。だから家におるときは多い。家におればテレビを見ている。どこへ行つて何を食べようという意欲も起らないし、何を見ようとする望みもない。こんな毎日を送っていていいのだろうかという反省が時々起こることがある。しかし、これを破ろうという野心が起らない。破ろうという勇気が起らない。俺も老いたなと思うばかりだ。もちろん

ん将来のことなんか考えようとしな。将来なんかありはしないのだと思う念が強いようだ。

以上は夕べ書いた。ちょうど風呂呂に入っている時、氷室君から電話がかかって、『待つているから何か書け』との申し入れだ。先月だったか、先々月だったか、『学生時代の本郷の食べ物のことを書け』との命令だったので、よかろうと引き受けておいたものの、さて書こうとしたら以上のようなものにとんでもないものになってしまった。もう氷室君との約束を果たすつもりはない。

それにしても、『将来なんかありはしないんだ』とは言い過ぎではないかと思つて消そうと思つたら、夕べ書く時は確かにそう思つたのだから、消しにくくなつたのでそのままにしておく。

あしたは午後、銀座へ行く用事がある。顧問をしている人のためだ。あんまり良い仕事ではないが、頼まれれば仕方がない。

こんなことを繰り返している毎日である。こんな日を重ねていくうちに一生を終わるのだろう。これが私の毎日だ。五二年八月二三日午後八時」

この私の友人は弁護士、裁判官をしております、大きな裁判を二つも三つもやった、皆さんも名前を知っていらっしやる裁判官だったが、これが彼の最近の感想。

彼が一月二五日に肺炎で死にました。この文章を読んだ後で死にましたのですが、数日前、夜、夢にこの友人が立って、ひゅーっとよその人に寄りかかっている、死にかけて。そしたら私が「おいおい、おい、小西じゃ、小西牧師じゃ。しっかりせい！」私は言った。この友人が「ああ、俺は信仰がないからな」と言った。それで私は「キリスト！ キリスト！ キリスト！」と言った。そしたら目が覚めた。そしたら家内がわっと起こしにきて「あんた、何をやかましく、何を言うてるんですか」と。「いや、俺は友人の夢を

見ていて、『キリスト、キリスト』と言ったけれど、『キリスト』だけ言って、キリストをどうせよ、ということ言うてないんだ」と。

そうですから私は、これをどう言ったらいいかなと考えて、私は過去三〇年の間「キリストを信ぜよ」と言っていた。過去三〇年の伝道は「キリストを信ぜよ」「キリストの贖いを信ぜよ」ということを、私は過去三〇年説明していた。ところが、きょうの題目に書いておいたとおり、「信仰より称名へ」と書いてあります。私は現在であるならば「おいおい、おい、ほら、小西牧師だ。イエス・キリストの名を呼べ！」と、そう言いたいと思う、私は。称名を勧めると思う、私は。これが私の三〇年の伝道の転換です。

この一〇月、(昭和)五二年一〇月第三日曜から、私の第二の三〇年の伝道が始まった。第一の三〇年の間は「イエス・キリストを信ぜよ」「イエス・キリストの贖いを信ぜよ」という伝道であったが、これから第二の伝道は「イエス・キリストの名を称えよ」、「称えようではないか」。「人に称えよ」ではない、「自分が称えよう」という伝道に展開した。

これが第四であります。

時間は進みますが、第五、ついでに五分間ほどご辛抱願いたい。

第五、私の先生と弟子の信仰。私がここで今言った島村清吉先生の信仰です。私に仏教、浄土門を教えてくれた先生。これは先生の説教の一部。

「弥陀の本願を信じて、この世における間に弥陀の光明のうちに接取されますと、心がいつも極楽にかよっていますから、『御恵みの光はるかにかぶりばや 何につけても嬉しかりける』。幸福なことがあると、これほどのことでさえこのくらい嬉しいのに、極楽往生したらどれほど嬉しかろうかと喜び、また

不幸な目に遭えば、これは娑婆のありさま、浮き世のならないである。この世はこの世界である。しかし、いまに西方極楽へ往生させてもらったら、福智無量の身としていただけると、幸、不幸、ともに、何につけても嬉しかりけるであります」。

これが先生の信仰。

それから弟子の信仰。この先生の弟子、私たちの先輩。これは弟子の言葉、私がこの耳で聞いた言葉。

「先生は大学者であられましたが平凡でありました。先生の念仏も、また平凡な念仏でありました。私は年老いて（七〇ぐらい）盲目となり、最近病魔に侵され、世間から見ると逆境ではありますが、念仏からみると非常に順調であります。この平凡なる念仏の味をしみじみ味わうことができ、感涙にむせんでおります」。これが七〇の老人の病魔の感想。私が耳で聞いた。

以上、第五、終わり。

そういうわけでありますので、言いたいことは言いましたが、内村先生の言葉をもつていえば、すなわち「キリスト教がもし神の福音ならば、日本の祖先が持つておったすべての良き信仰、すべての良き思想、尊きものが純化された形において福音のうちに満たす」と内村鑑三は言ったが、私は「この福音において完成される」、パウロから言えば「テロス」。アーメン。

## 第九講 死に勝つ生涯（その一）

### ロマ書八章一四節―二五節

（昭和五三（一九七八）年一月一日）

新年おめでとうございます。私も第八〇回目の正月を本日迎えたわけでございますが、去年の一〇月第三聖日より私の伝道第二の三〇年に入っております。そうですから、本日は私の第二の伝道三〇年の初の新春でございます。

準備がないものですから、「新年所感」と題しまして、感じますまま、六つの点について簡単に所感を述べたいと思います。

所感に入ります前に、ちよつと一言。千葉県佐倉市の志津へ毎月伝道に行っておりますが、これは当教会を始める昭和二四年より前、昭和二三年のクリスマスから行っているわけですから、志津は第三〇年目になっています。一二月はちよつと健康が優れませんかですから佐生（健光）君が代わりに行ってください、大変恵まれた集会を持つことができました。出席者一四、五名であったようですが、出席した方数名から感想を頂きました、まことに恵まれた集会、私が行ったよりも恵まれた集会を持ったような様子でありまして、私が召されましても佐生が志津に近いですから月に一回ぐらいは行ってくれましょうから、もう私の後継者ができておりまして、何だか非常に嬉しい感じがいたしました。

それからクリスマスが済みましてから体の疲れが取れないようでありまして元気が悪くて、今日も、（石館）基君が「先生どうですか」と言っって顔を見てくれるんですが、昨日も来てくれて、「先生、ご気分が悪

ければ、私が代わってこの間のクリスマスの説教を要約して今日また話しますから、先生どうぞ休んでください」と昨日言ってくれたのですが、「いや、基君、まだやれるから」と言つて断りました。これも私が召されましても、高円寺東教会は解散という段取りになりますけれども、基兄弟のうちでの家庭集会は引き続き行われることと思しますので、どうぞ私亡き後は、基君の家庭集会へご出席していただきまして、基君に励ましながらに監督していただきまして、私がここで述べ伝えた福音がいよいよ語り継がれることを希望しております。

前置きはそれにしまして、本日の感想に入ります。

今日の感想は「死に勝つ生涯」となっておりますが、「死に勝つ生涯」というのは、これは「喜びの生涯」と言つてもいいと思います。本当の喜びというものは死に勝つ生涯において味わうことができるからです。

第一について、私の二人の先生の生涯について簡単に述べます。

一人は内村鑑三。内村鑑三の生涯は、五十いくつかの御時に一人娘を亡くされまして、そしてそのなきがらをうずめる時に、ルツ子は娘の名前ですが「ルツ子、バンザイ」と言つて埋骨の墓の土をうずめられたそうであります。これを聞いて矢内原忠雄先輩が「キリスト教というものはすごい」と思ったそうであります。内村先生の信仰もそのころからいよいよ筋金が入ってきたのではなからうかと思つてあります。

先生が言われたのに「われわれの信仰が簡単な一つの文で言い表せるようにならないと力がない」とおっしゃいました。「力がない」というのは、私は「死に打ち勝つ力」と解していいと思います。われわれの信仰が「私の信仰はこうだ」と簡単に一言で言えるようにならないければ、われわれの信仰には死に打ち勝つ力がない。

いつも同じ話になりますから、お聞き苦しいけれどご辛抱して聞いていただきたい。

内村鑑三が昭和五年三月二八日に亡くなりましたが、その数日前、弟子が先生を訪ねて、先生のご病状が重い、先生がお隠れになるかも分からん、だから「先生の信仰を一言で言い表してほしい、教えていただきたい」と弟子が言ったら、先生は「主イエス・キリストを仰ぎ見よ」「仰ぎ見よ」と言われた。「贖いを信ぜよ」とも仰せにならないし、あるいは「天国の望み」とも仰せにならない。「復活」とも仰せにならない。「聖書の勉強」とも仰せにならなかった。ただ「主イエス・キリストを仰ぎ見よ」と言われた。

私は先生の生涯は、先生が死なれる時には、主を仰ぎ見て死なれたと思います。先生のすべては「主を仰ぎ見る」ということに尽きている。これは単純な行為でありまして、主を仰ぎ見るということは、誰でもできると。

ヨハネ伝三章一四節、一五節には、イエス・キリストのおっしゃった言葉に「モーセ荒野においてへびを上げしごとく、われも上げらるべし。すべてわれを仰ぎ見るものは救われる」と仰せになった。「仰ぎ見る」というのは、これはヨハネ伝の言葉です。ロマ書には無い。そうでありますので、あのくらいロマ書を研究された内村鑑三先生が最期には「自分の信仰は主イエス・キリストを仰ぎ見る宗教だ」とおっしゃって、ロマ書に無い文句をもって先生の一生を貫かれた。これが一人の先生の生涯。

それから私の浄土門の信仰を教えていただいた先生で島村清吉という先生がありますが、今度はその先生の生涯についてちよつと語ります。これは既に二回、一月、一二月に語っておりますので、重ねてになりますがご辛抱願いたい。この先生の信仰については少しく語りたいですが、今日は健康もあまり優れていないし、そして時間もないのでまたの時にしまして、先生のエッセンスだけを申し上げます。これは二回も話

してありますが。

島村清吉先生の信仰、生涯、これは先生のお書きになったご自分の文章です。

「弥陀の本願を信じて、この世における間に弥陀の光明のうちに摂取されますと、心がいつも極楽に通うておりますから、御恵みの光はるかにかぶりばや何につけても嬉しかりける。幸福なことがあるとこれほどのことでさえこれくらい嬉しいのに、極楽へ往生したならどれほど嬉しかろうかと喜び、また不幸な目に遭えば、これは娑婆の有りさま、浮き世の習いである。世の中はこの苦しみの世界である。しかし、今に西方極楽へ往生させてもらったら福智無量の身としていただけると、幸、不幸共に何につけても嬉しかりけるであります」。

こういう信心を持つておられました。

先生の信仰を語るついでに、この先生の弟子の一人に牧浦という弟子がありました。私より三〇ぐらい年上でした。牧浦さんが七〇ぐらいの時に私が訪ねた。訪ねたら、牧浦さんは七〇ぐらいの年で、目が見えない。そして病気で苦しんでおられた。何の病気であったかは私ちよつと記憶しません。その時の牧浦さんの話に「小西さん、私の先生の島村先生は大学者であったが、平凡であった。先生の念仏は平凡な念仏であった、私は今、年を取ってめくらになって、また最近病魔に冒されて、まことに世間から見れば逆境でありますけれども、念仏の信仰からは非常に順境だ。毎日この先生の平凡な念仏を学んで感涙にむせている」と言われた。

私はそれをこの耳で聞いた。聞いた時は私はまだ四〇になっていない。当時はその信仰がどれほどすごい信仰ということが分からなかった。今になって分かる。これは相当すごい信仰だということ。これが私た

ちの島村先生の生涯。

われわれの祖先がよく読みました観音経というお経がありますが、観音経の文句の中に「生老病死の苦、漸をもつて滅せしめたもう」とあります。生・老・病・死、これは仏教では「四苦」、四つの苦しみと言っておりですが、「生」というのは、これは生まれる苦しみですか、生きていく苦しみか分かりませんが、「老」は年寄りの苦しみ、「病」は病気の苦しみ、「死」は死ぬ苦しみ。この四つの苦を人類の四つの苦しみとしておりますが、それは「漸をもつて滅せしめたもう」。観世音菩薩がだんだんだん自然に無くならしてくださる。

そうお経には書いてありますが、生老病死と四つの苦しみがございませけれども、生・老・病というのは死の苦しみの一部分です。死の苦しみに打ち勝つことができたら、生きる苦しみ、「老」年寄りの苦しみに病気の苦しみに勝つことができる。内村先生のように仰ぎ見ることができたら、また島村先生のように「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」ということ、念仏ができたら死に打ち勝つことができる。死に打ち勝つことができたら、本当の悲しみ、苦しみに打ち勝つことができる。すなわち、己に打ち勝つことができる。何遍も言いますが「己に打ち勝つ力」、ここに人類の幸福がかかっている。

今度は第二の話に移ります。第二はパウロ先生の生活。今日司会者にロマ書八章一四節から二五節まで読んでもらいました。ここを一つ講義したいですが、これは第三回のロマ書の講義に譲りまして、一九八一年、一九八二年ごろになりましょう、今日は時間が無いから、八章の一八節だけ簡単に申し上げます。

○一八節「わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」

これは、私の最も好きな聖句の一つであります。

パウロは「今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると」、すなわち、天国にイエスを迎えられて、そして時が来たらば復活の体をもらう、すなわち天国へ行つて復活させてもらうというこの栄光の体、この栄光の生命に比べると、「現在の苦しみは問題にならない」と言った。ここに死に打ち勝つ力がある。死に打ち勝つ力があり、悲しみに打ち勝つ。死に打ち勝つ力はすなわち生きる力。生きる苦しみ、年取る苦しみ、病気の苦しみ、悲しみ、苦しみすべてのものに勝ちうる力の源はここにある。パウロはまさに復活の望み、「わたしたちは見ないことを望むなら、わたしたちは忍耐して、それを待ち望むのである」と二五節に言っておりますが、「われは永遠の冠を目当てに走る」とパウロは言いましたゆえに、パウロはこの復活の望みを持って走った。ゆえに彼は死に打ち勝つの生涯を全うした。

今度は第三番目に移ります。第三番目には私の生活についてちよつと簡単に申し上げます。私の生活はいつも申し上げているとおり、内村鑑三先生の勧めによりまして私も一文を書きましたが、

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国キリストに迎えられる、その時の喜びやいかん。されば、生きるも死ぬるも賜物なり。

と、これが私の信仰告白であります。

何遍も言うとおりの、「生きらば称名、このままで」ですから、生きたら「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と、このままで言つたらいい。私の「このまま」という字は、just as I am。そうですから、悲しいとき、苦しいとき、そのまま「わが主イエスよ」と言う。僕でもできますよ。可能です。このままで言うことは。朝起きたら「主イエス」と床で称えて起き上がる。御名を称えて今日も歩まんと。そうですから「わ

が主イエスよ、わが主イエスよ」とこのままで言う。

そして「目の前のなすべきをなし」と。これも、「このまま」で目の前のなすべきをなす。そうですから「このまま」という字は「目の前のなすべきをなす」にかける。「このまま」という字は称名するほうにもかかるし、目の前のことをなすほうにもかかる。そうですから、腹立ったまま、嫌々と思いつながら、心が乱れたままで目の前のことをしたらいい。このままですから、三の力だったら三の力でしたらいい。これも可能です。目の前のなすべきことをなすのですから。「このまま」というのはそういう意味です。

だから僕らみたいに、これ以上大きな声で五〇分も話を出来なかつたら、やめてもいい。しんどくなつたらやめますよ。そういうわけで、私の義務はこのままでやっただけだから、易い。可能です。

そうですから、このままでやっただけいい。このままで。腹が立っていたら腹が立ったままで、学問が無ければ学問の無いままで、やっただけいい。私も本当に無学、無徳のままでやっている。聖書講義をしている。そういうわけでありまして、私の信仰は

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国キリストに迎えらる、その時の喜びやいかん。

死んだらキリストが迎えに来ると書いてある。それは、イエスが来ると書いてある。ヨハネ伝一四章三節、私が行って、あなたがたを迎えて、私のおるところにあなた方もおらせるためである。イエス・キリストがうそを言いますか。迎えに来てくれると思つて少しも間違いがありませんよ。私は行く。そうですから、天国へ行って、その時の喜びやいかん。

浄土へ迎えらるる時の喜び、これを恵心僧都が書いた、「その喜びやいかん」。また恵心の先輩である善導

大師が「浄土へ行った時のその喜び極まりなからん」といった。善導や源信はうそは言わない。彼らの言葉を信じて間違いない。「お経の言葉を信ずる者は、必ず衆生を正しく導く」と善導が言った。われらも聖書の文句を信じたら間違わない。

これで第一、第二、第三を言った。四、五、六とあとの三つは、私もちょっとまだ元気がないから、今度の一月八日の日に四、五、六を話したい。八日は第二日曜で私の説教の責任になっておりますから、またこの第四、第五、第六は八日の日曜日、汁粉を御馳走しますから、どうぞお出で下さい。今日は私がうぐいす餅をごちそうしますから、お茶を飲んで帰ってください。今日はこれくらいにしておきましょう。半分にして、第四、第五、第六は八日の日にいたしましょう。

## 第九講(続き) 死に勝つ生涯(その二)

(昭和五三(一九七八)年一月八日)

新年おめでとうございます。

去る一月元旦の聖日に、新年所感と題しまして、六つほどのことを話したいと思つて所感を述べましたが、三つを述べましたら時間がまいりまして、あとの四、五、六の三つは今朝お話しすることになりましたので、元日にお出でになつた方は、初めの部分は繰り返してお聴きになることになりましたけれども、どうぞご辛抱願ひまして、新春所感と題しまして、「死に打ち勝つ生涯」という題で新年の感想を申し上げます。ご了承ください。

それでは引き続きまして、第四、第五、第六を申し上げます。

第四番目は、祝祷の文句。「イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり、汝らととしえにあらんことを」というあの有名なパウロの祝祷の文句ですが、あの祝祷の文句の解釈を変更いたしました。これが第四番目であります。

祝祷の文句の解釈は、今まで「イエス・キリスト、天より下りたもうて、人間の身をとり給ひ、終生、目の前に置かれたる義務を尽くされ、その大部分は低き労働者の大工としてその義務を尽くされ、最後には十字架を負うて殺され、昇天して天にお帰りになり、そして成就してくださいました私たちの贖いの恵み、この御恵み、この神の愛を聖霊の御働きにおいて信じさせていただきまして」という、その「信じさせていた

だきまして」というところを訂正いたしましたして、「この神の愛を、神は称名としてわれわれにくだされました。それ故にわれわれ、わが主イエスよと称名することによって神の子とせられ、永遠の命を頂きました。かるが故に、われら日々称名しつつ、手にくる義務を忠実になすことができる力、その聖霊の力、天国に入るまでわれわれと共にあらんことを」。そういうふうには私の祝祷の説明の文句を、「信仰」という字を「称名」に変えました。それが第四であります。

第五は、「わが主イエスよ」という称名の意義、ならびに功德、ご利益について語りたいと思います。これは、人間の言葉をもってしては説明できない。称名のご利益というものは人間の言葉では、もうこれは説明できません。私の気付いた点、ちょっと簡単に一一を挙げてみます。

第一は、救いの条件を満たすことになるのですから、これは贖いの無限の恵みを自分に吸い取るようになるのですから、われわれに、神の子たるの信仰、それから復活の望み、これがいよいよ確かになってくる。救いの条件を満たしつつあるのですから、神の子たるの信仰、復活の望みがいよいよ深くなってくる。これが第一。

第二は、神の意思を行なうことです。愛の行ないです。キリスト教で「愛」というのは、すなわち「わが主イエスよ」と言うことです。「わが主イエスよ」と称名することが、これが人間の行なう愛の絶頂です。

第三は、神が贖いの恵みを、無限の恵みを、称名として人類に提供されているのですから、それを真受けに受けて「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と言うことは、神に対する感謝、報恩になる。神に対して感謝し、神のご恩に報ずることになります。「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と言うことは。

第四、これはさきよの「死に打ち勝つ生涯」の中心になってくる。死に打ち勝つ力が与えられる。「わ

が主イエスよ、わが主イエスよ」と言うことは、死に打ち勝つ力が与えられる。

戦国時代に高山右近という小さい大名の信者がおりました。これは旧教でしような、旧教ですから「わが主イエスよ」と言ったか、聖公会の「主よ、憐れめ」と言ったか知りませんが、「わが主イエスよ」と言ったでしょう。高山右近の兵隊は戦争で強かったそうですね。これはきつと「わが主イエスよ」「主よ憐れめ、主よ憐れめ」と言つて戦争しているんですから、死を恐れていない。死を恐れていないような、こんな兵隊は強いですよ。負けない。首がちぎれてもまだ言っている、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」。だから將軍が「攻めよ」と、司令官から命令が来たら、ぱーっと鉄砲を持つて向こうに行つて、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と攻めて行くんですから、強いですよ。私はよく分かりませんが、豊臣秀吉も高山右近には手を焼いたのだからと思う。要するに、死に打ち勝つ力、これは称名から来る。

第五に気が付くことは、これは祈りになる。「主の祈り」をイエス・キリストが教えた時に、「汝ら、かく祈れ」という時に「御名をあがめさせたまえ」という字が初めに来ている。「わが主イエスよ、わが主イエスよ」という称名は、祈りになる。これは現世、来世に通ずる、これは祈りの親方です。大抵われわれは祈りと言つたらわがまな祈りをしています。「わが主イエスよ、わが主イエスよ」というのは、これは祈りになります。クリスチャンの祈りです。

第六は、万人に可能です。これは、万人に可能です。誰でもできる。万人に可能。万人が出来る、これが好きです。万人に可能ということ。

法然上人のお言葉に「男女、貴賤、行住座臥、時、所、諸縁を論ぜず、これを処するに難からず、乃至、臨終に往生を願求するに、その便りを得たりと、恵心の先徳の書き置き給える、誠なるかなや」と法然が

言った。

第七、世間のことは三次元でありますけど、称名は第四次元の消息の言葉です。

第八には、人相が変わってくる。称名するまでは「俺が」というような傲慢な顔をしているけれど、称名をし出してくると、穏やかな、人相が変わってきます。

第九には、喜び、平安がついてくる。

第一〇、神の子たるの信仰、復活の望みですから、主ともにいます。主と聖霊がともにいます。

第一一、健康、長寿。これに勝るものはない。栄養の滋養分とか、あるいは妙薬、薬とかいうのは問題にならない。健康、長寿、これが一番。私みたいなこんな弱い、半分死にかかっている人間が八〇まで生きていくというのは、これは称名のおかげです。私はそう見ていいと思う。他のことは忘れてもいい。健康、長寿のために称名しましょう。

第六番目の感想。第五の称名のご利益というのは分かったのですが、第六の私の感想は、日本民族ならびに人類の将来に対する私の感想です。伝教大師が比叡山を興す時に「一隅を照らす人をつくるために、私は比叡山をつくる」と言われた。「一隅を照らす人」。死に打ち勝つ人は、一隅を照らす人になる。一隅を照らすことができる人になる。死に打ち勝つ人、この人が日本民族の将来、人類の将来を決定する。

以上、私の新春所感、六箇条を終わりました。

## 第一〇講 私の信仰

ルカ伝二四章一節―一二節

ロマ書一〇章一節―一三節

(昭和五三(一九七八)年三月二六日)

本日は三つの点において申し上げたいと思います。第一は、キリスト教の信仰というものが非常に難しい、非常に困難であるということについて申し上げたい。第二には、そのキリスト教信仰の内容。これはもちろん私の小さな理解であります。第三番目には、この日曜に非常に感じました出来事がありましたので、その出来事を申し上げます。

第一、キリスト教の信仰というものが非常に難しいということについて申し上げます。これは、キリスト教信仰といえは決まっている。イエス・キリストの十字架の贖罪の信仰と復活の信仰です。これが非常に難しい。五年や一〇年で分かるものではない。一生かかって分かるものです。内村鑑三は「聖霊は徐々に下る」と言った。聖霊が下ってこれが分かる。人間の生まれつきの知恵では分かりません。知恵を超えている。そうですから、聖霊が徐々に下ってこれを明らかにしていただく。

その困難であるという一つの証拠を挙げましたが、きょう石館(守三)先生に読んでいただきましたルカ伝二四章の復活の記事。ペテロ、ヨハネ、十一弟子、これは、三年間イエス・キリストに直接教えてもらった弟子です。三年間、朝な夕な、イエス・キリストから直接に聞いた弟子。それも「私は十字架にかかって人のために命を捨てて、三日目に復活する」ということを死ぬ前にちゃんと行ってあった。しかるに、い

よいよ復活が起こって、あの婦人たちが天使に示されて復活の事実を報告した時に、彼らは信じましたか。ノー、信じなかった。愚かな話を聞いたと書いてある。いかにこの信仰が難しいか。

このイエスの十字架と復活と、ここにキリスト教信仰が含まれているし、われわれがこの十字架と復活によって成就したもうたイエスの贖いを信じて、われわれは神の子とせられて永遠の命を頂いて、天国へ帰って復活するものとなるのですから。キリスト教の全部はここにあると見て差し支えない。

その証拠に、十字架、復活と、この最後の一週間の記事に、マタイ伝、マルコ伝では、あの長い伝の三分の一を最後の一週間の記事で使っている。ルカ伝でも四分の一の長さを持って最後の一週間の記事でことを書いてある。ヨハネ伝のごときは半分、二一章のうちの一〇章を使ってあの最後の記事を書いている。これがキリスト教の中心であるということは聖書の分量から見ても分かる。

しかるに、このことが難しい。弟子たちが信じないのみならず、使徒パウロ彼自身が教えたコリント教会、その教会でも、コリント第一の文を見たら、ごたごたやっている。信じていない。われはペテロにつく、われはパウロにつくとか言っただけで、イエス・キリストの贖いと復活が分からない。いかにこれが難しいことであるかが分かる。われわれは終生、これにへばりつく必要がある。

ヨハネ伝の第六章を見ますと、イエスが自分は命のパンである、「わが肉を食らい、わが血を飲まざるものは永遠の命がない」と、自分の贖罪の死と、そして永遠の命のことを話されたら、それより以来、多くの人はキリストから離れた、と書いてある。そうでしょう、ヨハネ伝第六章を見たら、いよいよイエスが「俺の命、俺の血を飲まなければ命がない」ということを言われて永遠の命を話されたら、弟子たちは「彼を去った」と書いてある。それでイエスは十一弟子に向かって「汝らも去るか」と聞いたと書いてある。いかにこ

れが難しいかということが分かる。

五年や一〇年や二〇年ではいかんですよ。義務教育の最低の教育でも九年かかる。一つの外国語をやるのでも一〇年かかるでしょう。いわんや、永遠不滅の命を自分のものにするのに五年や一〇年でできると思ったら間違い。霊の問題です。自分が分かっていると思つたら、めくらですよ。イエスがヨハネ伝において、めくらの問答の時に「汝らは見えるというから罪が残っているんだ」と。われわれは信仰があると思つているのは、信仰がない証拠です。謙遜と忍耐とを持つて終生、学ぶ必要がある。

困難であることについてはもつと言いたいのですけど、時間が無い。いかに難しいかということの証拠に、内村先生の文章、復活の信仰だけ読んでおきます。

『一日一生』九月一七日。

パウロのいわゆる『霊の質』<sup>かた</sup>とは、信者の復活体の始めであつて、その核心とも称すべきものである。信者はこれを受けてすでに復活体の元質を受けたのである。『霊の質』の成長発達したるもの、それが復活体である。復活体は死後において奇跡的に上より着せられるものではない。その元質は信者が信仰状態に入りし時その時にすでに与えられしものであつて、死後にその完成に達するものである。かくして信者の復活は半ば未来の希望に属し、半ば既成の事実である。信者はすでに復活の元質を握る者にして、同時にまた主と共にその栄光をもつて顕れんことを待つ者である。信者はその肉体においてすでに復活体の種子とその核心とを持つ者である。彼は今すでに復活されつつある者である」。

これが内村鑑三の復活の証言であります。

第二に入ります。信仰の内容。私の復活の信仰を短い文章で申し上げます。

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えられる、その時の喜びや如何。

生くるも賜物、このままで称名するのも賜物、目の前のなすべきことも賜物、死ぬのも賜物、天国キリストに迎えられるのも賜物、その時の喜びは如何も賜物。そのゆえに、生くるも死ぬるも賜物。喜び。これが私の信仰告白であります。

「生さればこのままで称名」と、称名について申し上げます。「称名」というのはキリストの名を呼ぶこととあります。神の名を呼ぶことは、創世記四章二六節に出ております。アダムの孫のエノスが「この時、人々、主の名を呼び始める」と創世記に書かれている。主の名を呼ぶということが、これが神との交通が開いた信仰告白であります。これがヨエル書の第二章三二節には、「主の名を呼び求める者は救われる」という預言となつて表れた。これがロマ書一〇章一二節、一三節において、パウロの理論的説明となつた。

ちよつと申し上げますが、ヨハネ、ペテロという方々は無学のただ人で、理論的に説明ができない。ただ「イエスを神の子と信ぜよ」「悔い改めて信ぜよ」「神とキリストのことを信ぜよ」ということばかり言つていて、イエス・キリスト、父のどういうところをどういうふうに信じるかという説明ができない。これは無学の悲しさですよ。これを補つてパウロは、ロマ書において一章から八章までかかつて、イエスは神の子、父なる救いをどう信じるか、ということ、その信じ方を説明した。ヨハネ伝はロマ書を補つて読むべき本です。無学はあまり誇るべきことではありません。勉強する必要があります。

ロマ書一〇章一二節、一三節は、これはオーガステインも言っていない。ルッターも言っていない。キリスト教の二千年の歴史において、またヨエルの預言とイエスの贖いとを結びつけた説明は、私の無学なキリ

スト教の知識では、まだキリスト教の歴史には現われておりません。現代二〇世紀に入りましても、バルト、ドイツのアルトハウス、英国のドッド、アメリカのジョン・ウエスレー、この四大聖書学者、特にロマ書においてこの権威ある世界の四大学者が誰もまだヨエルの預言とイエスの贖いとを、ロマ書一〇章一二節、一三節の説明には現われていません。私は外国語が弱いために、既に大先生が説明しているかもしれませんが、僕の知識では分かりません。

これは日本人に神は残した。ヨエル (Joel)、ジーザス (Jesus)、ジャパン (Japan)。内村鑑三は「二つのJ」と言いましたけど、私は「三つのJ」という。ヨエル、それにジーザス、ジャパン。ヨエルの預言がイエスにおいて実現されてるということを世界に説明するのは、Japan。

内村鑑三は武士の子でありました。私は浄土門の信仰を持つ祖先から出た子弟、日本人がロマ書一〇章一二節、一三節の深いパウロの意義を説明する日が必ず来ると思う。その日のために高円寺東教会は、石館守三、小西芳之助、小西導源と申しておりますが、この二人は少しく貢献したことを、私は日本人が知る日が必ず来ることを確信する。これは高円寺東教会第三〇回のイースターとして、日本キリスト教史の一隅を照らすことになることを私は信じます。

目の前の義務を尽くすことにつきましては、ロマ書一二章一節、二節。目の前の義務をなすということは、これはもう少し詳しく語りたいたいですけれども、時間が無い。また次のクリスマスに譲ります。私は大体クリスマスとイースターには信仰の全体の話をします。平常は聖書講義。聖書の一部分ですけど、イースターとクリスマスには全体の話をします。

目の前の義務を尽くすことにつきましては、これはロマ書一二章一節、二節。この愛のこと。愛というの

は神の意志をなすことです。神の意志をなすとはどうするかというと、われわれ現在に当てはめてみたら、自分のなしたいことをなすのではなくして、なすべきことをなす。これが神の意志をなすことになる。これはロマ書を研究したら分かる。

それから「死ねば天国、キリストに迎えられる、その時の喜びや如何」。ヨハネ伝一四章三節に、イエスは「われは用意できたらばお前のところへ来て、私のところへ迎えて、私のいる場所へ連れていく」と書いてある。迎えに来てやると書いてある。ステファノが迫害によつて殺される時にキリストが迎えに来た。そのごとく、すべての信者のところへキリストは迎えに来る、ステファノの時来たごとく、その例として私はたくさん知っている人があるけれども、時間が無い。われわれのこの肉体の死ぬ時にキリストが迎えに来る。ヨハネ伝一四章三節に書いてある。現にステファノは見た。

また「よろこび」には、この間加藤（武樹）兄弟がその喜びを書きましたが、聖書にちゃんと書いてある。再びキリストを見る時、この目でキリストを見る時に、いわゆる肉体の滅ぶ時に、その喜び。「死ねば天国、キリストに迎えられる、その時の喜びや如何」。

それから時間が無いから簡単にしますが、コリント前書一章四節、四章七節には「汝ら、受けないものが何を持っているか。皆、もらったものではないか。しからば、自分のものであるごとく自慢できないではないか」とパウロは言っている。われわれは、自分のものというものはない。みな、もらったものです。われわれの人生は、自然から、神から、キリストから、友人から、先生から、もらったもの、頂きものです。

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えられる。  
その時の喜びや如何。

生くるも賜物、称名も賜物、目の前のなすことも賜物、死ぬのも賜物、天国キリストに迎えられるも賜物、その時の喜びは如何。賜物、それがゆえに喜びです。これで私の信仰告白は終わります。

今度はこの前の日曜日に非常に感銘を受けたこと。これは、この前の日曜日に市川（浩）兄弟が証言した信仰。贖いの信仰と復活の信仰を証した。私は非常に感銘を受けた。

市川君は「主と共にいます」ということは三〇年前から言っていた。しかし「贖いを信じている」と言っているけど、「贖いを信じる」と言っても自分は贖いを信じているので、「主と共にいます」と言っても、自分が主と共にいますので、半分感情的、自力的なそういうにおいが私はしていた。ところがこの間の説教で「自分の信仰、自分の行ないによらない、ひとえにイエスの贖いによるのだ、その恵みによって救われて、われわれは『わが主イエスよ』と主の名を呼んで天国に迎えられる」ということを明確に証言した。今までは半自力、半他力というか、自分が半分出っていて、「主と共にいます」と言っても自分が主と共にいます、そういうにおいがしていた。ところがこの間の証言では全く、ひとえにイエス・キリストの贖いということが移ってきている。私は驚いた。聖霊は徐々に下る。三〇年徐々に下って、市川は完全に聖霊を受けた。この前の日曜。

当教会三〇年、当日、市川兄弟が証言がすんで石館（守三）先生に敬礼していたが、石館先生、ご満足だった。それはご満足でしょう。自分が建てた教会から信者が出ているのだから。石館先生はご満足で「ああ、君たちは成長したね」と言って、市川はえらいお褒めにあずかった。

その時にモーク先生の話になった。石館先生いわく「モーク先生は生涯、女性で体は弱い、背は小さかったけど、内には鉄を持っていたからな」と言われた。われわれの肉体は弱い、意志は弱いけれども、この復

活の信仰と望みは鉄骨ですよ。石館先生の言葉で言ったら「鉄骨」だ。この鉄骨はローマの皇帝といえども、迫害してライオン、獅子をもつて信者の肉は食えたけども、鉄骨は食えなかった。ついにローマ帝国は滅んだけれども、信仰の鉄骨は残った。パウロのロマ書は残った。

この前の日曜は二〇人ほど出席した。二〇人という数は、ロマ書を読むとロマ書の最後に名前が書いてある。私は二〇人が好きですな。二〇人という数字は、ロマ書の数字です、二十数人。

その時、私は蓮如上人のことを思い出した。当流の繁盛というのは、大勢集まって、がやがや集まった大集会が当流の繁盛ではない。当流の繁盛とは、「一人の人が信を取ることだ」と蓮如上人は言った。よろしいか。一人の人が信を取ったら当流の繁盛です。高円寺東教会の繁盛は、一人の人が復活、贖いの信仰を取ることである。アーメン

## 第一一講

まさに知るべし、ロマ書一〇章一一、一三節により称名する者、決定往生するを（その一）

ロマ書一〇章九節—一三節

マタイ伝一一章二八節—三〇節

（昭和五三（一九七八）年九月一日）

七月、八月の二カ月に九回日曜がございましたが、共励会の方々が証言していただき、去る九月の第一日曜日は加藤（武樹）長老が証言してくださいました。私の責任ある聖書講義は一〇の日曜ございませんでして、今日初めて私の責任になったわけでありますが、本日も聖書講義を一度やめさせていただきました。共励会の方々、また長老が話されましたごとく、私の信仰全体について語り、この夏休みの間に学びました三つ四つの点について私の感想を述べたいと思います。お許し願います。

第一に讚美歌二つ三つについて感想を述べます。当教会もいよいよ今年は第三〇年目に当たっておりますが、この三〇年間に歌いました私の歌と讚美歌、最もよく歌いましたのが五一三番「あめにたからつめるものは」、それから二八五番の「主よ、み手もて」。この二つの讚美歌は最もたくさん歌っておりますが、夏休みの証言で、ある兄弟が、今日歌いました五一一番が高円寺東教会の信仰にふさわしい讚美歌であると言ってくれました。私もそれを感じまして、今まで二八五番「主よ、み手もて」を歌っておりましたが、これからは二八五番の代わりに五一一番を歌いたいと思います。

その理由は、二八五番は信仰的態度がはっきり出ておりますけれども、信仰の客体が出てない。何を信ず

るかということが書いてない。そうですから言葉は麗しいけれども、直接われわれの力とならない。そうですから、これから二八五番の代わりに五一一番を歌いたいと思います。

五一一番はいつも最後は「ならせたまえ」と願望になっておりますけれども、信仰的態度としては、初めは「たまえ」でありますけれども、信仰を得たならば「たまう」とこうなりますから、ただ今歌いました五一一番の讚美歌は、「救いたまえ」を「たまう」という気持ちで読んでください。「たまえ」と言ったら願望。「たまう」と言ったら、現在もう救われていることになりまますから、「たまう」という気持ちで讚美してください。

それから、これは信仰のことですが、今度は、よく歌う歌に五一三番「あめにたから」、これは今日の最後に歌います四八六番、ちょっとご覧ください、四八六番の三番に「世に勝ちにいくさびとに、さずくはこれと、玉のかむりかかげもちて、イエス君は待ちたまう」とあります。いつも私らが今まで歌っておいりました五一三番「あめにたからつめるものは」。「あめにたからつむ」というふう天国の信仰、望みがはつきり出ておりますけれども、四八六番の三番の「世に勝ちにいくさびとに、さずくるはこれと、玉のかむりかかげもちて、イエス君は待ちたまう」と、この表し方が具体的ではつきりしてある。そうですから五一三番の天国の望みは四八六番の三番のほうがはつきりしていますから、今後は五一三番を歌うかわりに四八六番を歌いたいと思います。

讚美歌というものは、われわれの信仰と望み、神の子たるの信仰、天国へ行く望み、信仰か望みか愛について、神の意志を行なうことを愛と申しますが、信・望・愛、その三つを歌ってある。それを歌ってあるんですから、讚美歌を歌った時に、信・望・愛のお稽古をするというか、それが心に浮かんできて讚美歌を味



讚美歌はそれくらいにしておきましょう。

第二の語りたこと、それは「平凡なる生活の重視」ということ。平凡な生活の重大さ。

最近の『よろこび』に書いておきましたデビッドソンの言葉に、「よく送られた平凡な生活は、最も偉大なる行為である」という言葉があります。人は、変わったことが偉い・偉大であるように考えますが、私はいつも言うのですが、シユバイツァーがアフリカの土人を助けた、あの偉大なる変わった行為をのみ褒めますけれども、われらは日々、普通の自分のなすべきこと、自分のなしたいことではなしに自分のなすべきことをなすという、平凡なるなすべきことを怠っている。

イエス・キリストが最後には、自分のなしたきことをなさずして、なすべきことをなす、最も難しい十字架を選ぶ道をイエスはお取りになった。イエスは逃げようと思つたら逃げられた。ところが、自分のなしたことは困難を逃れることだけでも、なすべきこと、神の御旨をなすというこのイエスの偉大なる行為の勇気の根源は、イエスが三〇年間大工をやった、その間にその勇気が養われた。

平凡なる、平凡に見える日常の義務を、自分のなしたいことではなく、なすべきことをなす、神の意志をなす平凡なることをなす、平凡なる神の意志をなす訓練が、時至らば、偉大なる十字架を担うの決心の力となって現われる。力が問題です。己に勝つ力が問題です。その力は、日々稽古して、毎日の生活においてその力を稽古する。

夏休み、七月でしたか、石田礼助さん、元国鉄の総裁をしておられました。あの方が鉄道事故が起こってから総裁の俸給を辞されまして、ただで働かれた。「自分は天国のパスポートをもらつてるからな」と言われた。石田さんは無教会の信者だそうです。無教会に属するキリスト教信者であるということを教会の年

鑑に書いていましたが、石田さんが「自分は俸給を辞して人のために働いているから、自分は天国のパスポートを持っている」と言われました。石田礼助さんが若い時に三井物産にお勤めになったところ、そのころ「私は三井物産に勤めていて天国へ行くパスポートを持っている」というふうにご述懐いただいたら、私は嬉しかったろう。もちろん三井物産に勤めていられたところから天国のパスポートは持っていらっしやいましたでしょうけれども、国鉄の総裁を辞してパスポートを持っていると、あんまりそこでパスポートを振り回されておっしやるよりも、むしろ平凡なる三井物産時代にパスポートをというほうが、私は嬉しいと思うのであります。

平凡なる人生。ここで決まる。人間が決まる。立派な人になるのには、変わったことをする必要はない。今日司会者が読んでくれましたが、イエスは「重荷を負う者は、われに來たれ」、そして「私に学べ」と、「私のくびきを取れ」と。「わがくびきは易く、わが荷は軽い」と言われた。われわれも日々、皆、荷がある。くびきがあり、荷がある。これを本当に軽く、安く、魂に易きを得て、われわれは日々これを担いたい。

私はこれから生かしていただく間、本当に、易きくびき、荷は軽い荷を負うて、心に平安を得た生活を送ってみたい。人に教えようという意志は毛頭ありません。私はそういう人生を送ってみたい。

平凡なる生活の重視はそのくらいにしておきましょう。

第三、今日の本題の「まさに知るべし、ロマ書一〇章一二節、一三節により称名する者、決定往生することを」と。この夏休み中に一人の兄弟が「まさに知るべし」という題で証言した。また一人の兄弟は「決定往生する」という題で証言なさった。そして、その二人の題を取りまして、私は「まさに知るべし、ロマ書一〇章一二節、一三節により称名する者、決定往生することを」という題にした。これが今日の話したいこ

と、三番目の「まさに知るべし」、これが本日の山です。

私の信仰の標語を申し上げます。私のキリスト教のすべては「このままで、わが主イエスよと称えるに尽きる」、これが私のキリスト教の標語。いつも言っていますが、私のキリスト教のすべては「このままで、わが主イエスよと称えるに尽きる」。

たびたび申し上げますとおり、私は第一回のロマ書講義、昭和三六年、昭和三七年のこれは教会を始めてからもう一〇年以上たっておりましたが、この第一回のロマ書の講義において、わが主イエスよと主の名を呼ぶことが救いの条件となつてゐること、ロマ書一〇章にはつきりと「主の名を告白する、主の名を呼ぶことが救いの条件になつてゐる」という、その真理が分からなかつた。贖いだけで救われると信じていた。そうですから第一回の講義の時には、称名ということが救いの条件をなしているというロマ書の真理には盲目、分からなかつた。

ところが第二回、昭和四六年、昭和四七年の第二回の講義のころには、これが救いの一つの条件をなしているということがはつきり分かつた。そしてひよつとするとこれが、「主の名を呼ぶこと」が、すべての条件でなかるうかとちよつと考えた。最近ではロマ書一〇章一二節、一三節の意味が、原語の意味がはつきり分かりまして、これこそ、称名こそが、救いのすべての条件であるということが分かつた。そうですから、こういう標語になつた。

そうですから、私のくびきは「わが主イエスよ」と言うことです。このくびきは易い。それから私の重荷は「目の前にある義務をなすこと」です。

標語が終わりましたが、今度は私の信仰を一言でいえば

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えられる、その時の喜びや如何。

これが私の信仰の告白です。

そうですから私の標語によって、主の名を呼ぶということが救われるすべての条件を満たしている。ですから、わが主イエスよと言えば天国に迎えられる。そこへもつてきて、目の前のなすべきをなすというのは、これは今年のクリスマスに、「称名」ということと「目の前のなすべきことをなす」という私のくびきと重荷との二つについて、今年のクリスマスに説教をしたいと思います。

今日は詳しくは申せる時間がございませんが、そういうわけで、「生ければ称名、このままで」は、今言ったとおりロマ書一〇章一二節、一三節。それから「目の前のなすべきをなす」、これはロマ書一二章一節から八節。それから「死ねば天国、キリストに迎えられる」、これはヨハネ伝一四章二節。「その時の喜びや如何」、これはヨハネ伝一六章二二節。

もう一遍言えは「生きらば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えられる、その時の喜びや如何」、聖書の根拠は、ロマ書一〇章一二節、一三節、同じくロマ書一二章一節から八節、ヨハネ伝一四章二節、ヨハネ伝一六章二二節。そこをよくお読みくださいましたら。私は自分勝手なことを言っていない。聖書に書いてあることを話している。

私は、私の言うことを皆さんに信じてもらったら結構ですけど、無理にお信じくださることを皆さんに勧めていない。私はこの標語、この信仰によりまして、本当に自分の日々の生活を安らかに、心に易きを得て、安らかな人生を送ってみたい。そういうふうな安らかに送った人生の example、そういう手本を一つこの世

の中へ残してみたい。これが私の理想であり、高円寺東教会の理想です。

人に親切にしていく必要はない。自分自身がまず安らかに、平安に満ちた、そういう人生を送ってください。それが第一だ。それができてから人に親切にしたらよろしい。急ぐ必要はない。力がなければ人に親切ができない、どんなにしたくても。己に勝つ力がなかったら、人に親切はできない。

できれば私は、今日司会者が読んでくれました、魂に安きを得た平安な神のくびき、神の重荷を負いつつ平安な人生を送る、そういう者になりたい。そして、私の死後二五年の間に、私のまねをする人が二人出ていただきたい。そういうことを願望している。

二五年にもしも二人になることができたら、そういうことが可能としたら、五〇〇年たったら一〇〇万人信者ができる。六〇〇年で一〇〇〇万、七〇〇年で一億、八〇〇年で一〇億、そういう人ができる。法然上人が死んでから八〇〇年たっている。この間八〇〇年。

そうですから、私は聖書の信仰を自分が少しくまねをさせていただいて、そしてまねする人が二人、二五年の間に出ていただくこと、これが高円寺東教会の理想。

## 第一一講(続き)

まさに知るべし、ロマ書一〇章一二、一三節により称名するもの、  
決定往生するを(その二)

(昭和五三(一九七八)年九月二四日)

本日は、お話をさせていただきますのに、大変静かな豊かな気持ちでさせていただけるように思います。感謝であります。

この前の聖日、九月の第二の聖日には、「まさに知るべし、ロマ書一〇章一二節、一三節によりて称名する者、決定往生するを」と、こういう長い題で話しましたが、それに続きまして今日は、その時に十分に話してきませんでしたものですから、今日は補って、引き続き話をさせていただきます。

司会者が読んでくれましたマタイ伝の一章二八節から三〇節まで、これが今日の結論になろうと思うのであります。すなわち、「われわれの人生において担うくびきは易く、荷は軽い」と。われら、人生において、毎日の荷が、神様からいただく荷が、「くびきは易く、わが荷は軽い」とイエスが仰せになっていますから、本当にこういう軽いくびきをいただき、易い荷を負って、そして平安な安らかな人生を神に守られて送りたいと、これが今日の結論であります。

三つか四つのことについて語りたいと思います。ちょっとこの前話したことを復習いたします(復習の部分は省略)。

当教会、高円寺東教会の希望で、教えてもらっている信仰は、偉いことをすることではない。普通の仕事

を、普通の毎日の誰も平凡な生活を、天国を目当てにやるといのが、ここで教えているキリスト教です。偉い人になってもraitたくない、この教会は。普通の人でよろしい。

伝教大師は「一隅を照らす人が日本の国の国宝だ」とおっしゃった。そうですから、主婦は家庭において一隅を照らしたらよい。それは「国宝」と言った。勲一等、旭日大綬章をもらう人が国宝じゃない。私の知人でも勲一等、旭日という人は一人、二人おりますけども、それも国宝でしょう。しかし伝教大師が言えば、家庭において家庭を、一隅を照らしていると、日本の国の一隅を照らしているということになったらこれは国宝だ。そういう国宝が多くなってきたら日本の国は幸いですよ。大政治家によって日本の国が幸いになるのではなくして、そういう国宝が増えてくることによって日本民族は幸福になる。偉い宗教家、伝道師はいらないですよ。僕らみたいにこんなことでしゃべる人間は、こんなものは大したことはない。実際において一隅を照らしている人が大切です。

法然上人が歩いておられる時、後光がさしたという。弟子の、あれは九条公でしたかな、ある時見たら、法然上人から後光がさしている、ふわつと。びっくりしたと、そんなことを親鸞聖人はおっしゃっています。後光がさしたというのは法然上人が歩いておられた時です。平凡な誰でもやっている歩く時に、体から後光がさしたという。そうですから、人間はわれわれの平凡な生活でこれが決まる。そういうことを前の日曜に言った。

それから第三番目に言ったことは、「まさに知るべし、ロマ書一〇章一二節、一三節により称名する者は決定往生するを」と。「まさに知るべし」というのは、こういう題である兄弟が夏休みに証言してくれた。また「往生決定するを」という題で、ある兄弟は夏休みに証言してくれた。それで二人の題を取って、こう

いう題にしました。

話は前後がちやがちやしますが、ギリシャの哲学者は「物事の初めというものが何でも物事の最大部分だ」と、そういうことを言った。初めというものがそのものの最大部分だと。私の伝道も去年の一〇月から第二の三〇年に入っている。三〇年の伝道が終わって、第二の三〇年の伝道が去年から始まっている。そうですから私の伝道も、去年の一〇月から今年の九月の今日まで、この一年が第二の三〇年の伝道の初めの部分。そうですから、今日までの一年の伝道というものは、何年続くか知らないが、私のこれからの伝道の最大部分。そうですから、私の去年のクリスマスに話したこと、あるいは今年の三月のイースターに話したこと、あるいは今日話していること、こういうことが私の最後の伝道の最大部分です。随分私としては大切なことを話しているし、今日も話していると思います。

ロマ書一〇章の一二節、一三節、これはまた今年のクリスマス・メッセージに詳しく話するつもりです。これが皆さんに聴いてもらいたい場所ですから。ロマ書一〇章の一二節、一三節は、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶ。このことはロマ書第一〇章の九節、一〇節では、救いの一つの条件として書いている。すなわち「心に信じて義とされ、口に言いあらわして救われる」と、二つの条件を九節、一〇節では言っているけれども、一二節、一三節では、救われるすべての条件として「主の名を呼べ」と言っている。「主の名を呼ぶ」ということは、ロマ書によれば、救われるすべての条件として言っている、一二節、一三節は。このことについてはまた年度のクリスマス・メッセージにゆっくり話しますが、いかにこれは重大なるパウロの聖書の場所であるかということが分かります。

キリスト教の歴史においては、ロマ書一〇章の重大性については、古くはセント・オーガスティン、また

ドイツのマルティン・ルーテル、オーガステインもこの重大性についてはおっしゃらなかった。また、何遍も同じことになりましたが、現代におけるロマ書の最大学者と言われるカール・バルト、あるいは英国のドッド、あるいは英国のジョン・ノックス先生、こういう大先生もロマ書一〇章の重大性についてはおっしゃっていない。また私の先生の内村鑑三先生も、この重大性についてはおっしゃっていない。

そうですからどうしても、これは日本人、高円寺東教会において、重大性を分かるようにする義務と特権を有する。ロマ書一〇章一二節、一三節、これは本当に、私の見るところではロマ書の画龍点睛ともいうべき場所。大先生方がその重大性をおっしゃっていないということは、誠にこれは天が後から来る者に残しておる場所であると思います。

どうぞ、諸君はこの場所を、頭で知るのみならず自分の身に行なって、「わが主イエスよ」と主の名を呼んで、自分自身においてその深さ、広さ、尊さ、ありがたさを実験せられることをお勧めいたします。

「わがくびきは易く、わが荷は軽い」とイエスは仰せになりましたが、まさしく「わが主イエスよ」と称えることは、この神のくびきは易い。男女貴賤、誰でもできる。どこでもできる。これは「わがくびきは易く」とイエスが仰せになったこととぴたと合う。

それだけこの前話した。時間がなくなつて、疲れましたからやめた。続きをやります。

第四番目。第四番目は賜物ということについて。これも何遍も言う話ですが、賜物というのはいくらものです。これはエペソ書の六章一三節を見てください。

エペソ書六章一三節「それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい」。この場所を講義いたしました時に、「悪しき日にあたって、よく抵

抗し」の「抵抗する」という動詞、それから「完全に勝ち抜いて堅く立つ」の「堅く立つ」という動詞、この二つの動詞をなしうるために、「抵抗しうるために」「堅く立ちうるために」と、「うる」という字が原語では受け身のかたちです。そうですから「抵抗しうる」「立ちうる」と。できる、抵抗することができる、堅く立ちうることができるためにと。その「できる」という字が、できるためにと言ったら「神の武器をつけくわえよ」と、これは日本語でも英語でもドイツ語でも、そうしか書けないけれども、原語では「できる」という字の受け身のかたちです。こんな字はきつと原語だけでしよう。ギリシャ語にだけそういう言葉があるんでしょう。この言葉一つ知るだけで、ギリシャ語を勉強する値打ちがあります。

自分がやるのではない。自分ができるのではない。聖霊が臨んで、できさせてもらう。私はここを昨日も一遍読みました。日本語でと、それから英語は Authorized Version、Revised Version、二つ英語の本を読みました。ドイツ語はルッター訳を見ましたが、皆そうしか訳せない。「抵抗しうる」「立ちうるために」と、そうしか書けないですよ。幸い原語は「できる」という字の受け身のかたちがある。ドウネセテ。受け身。

詩編の一〇四編の二二節、二三節に、「太陽が出ると、人は出ていって働き、勤労に夜まで出ていく」と、こういう言葉がある。太陽が出て夜まで、日没まで人は出ていって働くと書いてある。それで私ちよつと思つたのは、そうしたら「日没になると人は休んで朝まで寝ている」と、そういうことが書いて書けると思いますが、私はそれを読んだ時、太陽が出た時に人は夜まで働くと、日没になったら休んで、そして朝まで寝ていると、この働くとか寝るとか休むというのは、これは神様がその力をくださる、賜物だと思ふ、私は。われわれは働き、われわれは寝るといふのは、これは賜物ですよ。ギフトです。自分の力で働いているので

はなく、自分の力で寝ているのでもない。ギフト。プレゼント。私はそういうふう感じた。“When the sun rises, Man goes forth to his work and to his labour until the evening.” それを読みました時に、「はあ、賜物だな。神様がそういう力をくださるのだな」と私は思った。

第五番目、高円寺東教会の理想。偉い人になるとか、えらい善行をするとか、えらい信仰を持って立派な人だと、そんなことを言われたらいけない。この教会の理想は、「わが主イエスよ」と主の名を呼んで、そして一隅を照らす人になりたい。これが希望です。伝教大師が「一隅を照らす者、これ国宝」、国の宝だと言われた。勲章、旭日大綬章とか勲一等等々、もう一つ下の何々綬章というのがありますが、あれは国の宝でしょうけども、それよりも一隅を照らす人。凡人、普通の人と言われて、しかも一隅を照らす人、そういう人が私はこの教会から出てほしい。偉い人よりも凡人、普通の人でよい。普通の人でよい。普通以下の人でよい。一隅を照らす人、そういう人がこの教会の理想です。

それから当教会の理想はどういう人かというところ、「わがくびきは易く、わが荷は軽い」とイエスが言われたように、そういうふうな人です。くびきが重く、くびきが難しかったら、そんなものは負えないですよ。わがくびきは易く、わが荷は軽い。「わが主イエスよ」と言うことは易い。また、分相応に自分の現在なすべきことをなす、これも分相応になすことは易い。なぜ易いか。三なら三の力でそのままやったらよいからです。それが国の宝。人類の宝。人類を幸福にする人はそういう人なのです。

そういう人になってください。そういう人になりたい。それは難しくもない。可能。ここでは難しいことは教えません。私のできないことはここでは言いません。私のできることをここで話いたします。

一〇月の第三日曜からは、私の伝道第二の三〇年の第二日目に入りますが、いよいよロマ書一〇章一二節、

第11講(続き) まさに知るべし、ロマ書10章12、13節により称名する者、決定往生するを(その2)

一三節を真に学ぶ者となりたい。

## 第一二講 難信と易行

### ロマ書一〇章九節―一三節

(昭和五三(一九七八)年二月二四日)

私の旧制高等学校時代からの友人が本日も出席してくれておりますので、今日の私の説教はその友人に対して、私の現在の信仰、特に「難信と易行」ということについて最近非常に教えられておりますことを、友人に話するつもりで今日の説教をさせていただきますと思います。

ヨハネ伝には「イエスを神の子と信じたら救われる」、すなわち永遠の命を与えられると書いてあります。そうしたら神の子と信ずるということはイエスのどこをどういうふうに信じたらよいのかと言ったら、これは非常に難しい。これを理性に訴えてわれわれ凡人が分かるように説明できる牧師は、日本においても世界においても、私は多くないだろうと思う。

パウロはロマ書におきまして、ヨハネ伝でいう「イエスを神の子と信ずる」ということを説明した。このイエスの救いの信仰を、ロマ書一章から四章までかかって、数学的明確さをもって、人間の理性に訴えて分かるように説明した。この説明がまた難しい。私は、ロマ書一章から四章までをわれわれ凡人に分かるように説明してくれる先生は、日本においても世界においても少ないだろうと思う。

事ほどさようにキリスト教の信仰は難しい。証拠がある。その証拠には、われわれ数十年「キリスト教を信じている」「信者だ」と言っておりますけれども、信仰の結果である平安な心がない。人を許す心がない。これは、われわれには信仰がないという証拠です。これは信仰がいかに難しいかという証拠です。

私たちは幸いに高等学校三年、大学三年と六年間、毎日曜、内村鑑三先生の聖書の講義を聴いた。特に大正一〇年、一一年とロマ書を聴きましたが、特に一章から四章までは大正一〇年に十数回にわたってこの場所を聴いた。ここに贖いの信仰をわれわれは教えられた。先生は大正一二年に大きな集会をやめましたから、六年間、学生時代に先生から聖書講義を聴いたというのは、われわれが終わりです。

そういうふうに先生のロマ書の講義を聴いた。その時出席していたのが四、五〇〇人だった。四、五〇〇人集まったうちで、内村鑑三先生のロマ書の講義を信じた、分かった人がどれほどいたであろうか。また、それをずっと持ち続けておる人が何人いたか。「咲く花は多し、されど実となるは少なし。実となるは多し、されど熟するは少なし」と内村先生は仰せになりましたが、その四〇〇人、五〇〇人のうちで、現在この贖いの信仰を持ち続けている人は私は私に寥々としているだろうと思う。事ほどさように信仰は難しい。

ロマ書は一章から四章まではキリスト教の信仰の説明として、誠に人類の有する宝でありますけれども、宝の持ち腐れと言いますが、これをわれわれが味わうということは至難。入信が難しいのみならず、これを継続して持つということはなおさら難しい。そんなものは Impossible です。

アルトハウス先生は彼の名著 N T D のロマ書注解において、信仰を説明した。「信仰とは、もはや自分身の何ものにも頼らず、ひとえに神がキリストの十字架において完成したまいし贖いの救いのみより頼んで神の前に生活することである」とアルトハウスは言った。彼の言葉はドイツ語ですが、私のまずい英語で言いましたら、

[Faith is a kind of life which man lives if a god depending no more upon his all being works, possessions, but depending upon God work of salvation of grace which was a

completed in Jesus Christ which the good news of the bible tells」

と、こういうふうな英語になるでしょう。私のまずい日本語の訳をもう一遍言えば、「信仰とは、もはや自分自身の何ものにも頼らず、ひとえに神がキリストの十字架によつて完成したまいし贖いの救いのみより頼んで、神の前に生活することである」。いかに難しいかということが分かる。入信が難しいし、これを継続することはなおさら難しい。

イエスは「汝ら、幼子のごとくならずば天国に入ることはいできない」と言った。幼子のごとくなるということは非常に難しい。これを継続するということは、なおさら impossible。

しからば、われわれは落第か。ノー。ありがたいことにはロマ書一〇章九節、一〇節には、救われる条件が二つ挙げられている。第一には、贖いを信ずるといふ難しい信仰と、もう一つは、「主よ、救い主なり」と告白するという条件。この二つを救いの条件とした。ありがたい。信仰のほうは難しいけれども、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶことは易い。誰でもできる。

そうですね。ロマ書一〇章九節、一〇節によりますと、二つの条件、「わが主イエスよ」と言うことと、これも難しい信仰と、易行と難信とが救いの条件になっている。そうしたら、われわれは「わが主イエスよ」と言えば一問題を完全に満たしている。そうですね。資格試験でいえば二問題のうちで一問題だけ、五〇点取っている。これで、及第ですよ。そうですね。資格試験に五〇点取ったら及第だ。そうですね。われわれは天国に行く永遠の命を得るためには、「わが主イエスよ」と主の名を呼べば及第。これがロマ書一〇章九節、一〇節に明確に書いてある。

なおさらありがたいことには、ロマ書一〇章を進んでいきますと一二節、一三節には、難信の難しい条件

が消えて、ただ主の名を呼ぶ者が救われると、条件がただ一つになっている。易行の中に難信を含めた。二つの条件を一つにした。これを福音という。原語の読める人は、ロマ書一〇章一節から一三節を熟読しなさい。神の無限の救いの富が、無限の恵みが人類に迫っている。

故に、ロマ書の主張は「イエスの贖いによって、わが主イエスよと主の名を呼び求める者は救われる」と、これがロマ書の主張です。

「われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん、主の名を呼ぶことによつて」  
 「われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん。主の名によつて祈つて」

聖徳太子は「日域、大乘相応の地」と仰せになった。「日本の国は、仏教の粹がここで明らかにされる土地である」と聖徳太子は仰せになった。私は、キリスト教の粹が日本において明らかにされて、全人類に及ぶのではあるまいかと思う。内村鑑三は Jesus and Japan と言ったが、私は二つの J の他に Joel (ヨエル) という J を付け加えたい。「主の名を呼び求める者は救われる」というのはヨエルの預言です、これはヨエル (Joel) の預言がイエス (Jesus) において実現され、イエスの実現された救いが Japan において、人類世界、人類に明らかになると私は信ずる。

サンデー先生とヘッドラム先生、この両先生は、有名な ICC のロマ書の注解——この本の第一版は一八九五年に出ているのです——において曰く、「われら人類は一九〇〇年かかって、まだロマ書の説いている真理を知り尽くしてゐない」、exhausted してゐないと言った。

知らずや、このロマ書の最も高い真理、一〇章一節から一三節までの真理は日本において明らかになるのではあるまいか。ロマ書一章一六節、一七節はマルティン・ルーテルによって世界に鳴り響き、ロマ書一三

章終わりの節はセント・オーガスティンをもって世界人類に感動を与えたが、知らずや、ロマ書一〇章一節から一三節は、日本の恵心僧都の名において人類世界に貢献するのであるまいか。

法然上人は「信じても信ずべきは、乃至十念の言葉。下十声に至るまで、乃至十念の言葉。頼みても頼むべきは必得往生、必ず往生するの文句なり」と言った。私は「信じても信ずべきはロマ書一〇章九節、一〇節の言葉、頼みても頼むべきはロマ書一〇章一二節、一三節の文句なり」と。人格や、品行や、行ないは頼りにならない。頼りになるのは、聖書の文句です。お経の文句です。

## 第一三講 唯一つだけ

ルカ伝一〇章三八節―四二節

ロマ書一〇章九節―一三節

(昭和五四(一九七九)年一月七日)

「痴人、夢を語る」といって、夢の話をしたらあまり科学者は喜ばないかもしれませんが、内村鑑三先生の、一月三日、「初夢」と題した有名な先生の夢が残っております。富士山の上へ聖霊が下って、「東なるものは太平洋を渡ってロッキーマウンテン」、そして「西なるものは」と言って、日本の富士山に下った聖霊が全世界を覆うという夢を見て、「ハレルヤ、主よ、かくあり給え」と言って目が覚めたという、先生の「初夢」という有名な文章が残っております。私は夢を大変大切にいたします。どうも神様は、大事なことは夢で教えてくれるような気がするのであります。

信仰というものは人間の考えを絶しておりますから、これは聖書を読んでも分からない。聖書の真理は聖書を読んだだけでは分かりません。人間に啓示された真理ですから、これは、人に教えてもらわなければいけない。

今日は原稿はありませんので、でたらめになりますが、新年所感ですから、ご了承願います。

今年は内村鑑三先生の五十回忌になります。そうですから三月には当教会におきまして、先生の五十回忌礼拝をやりたいと思っております。

私の最も尊敬する人を挙げよといったら、私は恵心僧都を挙げます。私の最も尊敬する人というのは、こ

のころははやらないかもしれませんが、私は恵心僧都。恵心僧都という人は、私思いますのに、キリストの天国からこの世に遣わされた人、歴史上において私の最も尊敬する人恵心僧都は、これは天国から遣わされた遣い人であると。それはどういう目的で来たかという、人類に、キリスト教以外の宗教の人々にキリスト教を説明するために日本に来た人、そういうような気がする。日本では仏教が盛んですから、仏教徒にキリスト教を説明するために来た人、私はこれが恵心僧都だと思う。

そうですから、キリスト教以外の宗教の信者にキリスト教の真理を説明するために来た人、これが恵心僧都です。これが日本に来た。Japan。この人が日本に来た。そうですから日本という国は、世界に向かってキリスト教を宣伝する義務と特権とを持っている。

藤田東湖は「正気（せいぎ）の歌」を歌って、「秀でては富士の嶽となり」と歌ったが、内村鑑三は日本に、日本の富士山に聖霊が下ったという夢を見た。日本という国は不思議な国であります。世界に、日本のように何千年と続いている国がどこにありますか。

もし聖書で一カ所だけ選べと言われたならば、私は、今日ここに書きましたロマ書一〇章九節から一三節まで、ここを選びます。もし、聖書でただ一つ、一カ所を選べと言われたら私はここを選ぶ。

イエス・キリストは、今日の司会者に読んでもらいましたところによりますと、「ただ一つだけで十分だ」と言った。他のものはあってもいいし、なくてもよい。必要なものはただ一つだ、と言った。そしてイエスは、その必要なものはただ一つだということを説明しなかった。パウロに譲った。イエスは必要なるものはただ一つということをおっしゃったけど、その一つというものはどういうものであるかという説明をしなかった。パウロが説明した。ヨハネが説明した。

ヨハネは「ただ一つ」ということを、イエスの必要なことをヨハネが説明した。どう説明したかというところ、「イエス・キリストを神の子と信ぜよ」と、その一つを説明した。しかしながらヨハネは無学のただ人だから、その一つのことを、神の子のどこをどういうふうに信ずるかということは説明できない。パウロが説明した。そうですからキリスト教をパウロ教と学者が言う。

イエスは「ただ一つが必要だ」とおっしゃって、その一つの救いを自分が製造なさった。イエス・キリストは救いの製造者です。パウロはその救いを受けて説明した。

そして、ロマ書の一〇章九節から一三節までは、これはまだ世界のキリスト教の歴史に問題になっていない。しかし、「ただ一つのこと」が、人のために奉仕し活動することではないことは明らかです。そうでしょう。マルタとマリアの話で、イエスがここで説明した。マルタは間違っている、マリアが正しいということを言った。そうですから「ただ一つのこと」は、人に奉仕し、愛の行ないをし、愛を実行すること、そのことが「ただ一つのこと」でないということはこのイエスの例えで明らかです。

そうですから「ただ一つのこと」と言ったら、愛の行ない、人に親切にすることではないということがはっきりしている。どういうことかということイエスはおっしゃらなかったけど、イエスの言葉をじつと聞くことだということは、この例えで明らかです。

私はパウロのロマ書一〇章九節から一三節までのこれが、そのただ一つのことなりと信ずる。これにはどういうことを書いてあるかというところ、「主の名を呼び求める者は救われる」ということが書いてある。ですから、主の名を呼び求める者は救われる。これがただ一つです。

恵心僧都は「妙法のただ一つのみありければ、また二つなし、また三つもなし」と言った。「一つだ」と

言った。仏教徒に向かって、よその宗教に向かって、人類の救われるのはイエス・キリストの贖いだ一つだと、そういうことを恵心僧都は説明した。仏教徒の人々よ、キリスト教の贖いという、人類に賜っているこの贖い、それが称名としてあらわれている。この称名の救いの他に人類に救いはないぞ、ということ明らかにしたのが源信です。

私は、源信が世界に現われてくる日がきつとあると思う。ロマ書一〇章九節から一三節まで、これが必ず人類の歴史において、キリスト教の歴史において、恵心僧都の名をもって明らかにする日がきつと私は来るということを確認する。

どうぞ諸君、君らはわが名によってまだ祈っていない。「わが名によって祈る祈りは必ず聞いてやる」とイエスは言った。私は、この教会に足を踏み入れた人は、必ず神様が救ってくださいと私は信ずる。私は祈っている。「この教会に足を踏み入れた人は救ってください。イエス・キリストの御名によって祈る」ということを私は祈っています。そうですから私は、この教会へ足を一歩でも踏み入れた人は必ず神が救ってくださいとということを確認している。

私は「われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん。キリストの名によって祈って」。私は現世においてはこの教会の人の救われることを祈っておりますけれども、今度は天国へ生まれたらキリストの名によって祈って、知るも知らぬもすべての人を天国へ引っ張ってもらうことを、神にキリストの名において祈るつもりでいるのです。この世においてはこの教会に来る人を救ってもらうことを祈っているけれど、今度は天国に生まれたら、「われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも」すべての人を天国に導くように私は祈るつもりにしております。

「多くはない。ただ一つだ」、この口語訳は非常に原語に近い。原語そのままに訳している。マルチン・ルッターは「多くはない」fewという字を略してしまった。「ただ一つだ」と言った。そうですからルッター訳も、Revised Standard Versionの英語訳もfewという字を除いて「ただ一つ」と訳している。これは誤訳です。ルッターの誤訳、それにRevised Standard Versionの誤訳です。原語はfewという字が付いている。そうですから日本語訳のほうが正しい。

「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思い煩っている。しかし、なくてはならぬものは多くはない。いや、一つだけである」。多くはないと、ただ一つであるといエスは仰せになった。ところがルッターは、「多くはない」ということをなくした。

私は「多くはない」という言葉は、人は多くあるように思っている。そうでしょう。人間は信仰と行ないと二つが必要であるように思っている、そうでしょう。人間は複数にしなければ、救われないように思っているでしょう。

そうではない、ただ一つだとイエスは言いたい。簡単だぞと。救われるのは簡単だぞと、万人が救われるんだということイエスは言いたい。そのためにイエスは贖いを遂げた。われらのために代わってイエスが救いのわざをしてくれた。これを贖いという。われらは「わが主イエスよ、わが主イエスよ。主は救い主だ」と言うことをもって足りている。必要なことはただ一つだ。「わが主イエスよ」と言うだけです。

われだにも、まず天国に生まれなば、

知るも知らぬも皆迎えてん 御名によって祈りて

われだにも、まず天国に生まれなば、

知るも知らぬも皆迎えてん 御名によって祈りて

アーメン。

## 第一四講 私信仰および忘れ得ぬ内村先生のお言葉

ルカ伝一〇章一節―四二節

ロマ書一〇章二―一三節

ヨハネ伝三章一四、一五節

(昭和五四(一九七九)年四月一五日)

忘れ得ぬ内村先生のお言葉についてお話しする前に、大変いい機会ですから、私の現在の信仰の話をする  
ことを許していただきたい。私の生活の目標を申し上げます。

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきことをなし、願いあれば御名によって祈る。毎日会う人と  
毎日いただく食物とに感謝したい。死ねば天国、キリストに迎えられる、その時の喜びやいかん。しかしして、  
すべては賜物であるから生きるも死ぬるも喜びたい。

以上、私の生活の目標であります。もう一度ちよつと申し上げます。「生きらば称名」、称名というのは、  
わが主イエスよとイエスの名を呼ぶこと、「生きらば称名、このままで」、このままで称名する、汚い心その  
ままで。「目の前のなすべきをなし」と。目の前のなすべきをなすのですから、自分の力相応になす、分相  
応になす。目の前のなすべきことをなし、「願いあればキリストの御名によって祈る」。例えば私は今朝で  
も、朝起きにくかったら「神様、起きる力を与えてください。イエス・キリストの御名によって祈ります」  
といて祈る。「願いあればキリストの御名によって祈る」。これは大変大切であります。皆さんもご実行に  
なったらよろしい。それから毎日会う人と、それから毎日いただく食物に対して感謝したい。死ねば天国、

キリストに迎えられる、その時の喜びやいかん。しかして、すべては賜物でありますから生きるも死ぬるも喜ぶいたい。喜ぶ心がありませんから、神様、生きるも死ぬるも喜ぶようにしてください、お願いいたしますと祈る。祈ったらよろしい。

朝夕の私の祈り。朝起きた時の祈り。

「主イエスと十声称えて目を覚まし、御名を称えて今日も歩まん。願ひあらばキリストの名によつて祈る」  
夕、床に就く時の祈り。

「主イエスと十声唱えてまどろまん、長き眠りになりもこそすれ」

主イエスと十声唱えてまどろまん、長き眠りになりもこそすれ。そして夕、床に就く祈りには、その日にお目にかかった人々、そしてその日にいただいた食物のことに感謝する。そういうふうには、お目にかかった人々の名前を挙げて、「この人々と一緒に天国へ迎えてください。イエス・キリストの御名によつてお願いいたします」と言つて祈る。今晚寝る時には皆さんの名前を挙げまして、「この方と一緒に天国へ迎えてください。イエス・キリストの御名によつて祈ります」と言つて今晚祈りますから、どうぞご署名、帰る時に名前を書いて帰ってください。

現在の心境、現在どんな心境か。このままで称名して目の前のなすべきを分相応になしておりますから、心身安楽なり。心身、心も身も安楽です。易い。善い行ないをしたいという希望はない。称名して自分の目の前のことをなす、分相応になす以上に善いことはない。そうですから善いことはしたくない。また、善い信仰が欲しくない。称名に勝る信仰なきが故に。これから健康、健康と、強い体は欲しくない。称名して、主イエスよと称えて、神に守られているごとき素晴らしい健康はない。そうですから健康は欲しくありません。

ん。

現在の心境。明日への望み。

われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん、御名によって祈りて

われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん、キリストの名によって祈りて  
私の伝道は、死にまして天国へキリストに迎えられて、キリストに直接的にご指導を得て、パウロ先生ご自身によって指導してもらって、私の地上に残っておる同信の人々をもって私の伝道は開始する。大体これが私の現在の心境であります。

この三月二八日は内村鑑三先生が亡くなって四九年、五十回忌に当たりましたから、五十回忌の数日前の三月二五日に、内村鑑三先生の忘れ得ない言葉ということで話いたしました。その話が録音してありますから、私は話すのが苦しいですから録音によって聴いていただきます。

### 内村先生五十回忌説教 忘れ得ぬ内村先生のお言葉

(昭和五四(一九七九)年三月二五日)

ただ今、先生の愛唱讚美歌を皆さんに歌っていただきましたが、幸い私は学生時代、高等学校、大学の大体六年間、毎日曜先生の講義を聴くことができました。特に大正一〇年と一一年には二年にわたってロマ書の講義を聴くことができました。先生が御年六〇の時、私たちが先生の講義を聴いたほとんど最後といってもいい。六年間先生の講義を聴けたというのは、私たちが最後だ。

先生がこの歌を非常によくお歌いになった。きょう聴いておりましたら、先生のお姿、壇上にお立ちに

なっているお姿そのままを思い出す。先生はちゃんとフロックコートを着ておられまして、ご講義になりました。

先生から聴きました、耳に残っている忘れ得ぬ言葉を五つ申し上げます。

第一は、ロマ書三章二一節から二四節まで、特に第二一節の「神の義が、律法の他に現われた」という講義、これはいつも申し上げるとおり、大正一〇年五月一五日、神がわれわれを義としたもうその「神の義」、——「神の救い」と言っても「永遠の命の賜物」と言っても同じことですが、——これは「律法の他に」という言葉を、先生は「律法、道徳、宗教と無関係に現われた」と言われた。

この講義で私は救いの意味が分かった。すなわち人間側の、人間の持っている、われわれが持っている道徳とか宗教とか、あるいは心の状態、行ないの状態、そういうものに全然よらずに、われわれの持っている律法、道徳、宗教と無関係に、神の方から、すべては神の方からくださった。すなわち、私がいとも申し上げる、われわれの信仰とか行ないとかというものは関係なしに、向こうから賜物としてくださったということがはつきり分かった。これはいつも申しあげておられますから、耳がタコになっていますからこれぐらいにしておきます。

第二番目。先生はこれもたびたび申し上げているのですが、「自分のキリスト教は十字架の主を仰ぎ見る、復活の主を仰ぎ見る、再臨の主を仰ぎ見る、仰ぎ見るということに尽きる」。『ロマ書の研究』の本にも、「自分の宗教は主を仰ぎ見ることである」ということをおっしゃっている。

先生が亡くなられる昭和五年の三月に弟子が訪ねた時に、弟子が先生に「先生の信仰を一言で教えてください」と、先生の病氣は重いから、もう先生は亡くなるでしょうから一言で言ってくれと言った時に、内村

先生は「主を仰ぎ見よ」と言われた。これは、本日読んでいただきましたヨハネ伝三章一四節、一五節に、「主を仰ぎ見る者は永遠の命を得る」とありますが、この「仰ぎ見よ」という先生のお言葉を、先生の亡くなる日に訪ねた弟子もその意味を理解しなかった。

内村先生は数え年で七〇歳でお亡くなりになりましたが、もう一〇年生きていただいたら、この「仰ぎ見よ」と先生がおっしゃった意義をはっきり先生が弟子たちにご説明になっただろうと思います。ところが先生は七〇にして亡くなられて、その深い意義を後から来るものに譲った。自分自身ではその意味をはっきり説明なさらなかった。

すなわち、ヨハネ伝三章の一四節、一五節は、十字架にかかったイエス様を仰ぎ見たならば救われると、永遠の命をいただくと思つてイエス・キリストの十字架を仰ぎ見るということは、「仰ぎ見る」という行動でありますけれども、この仰ぎ見るという行動に、イエス・キリストの贖い、十字架の贖いの力を信ずる信仰が含まれている。「仰ぎ見る」という行動ですけれどこの内に、イエス・キリストを神の子と信じ、イエス・キリストの贖いを信ずるといふ信仰が含まれている。こういうことを詳しく先生はご説明にならずに、これを後から来るものに譲つて亡くなられた。私はやはり、先生ご自身にこのことを説明してもらいたいと思います。どうぞ諸君も長生きをして、深い真理を悟るようにお勧めします。

第三、先生は、この十字架の贖い、われわれの行ない、われわれの信仰、われわれの道德、われわれの宗教に全然無関係に、神のほうから救いがあらわれている、これを贖いという。この贖いを日本において、また世界において、最も明瞭には言いませんけれども、最も明瞭な一つとして説明されたのは内村鑑三。内村鑑三の日本民族、世界人類に対する貢献はここにある。贖い。ロマ書三章二一節から二六節までの本当の

意味を説明したのは内村鑑三。内村鑑三が言うのに「この十字架の贖いは、君らはまだ分からない」。今聴いていても分からない。分からんでもよろしい。死ぬまで覚えておれ。死ぬ時に役に立って、死の波河を渡る時にこれが役に立つと内村鑑三は言った。これが忘れぬ言葉の三つ目。

四つ目。先生の言葉に「日本に一人の信者ができたら日本は変わる」と言われた。本当に、日本に一人の信者ができたら日本は変わる、と言われた。

私は蓮如上人の言葉を思い出す。蓮如上人が「当流の繁盛というのは、大勢の人が集まることでなくして、一人の人が信を取ること、これが当流の繁盛だ」と言われた。また伝教大師は「一隅を照らす人が、すなわちこれが国宝だ」と言われた。私は内村鑑三が、一人の信者ができたら日本は変わるとおっしゃった当時は、これはちょっとオーバーだと思っておりました。しかしこのごろは真理であることを知る。一部分というのは大切です。部分は全体を表す。内村鑑三はまた、レンブラントは一人で絵を描いてオランダの国を永遠の国としたと言った。「われはまた、一人の牧師も、一つの部屋で聖書を勉強して万世を教えることができる」と言った。それが四つ目。

五つ目、最後。「キリスト教は神の教えであり、キリスト教の内には仏教の粹も、儒教の粹も、日本の神道の粹も全部、真なるものの粹はキリスト教の内に含まれている」と言った。

私は、マルタとマリアに対するイエス・キリストのお言葉を思い出す。「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことで心が乱れている」「必要なことは多くはないんだ」「一つである」と言われた。真にキリスト教の中心、キリスト教の最高の中心は一つであるならば、その一つに均一しているに違いない。仏教でも儒教でも神道でも何でも。私はこのごろ、仏教浄土門とキリスト教とは一つに見える。そうですから、無理に

キリスト教だけやる必要はない。キリスト教をやりながら仏教をやりたまえ。仏教浄土門を勉強したらよ  
しい。どれでも自分の好きなものをやったらよしい。私はこのごろ一つに見える。ぴたっと一つに見える。  
以上、先生が私に与えてくれました五つの点について簡単に述べました。この一つ一つについて、皆さん  
疑問がある方は私のうちへ来て、私が納得いくように数学的に説明してみせる。ここでは説明している時間  
がない。以上、五つ述べました。

そういうわけで、先生の教えで私が覚えていることを五つ申し上げました。「弟子は師に勝らず」とい  
言葉がありますが、最後に師弟の關係についてちよつと申し上げたい。

それは、同じ真理を受けても本当の弟子だったら、先生の言っていないことが言える。例えば、親鸞は法  
然の弟子です。師、法然から親鸞は、法然の信仰を学んだ。学んだけれども、師法然の言わなかったことを  
言った。例えば一つの例を言えば、師匠の法然は「悪人往生す。いわんや善人をや」と言った。師匠は、法  
然は。そうしたら弟子の親鸞はその言葉を引っくり返して、「善人往生す。いわんや悪人をや」とこう言っ  
た。弟子の親鸞は引っくり返した。同じ信仰を言い表すのに、弟子は師匠を引っくり返して言っている。こ  
ういうことが弟子になったらできる。本当に先生の心が分かった人は、先生の心を言える。すなわち、救  
いの力が万人に及んでいる、万人が救われるんだということを分かった時にそういうことが言えた。

また弟子の親鸞は法然がしなかつた妻帯をした。当時は妻帯といったら墮落です。滅びです。そういう墮  
落を、師匠はしなかつた墮落を、弟子の親鸞は妻帯した。

そういうわけで、本当に師匠の信仰が分かったら、みんな individuality 個性が一人一人違うんだから、  
そうですから先生と違う光が出てくる。

これについても語りたいたいことが多いですけれども、またいろいろ話す機会がありました。以上、先生の五十回忌の記念説教としてこれをもって終わりたいと思います。

## 第一五講 唯一のこと

ルカ伝一〇章三八節―四二節

ヨハネ伝三章一四、一五節

ロマ書一〇章一二、一三節

(昭和五四(一九七九)年五月一三日)

三〇周年の感謝の礼拝、三一回目のイースターを迎えての四月一五日の恵まれた集会を持たせていただき、当教会もいよいよ第二の三〇年目に入ってきているわけでありす。

いよいよまた聖書講義に入るわけでございますけれども、聖書の講義に入ります前に、三〇年間に学びました要点、すなわち私の八〇年の生涯に学びました結論を、今日はもう一度「唯一のこと」と題して、繰り返して本日は申し上げたいと思います。お許しを願います。

その結論が二つの歌になっております。

聖霊の 御交わりはただ 御名を呼ぶ ことにより 神よりぞ受く

聖霊の 御交わりはただ 御名を呼ぶ ことにより 神よりぞ受く

もう一つの歌。

聖霊の 御交わりを 受くるには 何につけても 安らかりけり

聖霊の 御交わりを 受くるには 何につけても 安らかりけり

以上、私の八〇年に学びました結論であります。以下、その説明のようになりますが、数カ条に



愛せよ、善行せよと言うよりも、「悪いことをするな」、「人に心配かけるな」、「人の心が苛立つようなことをするな」と、そういうふうには、消極というほうが大事です。見えるから、人は積極的なことが好きです。消極的は見えない。見えないけれども、見えないところにその人の深さがある。本当に立派な人は、消極的だから、立派な人ということが分かりますよ。

私は宗教はキリスト教だけで、勉強しておりませんし、ちょっと浄土門の仏教をかじっておりますから、二つの宗教をかじっておりますが、その二つの宗教の私のかじっている範囲で最も大切なところは、善をなせ、人を愛せよということになしに、むしろ「安らか」「平安」という心のほうが大事です。安らかな、平安な心なくして善行はできない。心が苛立つているようなことでは善行はできない。私はキリスト教と浄土真宗しかかじっておりませんが、頂点は、安らかな心。これについてカーライルが「キリスト教は謙遜の宗教だ」と言った。愛の宗教とは言わなかった。謙遜の心無くして本当の愛はない。俺がというようなことは愛というものではありません。

今度は、行ないと信仰とについて述べます。

人々は、キリスト教は愛を行なうことである、と言われますけれども、今日司会者に読んでいただきましたルカ伝一〇章三八節から四二節、これは繰り返し読み返してお読み願いたい。「キリスト教は愛を行なう宗教でない」と書いてある。イエスは言うた、「キリスト教の教えるただ一つのこととは、愛を行えということでない」とイエス・キリストが言った。われわれはこのイエスの言葉をよくよく味わう必要がある。明らかにイエス・キリストは、愛を行なうこと、人に奉仕することはキリスト教が教えるただ一つのことでないと言われた。このイエスの発言の重大性は、強調しすぎることはできません。

「行ない」「行」「愛」、同じことです。これは同じ性質であり同じ部類に属しますが、行についてイエス・キリストに、「先生、永遠の命を得るにはどうしたらいいか」と聞くことだ。イエスは、「汝、律法を行え」と言われた。行、愛を行えと言われた。律法を行えとイエスは言った。そうしたらイエスは問答のところでもた問答をやっていると長くなりますが、要するにイエスは十戒を行なったら、完全に行なったら、律法を行ったら救われる、永遠の命があるということをイエスは言われた。これは事実です。そうですから、これを行なったらきつと永遠の命を得ることができないに違いない。

しかしながらわれわれ人間は、これを完全に行なう力がない。これは事実です。パウロは深き人生の経験から、「人類は誰一人として完全に律法を行なつて、及第して永遠の命を得る人はない」ということをパウロは言った。そうですから、行によっては、われわれは落第です。永遠の命を得ることはできない。

この人間にできないことを、人間には不可能であるけれども、イエスは、神には可能だと言った。そしてイエスは十字架を負うて贖いを成就して、人間には不可能であるところの救いのその行を自分が代わって十字架を負うて、そして完成して、三三年の生涯において贖いを完成して人類のために贖いを成就した。そして人類はその贖いを信じて永遠の命を得るといふ、行をもって落第の人間が信によって、その贖いを信じて及第して永遠の命を得るといふ道が開かれた。これが福音であります。そうですから、われわれは贖いを信じて、イエス・キリストの贖いを信じて、われわれは永遠の命を得る。及第になるわけであります。

内村鑑三からこの贖いを聴きまして、信じて私は救われてこの八〇年を過ごしてきました。私はその信仰において及第だと思っていた。そうしてこの八〇年を、今も及第と思つていますよ。贖いを信じて、行ないによって落第だけでも信仰によつては及第させてもらえると、そう思つていますが、私は四年前に病気をし

ました時、皆さんにお世話になりました。その時に清川病院へ入院させてもらって、数カ月、八月から二月まで四カ月入院していた間に、信仰で及第している自分が、その信仰を検討する時間を病院で与えられて、「これでいいのか」、「この信仰で及第か」ということを思った時に、私はその信仰そのものが誠に頼りないということを見つけた。

そのころから、「わが主イエスよ」と称える行、これはやつぱり行ですよ、しかし易い。易いですから易行、易い行をわたしは「易行」と言っておりますが、易行が目につきました。その前後から、「主の名を呼ぶ者は救われる」というロマ書一〇章一二節、一三節が私の心に響いてきていた。もちろん信仰を始めましたころから、三〇年前から、主の名を呼ぶというこの文句には気が付いていたらしい。しかし本当に自分の心に浮かんできたのは、大体七〇の年ぐらいからです。

そしてこの易行、神から教えられた神からいただくこの行が、これが贖いの信仰継続の方法だ、ということとを最近気が付いた。この易行は、行、行ないであるのみならず、わが主イエスよ、わが主イエスよと称えることは行であるのみならず、贖いの信仰を継続する方法ということがはつきりした。分かってきた。この易行によって贖いの信仰が継続される。このあるかないかの難しい信仰を継続する、これが唯一の方法です。これが、信仰継続の方法です。

諸君、試みたまえ。Try。ここに、われわれの生命がかかっている。謙遜になりたまえ。なりたまえでない、なりましょう。Let us、なりましょう。皆さん一緒になりましょう。謙遜になりましょう。われわれは謙遜ではない。われわれは傲慢です。そうだから進歩しない。カーライルは「キリスト教は謙遜の宗教」と言った。これは味わうべき言葉であります。

言いたいことはまだ残っておりませんが、これはまたの機会に譲ります。大体私の話したいということは、不十分でありますけれども話したように思います。

最後の私の心境。はじめに歌いました歌、二首、もう一度歌ってみます。

聖霊の 御交わりは ただ御名を 呼ぶことにより 神よりぞ受く

聖霊の 御交わりは ただ御名を 呼ぶことにより 神よりぞ受く

受ける、receive です。

聖霊の 御交わりを 受くるには 何につけても 安らかりけれ

聖霊の 御交わりを 受くるには 何につけても 安らかりけれ

アーメン。

主の名によって感謝し奉る。アーメン。

## 第一六講 善導・源信・源空に学ぶ

### ロマ書一〇章二一節―二三節

(昭和五四(一九七九)年六月一〇日)

今日は六月一〇日、恵心僧都のご命日・ご永眠日に当たっております。こういうことは数年に一回しかありませんから、今日は「善導・源信・源空に学ぶ」と題しまして話をしたい。

私は二年前八〇歳になりましたから、導源と申しております。善導の「導」という字と、源信の「源」という字を取りまして、二年前から導源と自分で申している。二、三の私の若い友人は、私を「導源先生」と言ってくれています。私はそれを受けている。それはなぜかと言いますと、私は善導大師、源信、源空と、このお三人の信仰の態度に学びたい。少しでも真似をしたい。もちろん彼ら三人は、阿弥陀仏が救い主です。私の救い主はイエス・キリスト。救い主は名前が違う。私の救い主は、主イエス・キリストです。しかしながら、彼ら三人が彼らの救い主を信じましたその態度から学びたい。

四つのことについて述べます。

第一は、彼ら一人一人から学んだことについて述べます。

第二は、三人一緒から学んだ点。

第三は、この三人ではなしに、われわれの祖先が信じましたいろいろなお経の文句とか、そういう雑について、二、三の文句について学びたい。

第四は、私の希望について述べます。

第一、お三人のそれぞれから、学んだ点。まず善導から。

善導から二つ。まず第一は、善導という方は「観無量寿経」というお経の注釈を書いた。これが「観経疏」となって、世界中これ以上の注解書は出ない。この「観経疏」の中に、善導曰く「この経によりて深く信行するものは、必ず衆生を誤たず」と言った。この善導のお言葉が私の心から離れない。善導大師は、この「観無量寿経」のお経を深く信じて行なうものは必ず衆生を正しく導く、と言った。私はこの言葉を羅馬書に移したい。「ロマ書を深く信じて行なう人は、衆生を、人類を、正しく導く」と、そう移したい。

次。善導大師は、キリストで言ったら最も大事な福音の場所ですが、これを「本願」と申しておりますけれど、本願を善導大師は注釈した。注釈した時に、本文には「信じて称名する」と、「信ずる」という字と「称名」という字と二つ書いてある。それを善導大師は、「信ずる」という字を取ってしまった。「称名」一本にした。そうですから善導大師は、「信ずる」という信仰なしに、ただ「称える」というだけで救われるのだと思えば信仰がついてくる、主観的には称名一本と、こう理解することがすなわち信仰を含むことになる。実験上、信仰が含まれてくる、そういうことを善導は初めて言った。以上、善導、終わり。

今度は恵心僧都。恵心僧都は、「横川法語」。「妄念のうちより称名せよ」という文句。妄念というのは、信仰がない。信仰がないままで称名せよ、これで必ず浄土に生まれる、と言った。それから恵心僧都でも一つ、「われわれは極楽に行くまで妄念の凡夫」と言った。向こうの国に行った時に初めて悟りの心になると言った。これが源信から学んだ点。

源空・法然上人から学んだ点に移ります。

第一、法然上人のお言葉に「阿波介あわのすけという一文不知の陰陽師が申す念仏と源空が申す念仏と変わりめなし」。

阿波介というのは芳之助とよく似ている。阿波介という陰陽師——占い師でしょう——陰陽師が申す念仏と私が申す念仏と一緒に言われた。私はこの文句が最もうれしい。「阿波介という一文不知の陰陽師が申す念仏と源空が申す念仏と変わりめなし」。

源空から学ぶ点、もう一つ。源空のお言葉、「信じてても信ずべきは乃至十念の言葉、下十声に至るまで、乃至十念の言葉。頼みても頼むべきは必得往生、必ず往生する、の文句なり」。繰り返す。「信じてても信ずべきは乃至十念の言葉。下十声に至るまで、乃至十念の言葉。頼みても頼むべきは必得往生、必ず往生する」という文句なり。

これをロマ書にうつしたら、「信じてても信ずべきは『主の名を呼ぶ者は』の文句であり、頼みても頼むべきは『すべて救われる』の文句なり」。ロマ書一〇章一二節に尽きる。

第二番目は、三人から共通に、一つのことと感銘を受けた文句。それは、「二河白道の例え」という例えがある。善導大師が例えた二つの河、一つはむさぼりの河、一つは怒りの河。人生はむさぼりと怒りとこの河であるが、その真ん中に細い道があつて、称名していく細い道がある。その細い道さえ伝っていたら、怒りとむさぼりの河へ落ちずに向こうの岸へ着くと、そういう例えを善導大師が話した。その時に善導大師は、その河を渡って向こうへ、浄土へ着いた時の「その時の喜び、極まりなからん」と言われた。この二河白道の例えを、法然上人も非常に気に入っておられまして、実に最期に、この比喩のことを法然は話しました。源信・恵心僧都もこの比喩を非常に大切にしまして、この比喩にあうことが人生の宝だ、人生の意義はここにあると源信が言われた。事ほどさように、この二河白道の例えは有名です。その中心は、向こうへ着いた時に「その時の喜び、極まりなからん」と善導は言った。恵心僧都も、その時の喜び如何と言われた。

今日歌いました、「さまよえるもの」の讚美歌二二九番には「血潮の流るる御手をひろげて『生命を受けよ』と招きたもう」とありました。われわれが天国に着いた時に、イエス・キリストが血潮の流るる御手をひろげて待っていらつしやるよ。僕はそう思う。この永遠不滅の命を与えるためにイエス・キリストはこの世へ来られた。

これが、お三人から共通に感銘を受けた言葉。第二、終わり。

第三は「雑」ですが、これは法然上人の言葉でしたか、「声について、決定の思いをせよ」。「わが主イエスよ、わが主イエスよ。」法然上人は「南無阿弥陀仏」です、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」。この声、聞こえる声について必ずいくんだと、そう思えと言われた。声について決定の思いをなせ。

これは「観音経」、観世音菩薩のお経ですが、私の実家は観音経、観世音菩薩を尊敬した。私の養家は阿弥陀仏、同じく浄土宗ですけれども。私の実家は観世音菩薩を非常に尊敬した、養家のほうは阿弥陀仏ですが、この「観音経」の中に、「生老病死の苦、漸をもって滅せしめたもう」と書いてある。「生」生きる苦しみ、「老」年寄りの苦しみ、「病」病気の苦しみ、「死」死ぬ時の苦しみと、この人生の苦しみは漸をもって滅せしめたもう。内村鑑三は「聖霊は徐々にくだる」と言ったが、われわれの苦しみも徐々になくなる。

「観音経」にはまた「無畏を施したもう」と、「施したもう」と書いてある。「無畏」と言ったら「畏れなきの心、平安なる心」を与えると書いてある。「施す」、もらう。「畏れなきの心、平安なる心」を観世音菩薩は与えると書いてある。私は、イエス・キリストは観世音菩薩に勝るとも劣らぬ力を持つと確信する。イエス・キリストは力において観世音菩薩に私は負けないと思うな。観世音菩薩ですらわれわれに生老病死の苦を漸をもって滅せしめたもう、いわんやイエス・キリストの力においてをや。「大無量寿経」というお経

の中に、「易往いおうにして無人」と書いてある。「易往」と言ったら「往き易く」、「往き易くして人無し」と書いてある。

以上、私の「雑」miscellaneous words を終わります。

最後に私の希望。これは恵心僧都の歌、

われだにも まず極楽に生まれなば 知るも知らぬも 皆迎えてん

われだにも まず極楽に生まれなば 知るも知らぬも 皆迎えてん

これは源信の歌。

私の歌、

われだにも まず天国に生まれなば 知るも知らぬも 皆迎えてん

われだにも まず天国に生まれなば 知るも知らぬも 皆迎えてん

御名によつて祈りて。以上、感想終わり。

## 補遺 A 私の人生

(昭和四三(一九六八)年六月二日)

本日は、当教会といたしまして第二〇回目の聖霊降臨日を迎えました。私としまして、五〇回目の聖霊降臨日を迎えるわけでございます。

半年ほど病気をいたしまして講壇を休ませていただいておりましたが、本日から、講壇に立たせていただくわけでございます。

そういうわけで、本日はピリピ書の講義に入るはずでございますけれども、私にとりまして六月二日は、大正七年(一九一八年)の六月二日、私は洗礼を受けました。今日は洗礼を受けてちょうど五〇年の記念日に当たっておりますので、誠にお聞き苦しいでございますけれども、私の生涯、私の人生ということについて、しばらく語らせていただきたいと思います。お許しを願いたいと思います。

私の生涯ということになりますと、やはり信仰の問題になりますので、生涯の話を終えてから、私の信仰について語りたいと思います。

洗礼を受けたのが二〇の年ございましたから、今年はずうど七〇年目になるわけでございます。私のこの七〇年の生涯を顧みまするに、大体二五ぐらいまでの学生生活の時代、それから二五、六ぐらいから五〇ぐらいまでの会社員生活の時代、それから七〇まで、現在までの伝道者の時代と、大体三つになるわけでございます。その三つの生活について簡単に話すことを、お許し願いたい。

学生時代の二五年というのは、小学校・中学校は奈良県の田舎で暮らしましたが、高等学校は東京へ参り

まして三年、それから大学で三年過ぎました。高等学校は全寮制でございまして、寮に三年暮らして、大学時代は寄宿舎、キリスト教の同志会という寮で三年暮らしたわけでありまして。皆さんがお座りになつてゐる椅子は、同志会の椅子をもらつてきて今使つておるわけでありまして。

要するに、この二五年を顧みますに、高等学校の成績も大学の成績も平凡でありまして、中ぐらいであります。何らとりたてて人に優れているところはありませんで、平凡な生活だったわけでありまして。その間に内村鑑三先生やモーク先生というような先生に会いまして、聖書の勉強、聖書の真理を教えていただいたわけであります。

その次の会社員時代の二五年といふのも、これも安田信託で二五年勤めまして、ごく平凡でありました。会社で優秀といふことではありませんで、ごく平凡な会社員生活を二五年やりました。五〇近くになりました。でもまだ部長にして頂けずに、関係会社へ移籍を命ぜられるというようなことで、私の二五年といふものは誠に平凡な会社員生活だったわけでありまして。

それから最後の五〇から七〇まで、この二〇年の伝道生活も、この教会で二〇年やりましたが、二〇年の初めも終わりも大体同じよう三〇人あまりの出席者でありまして、平凡な牧師として二〇年やってきたわけでありまして。

そういうわけでありまして、七〇年の間、誠に平凡でありましたが、学生時代に内村鑑三ならびにミス・モークから教えてもらった信仰が、だんだん実を結ぶといひますか、それが育つていきまして、その神の子とせられた信仰と天国へ行く望み、復活させてもらうという望みが、いつの間にやら自分のものとなつたわけでありまして。

この平凡な生活を通じて、神が私に神の子とさせられた信仰、天国へ行く望み、復活させてもらう望み、そういうものを与えてくださって平安のうちに人生を送るということをお教へてもらって、私はこの平凡な人生というものがいかに意義深いものであるかということをつくづく今感じておるわけでありませう。どうぞ諸君も、平凡な生活を通じて、日々のいつもの生活を通じて、御言に養われて、信仰と望みを自分のものにすることを希望いたします。

自分の七〇年の生涯を顧みて、私は孔子の言葉が非常に心に残るのであります。孔子が「十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順したがう。七十にして心の欲するところに従って矩のりをこえず」と言いましたが、これは何も孔子でなくても、われわれ平凡な人間、私のごとき平凡な人間におきましても、この孔子の言葉は非常に耳深く迫るのであります。

一五にして中学から高等学校で勉強をする。それから「三十にして立つ」、三〇にして大体職業に就く。四〇になってこれでいこうと、あちらこちら迷わずにこれでいくんだということが決まりましたし、五〇になってくると、幾分か己を知ることになってくると思ひます。「六十にして耳順う」、六〇になって人の言うことにもやはり真理があると耳を傾けるべきだと、自分はこうであるけれども彼もこうであるという、他人の思想に対して尊敬を持つというようなことができるようになってくると思ひます。それから「七十にして心の欲するところに従って矩をこえず」、七〇にして少しくこの人生の意義というものが分かるのではなからうか、と思うのであります。本当の人生というものは七〇ぐらいから、本当の人生が始まるのであらうと、私はそう思うのであります。自分の経験を積んで、そう思う。

人間も、私のごときは蒲柳の質でありまして、首も細いし、非常に弱い体でありますけれども、幾たびも

重い病気をしましたけれども、不思議に癒されまして今こうしております。正直な勤勉な生活をいたしますと、健康も与えられて、七〇ぐらいまでは弱くても生きるんだというふうな気がする。諸君もどうぞ、あまり無理をせずに、正直な勤勉な生活を送られて、そして七〇ぐらいまで生きられるとやはり、本当の信仰の意義というようなものもお分かりになるのではなからうかと思うのであります。

これからが、私がこの世に生まれさせてもらった仕事をさせていただく時であると、私はそう思う。どうぞ諸君も、七〇までは準備の時期です。大隈重信でしたか、「四十、五十は鼻垂れ小僧、男ざかりは八十」と言われたそうですが、ちよつとこれはオーバーでありまして、やはり四〇、五〇ではまだ熟さないと云えると思います。四〇、五〇でも、ケネデイのような偉い人がいる。特別な偉い人は別だけれど、私のごとき凡人はやっぱり四〇、五〇ではまだ熟さないと云うところがある。六〇ぐらいになると熟するのではなからうか。六〇ぐらいから、六〇、七〇というところから本当の仕事ができるんじゃないかなと思うのであります。そういうふうには私は思うのであります。これは、私の人生に対する考え方であります。

内村先生にしましても、先生の不朽の名著である『ロマ書の研究』は、先生の七〇年の生涯の最後の二〇年にできた。最後の二〇年に先生のロマ書の講義もありました。先生のロマ書の講義は一九二一年、一九二二年です。先生の年も六〇過ぎております。先生は六九で亡くなったのですから、最後の二〇年に先生の不朽の名著が現われた。そういうわけで人間というものはやはり、どうしても準備というものが必要であると思うのであります。

次に私の信仰について、申し上げたいと思う。

私の信仰は、週報に三つの歌を書いておきましたが、こういうふうな三段階について進んできているよう

であります。

主イエスに ならい励まん 今日もまた

手にくるわざを 御国めあてに

これが、初めはまだ救いということは、分かっていたいなかったですから、主イエスにならい、「主イエスにならい」というのは、主イエスのような立派な人格というかそういうものにならって、一生懸命やろうという精神です。私、高等学校時代にキリスト教に接して、英語を勉強するつもりで教会に行きましたのですが、主イエスにならって励もう、というわけです。

それが洗礼を受けましてから、主イエス・キリストの救いの贖い、イエス・キリストの救いということが信じられる問題になってきまして、今まで主イエスを手本としてみていたのが、今度は「救い主」「主イエス」として見る時代がやってきます。

主イエスと 呼びて励まん 今日もまた

手にくるわざを 御国めあてに

それがだんだん、

主イエスと 呼ぶを励まん 今日もまた

手にくるわざを 御国めあてに

救われるのは、自分の信仰、自分の行ないによるのではない。イエス・キリストの贖いによるのだということが分かってくる。こうなってきましたと、救いのすべてはキリストが成就してくれたことになりますから、主イエスと呼ぶということが、それですべて、それで完結している。そうなってきましたと初めて、われわれ

に平安が訪れるわけでありませぬ。

「努力している間は迷っている」とゲートルは言いましたが、私は、ゲートルの意味はよく分かりませぬけれども、やはり「主イエスと呼ぶを励まん」とこういうふうには、もうすべてキリストが成就してくれたというふうな、贖いの真理が分からされるときに、私は人間は初めて平安を味わうのであると思うのであります。

主イエスと 呼ぶを励まん 今日もまた

手にくるわざも 御国めあてに

と、こうなつてきますと、自分が、俺が、自分というものが無くなってしまふ。すべてがもう主イエスに含まれてしまいますから、手にくるわざに励んでいることも、神に恵まれ、神に励まされ、神のうちにあつて天国のわざになります。そうですから第三の歌になつてきますと、初めて「主イエスにならう」ということが自然にできてくる。この第三の歌になつてくると、第一の歌が実行できるようになつてくる。

一、二、三と、これは段階でありますけども、これはぐるぐる回っているとみてもいい。主イエス・キリストの贖いとは、そういうわけであります。

内村鑑三先生にしても、初めは、洗礼を受けたころはやはり「主イエスにならい励まん」、イエス・キリストのような人になりたいと言っている。それから一〇年たつて、アメリカでキリストの贖いが分かつた。それから後二〇年して、一人娘が亡くなって、五〇過ぎで復活の望みが彼のものとなつた。

そうですからこの三つの歌は、初めの歌は「愛」、二番目の歌を「信仰」、三番目が「望み」と、そういうふうな思つていいと思います。この歌をひとつ、ご参考にしていただきたい。

要するに、信仰と望みと、信仰の行ないというようなことも、どのようにしたら信仰をもらうのですかと

よく聞かれますが、私もよく分からない。どうしたら信仰を得るのですかとよく聞かれるんですが、私は最近自分の経験を通じて、ロマ書の一〇章の一七節に「信仰は聞くことから生じ、聞くことは神の御言葉による」とありますが、これがどうも私は鍵のような気がしてきている。信仰を受けるのには、どうしても神の言葉を聞くという、そしてイエス・キリストの言葉、神の言葉を聞く、聖書の言葉を聞く。それから、その信仰を保つのも、神の言葉を聞く。信仰を保つ秘訣は、信仰を受ける秘訣と一緒です。そうですから、信仰を受け、保つのは、この「神の言葉を聞く」という一手なのです。人類に許されたのはこれだけです。

牧師なり教会信者になったら、もう聖書の勉強はしない。聖書の御言葉を、謙遜に御言葉を聞くということをしな。ほら教会へ行き、ほら幼稚園、ほら教会堂を建てなければと、そんなことを牧師はやっていて、御言葉を聞くということをしな。教会員になっても、ほら教会の奉仕だ、ほら青年会だ、そらなにやらず、聖書の、神の御言葉を聞くことをやらない。そうですから、もう信仰が止まってしまう。

この間、小原先生、玉川大学の学長の小原芳男先生の講演を聞きました。八〇のおじいさんですが、彼は二時間しゃべって、元気にやっている。彼が言うには、「地獄へ行つて一番多いのは僧侶と伝道師、地獄に行つたら牧師が一番多い。ここに牧師さんいられたら、ちょっとごめんね」と、僕の顔を見て言った。牧師とか、伝道師とか、僧侶とか、それに養われた信者は、真摯に勉強しない。他のことをやっている。ほら奉仕、ほらなんやらと。

そうですから、きょう洗礼を受ける人に言いますけれども、洗礼を受けたうちの教会員にも、また今日は私の尊敬する友人が三人来ていますが、その友人にも言う、「毎日やらなければいかん」。

私はこの信仰というのは、外国語の勉強によく似ていると思う。これは毎日やらなければいかんですよ。

日曜だけやっている。週に一回だけ勉強して外国語が上手になったなどと、そんな人、わたしは聞いたことがない。外国語は毎日やらなければいかんですよ。しかるにこのごろの信者は、日曜日に聞いているだけ。日曜日に行つてぼやっと聞いて、それでわしは信者でございと思つてゐる。もつてのほかですよ。それは、きつと地獄に行きますよ。そうですから小原先生が「地獄には、牧師ども、信者ばかりいる」と言われる。そういう意味におきまして、信仰は外国語の勉強によく似てゐると思つたのです。

そうですから内村先生みたいな信者は、外国語がよくできる。信仰の原理で勉強しているから、毎日やっているから上手になるんですよ。大抵、信者は外国語がよくできますよ。二〇年、三〇年、毎日やっているから。どんなほんくらでも三〇年読んだら、外国語はちよつと読めるようになるんですよ。信仰の原理、毎日やるといふ原理だから。

最後に私はちよつと感想を申しあげますが、コロンブスがアメリカを発見したという歴史を昔覚えたときに、*Columbus discovered America in 1492.* と覚えたものです。「イシクニ」と覚えた。一四九二年に発見した。私は思うのに、当時一五世紀に、西洋人のうちで、西に行つたら陸はあるだろうといふことを思つていた人は、コロンブスの他にも、わたしはあつただろうと思つた。しかし、大胆にそこをめぐけて航海したのは、コロンブスをもつて嚆矢とする。天国はあるといふこと、永遠の命はあるといふことを、ぱつと信じてゐる人はたくさんあるだろうけれど、それをめぐけて生活してるといふ人は少ない。

大体私のこの自分の人生を振り返り見まして、もし平凡でなく石館（守三）先生のようにこの世における恩恵が非常に多かつたら、私は信仰を捨てていただろうと思つた。石館先生というのは特別の例ですよ。この世のものも恵まれてゐるし、永遠不滅のものも恵まれていらつしやる。ちよつと例が無い、私はそう思う。

だから私のような俗っぽい人間には、この世のものを与えたらいかん。この世のものは取っておいたほうがよろしい。だから諸君も、この世のものをあまり望まないほうがよろしい。この世のものを与えられたら目がくらんでしまう。内村先生が言われた「私にして、もしこの世のものを与えられて、順調に行っていたならば、私は神もなく、来世もなく、普通の人であったであろう。しかるに神は、私にこの世のものを与えずに、だから私はこの信仰を与えられて、今望みを与えられておる。私は現在、かくあるのは、全く神の恵みによるのであって、自分にはよらない」と、内村鑑三は言った。私もまったく同感であります。

それでは、私の話は終わります。

## 補遺B 私の信仰——恵心流キリスト教——

(昭和四二(一九六七)年八月六日)

七月の最後の日曜から九月の第一日曜まで、当教会の役員方がお話しくださいまして、私、聖書の研究を休ませていただいておりますが、本日は長野(醇三)長老のお話になるときでございますが、長野長老はご健康があまり優れませんでしたので、私が代わって申し上げたいと思います。

聖書の研究の準備をしておりませんので、たびたび私から聴いていただいでいて、皆さんご迷惑でございますけれども、今日はまた「私の信仰」と題しまして、私の信仰略歴を聴いていただきたいと思ひます。お許し願ひます。

私の信仰は「恵心流キリスト教」と申しております。また「源信流キリスト教」とも申しておるのであります。一〇〇〇年ほど前に、日本に源信という優れた天台宗の僧侶が現われまして、浄土門の信仰を極めた先達であられたのであります。源信と申されましたが、比叡山の奥の恵心院というお寺におられましたから、通常恵心僧都と申しておりますので、名は源信と申されますけれども恵心僧都と言うほうが人口に膾炙しております。これは実に日本の仏教の歴史において誠に重要な位置を占める方であります。

その恵心の名前を借りまして、もし恵心僧都が現代にお生まれになってキリスト教を聴かれたならば、こういうキリスト教になるであろうと私思ひまして、恵心流キリスト教と申しておるわけであります。

後で簡単に信仰略歴を申しますとおり、私は浄土門の信仰を聞きかじりましたものですから、恵心僧都の信仰を少しく解釈することができます。自分のこの信仰を通してキリスト教を学ぶときに私の現在のキリス

ト教というのが現われているわけでありまして、それで私は「恵心流キリスト教」と申しておるわけであり  
ます。

以下、キリスト教信仰というのはどういうものであるか、恵心流キリスト教というのはどういうものであ  
るかということをごこれから申し上げたいと思います。しばらくご辛抱願いたいと思います。

まず、私の信仰略歴を申し上げます。

私は明治三十一年五月、西暦一八九八年に奈良県に生まれておりまして、そして奈良県の小学校を終えまし  
て、中学は県立畝傍中学という中学に行つたわけですが、この小学・中学時代が私にとりましては非  
常に思い出深い時であります。

姉がおりまして、非常に律儀な姉でございまして、小学校の時には私が小学校で学んできたことを、毎日  
帰つてきたら姉の前において復習をさせられた。本当にそれはもう毎日させられたわけでありまして、自分  
の仕事を毎日やるという、自分のすべきことを毎日やるという習慣はこの姉がつけてくれたようでありま  
す。これが終生、私のこの世の生活の原理であるのみならず信仰の原理になつたわけでありまして、毎日置かれ  
た自分の仕事をするという習慣、これを小学校時代にすでに姉がつけてくれたわけでありました。

中学時代はうちから四マイル（約六キロ）ほど離れておりました学校へ歩いて毎日通いました。この五年  
間歩いて通つたということが私の健康、小さい時分には弱くございましたが、普通な健康にしたのはこの中  
学五年の毎日朝と晩とに四マイル歩くということが私の健康を支えてくれたようであります。

小学校時代に姉がそういう習慣をつけてくれましたものですから、私は毎日必ず予習・復習というのをし  
ました。そうでありますので中学の成績も非常に優秀でありまして、中学校へ通うのが非常に愉快でありま

した。

私の一生を顧みまして、中学四年の時に母が亡くなりまして、その時に病氣したり、また五年の時は器械体操で足を折って五〇日休んだり、四年、五年はちょっとみじめでありました。しかし中学四年の一学期まで、母が死ぬまで、中学の一年から四年の初めというものは、実に私の黄金時代と言いますか、まことに今思い出すだにも嬉しい、毎日毎日をまことに愉快に暮らした記憶が残っております、私の人生において最も愉快なる時代は中学一年から四年までの間であったように思うのであります。

その四年のころに私は外交官になりたいという希望が起こったのであります。外交官になりたいという希望は、特に中学の漢文で孟子の「至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり」という、あの孟子の言葉が非常に私の心を打ちまして、人間というものは真心をもって話せば通じないことはないんだと、動かないものはないんだと、こういう一つの信念を与えられたようでありまして、さっそく「外交官になって、日本の国の将来のために尽くしたい」とそういう希望を持ったわけであります。

中学四年、五年と病氣をして、中学四年の時の秋に三カ月休み、中学五年の時にも一、二カ月休みまして勉強もうまくいきませんでしたけれども、外交官を希望しておりましたものですから、田舎の中学から一高を受けたわけであります。その年は入れませんでした。翌年、一高一部甲類に入学できまして、それから一高の寮の生活が始まったわけであります。私を外交官から伝道師になりたいという希望に転換させたのはこの一高の三年間の寮生活の間でありました。

一高へ入りましたのは大正六年、一九一七年の九月でございましたから、一高へ入るなり、その翌月一〇月から教会へ行きました。それは外交官になるにはどうしても外国語が一つ必要で、英語を勉強したい。英

語を勉強したいということ、それからバイブルを少し知りたいとそういう二つの目的で教会へ通ったわけです。

教会へ通い始めましてから一年たちまして、大正七年の五月に、一高の一年生の終わりころでしたが、教会で特別伝道説教がありまして、ホーリネスの中田重治という方がおみえになりました。特別伝道説教があった。その時に初めて私はキリスト教の「イエス・キリストの血、すべての罪よりわれをきよむ」というこの福音を聞いた。これが私の初めての経験でありまして、それを聴いて洗礼を受ける決心ができて、一高一年の終わりのころに洗礼を受けたわけです。

その洗礼を受けた時に、あたかも内村先生が二〇年間の沈黙を破って角筈より中央のほうへ出てこられまして、神田の基督教青年会館において再臨運動を中心とした聖書講義が始まった。ちょうど私が洗礼を受けた年でもありますので、内村先生の講義に列席しました。

それから先生の講義は日曜日の午後が日曜日の午前に変更になった。先生の集まりは日曜日の午前になりました。それから、私は教会で洗礼を受けておりました。教会へ出ておりましたが、日曜日の朝のバイブル・クラスを終えて、直ちに先生の集まりへ走っていった。ちょうど一〇時半ごろに向こうへ着きますものです。内村先生の前座の畔上賢造先生の講義が終わって内村先生の講義が始まる直前に到達する。一〇時に表門は閉まりますから、裏門から入って、ようやく先生の講義を聞いた。

大正七年の末から大正一二年の関東大震災で先生がその場所をお捨てになるまでの五年間にわたって、毎日内村先生の講義を聴いた。

これが、私はちょうど一高から大学へかけての時代でありました。福音の種は中田重治先生によってまか

れましたが、内村先生の講義は、旧約はダニエル書、ヨブ記、それからロマ書、共観福音書と五年にわたってございました。先生の講義をだんだん聴いているうちに、いよいよ一高が終わる時には伝道者になる決心ができておりました。

しかし、これに親父が非常に反対いたしましたして、親父の反対に従いまして私は牧師になることをやめて、大学は普通の大学に進みまして、東大の法学部の政治学科へ進んだわけであります。

大学へ入りましてから同志会の寄宿舎へ入りまして、大学時代は同志会の生活が始まったわけであります。同志会では大正九年から大正一二年まで、一九二〇年から一九二三年まで、毎朝この椅子でご厄介になったわけがあります。君らはその椅子に今腰かけていらっしゃるわけがあります。

そういうわけでありまして、その間に内村先生のロマ書の講義があった。大正一〇年一月から大正一一年の一〇月まで、約二年にわたって先生のロマ書の講義があった。

そのロマ書の講義において、本日が拝読いたしました三章の二一節、すなわち「しかるに今や、神の義はあらわれた」と。「律法とは別に」、「律法の外に」と前の旧訳ではありましたが、それを内村先生は「律法と無関係に神の義はあらわれた」と、「律法、道徳と無関係に神の義は人間に臨んだ」と話された。この言葉が私の心を捉えた。

数年前に中田重治先生より「イエス・キリストの血、すべての罪よりわれをきよむ」ということを聞いて信じておりましたが、その信仰の理論的根拠といえますか、それが内村先生によって、ロマ書三章の二一節から二六節の先生の明確なる、詳細なる講義によって、動かすべからざるものとなった。これがすなわち私のこの信仰の確立した時であり、これが現在に及んでおりまして、今述べておるのはそういうことを述べてお

るのに過ぎないのであります。

一九六一年、六二年と、先生がロマ書の講義をされて四〇年、数年前にここで、六一年、六二年にわたってロマ書の講義をいたしました。今度一九七一年、七二年と、先生のロマ書の講義から五〇年の時にもう一度、ここでロマ書の講義を皆さんに申し上げたいと思っっているわけであります。本日、ロマ書から読んだのはそういう意味であります。

それが私の信仰であります。

大学を出てから、詳しくお話しはできませんが会社へ二二年勤めて二一年目に家内が亡くなりました。福岡で亡くなりまして、そして二二年目に伝道師に転向いたしました。転向しましてから現在二〇年になっておるわけであります。

私の生活は内村先生とよく経歴が似ておりまして、三つに分解できるのであります。学生時代、社会に出た時代、それから伝道時代と、こう三つにはつきりと分かれているのでありまして、この点、内村先生とよく似ている点を感じているわけであります。

また高等学校の時代から大学まで六年間にわたって、冬休み、春休み、夏休みには、郷里で島村清吉という先生から浄土真宗の講義を聞いた。この先生は数学の先生でありましたが深く浄土真宗を研究しておられました、その先生に浄土真宗の講義を聞いて、浄土真宗の信仰について少しく学んだ。源信の信仰、あるいは法然上人の信仰、親鸞の信仰について少しく学んだわけであります。

そういうわけでありまして私の血というものは、東京において内村先生にキリスト教の信仰を聴きつつある間に、郷里において浄土門の信仰を聴きつつあった。両方面から私の信仰というものが養われているわけ

であります。

そういうわけでありまして、私の恵心流キリスト教というものを一言で言えば、

主イエスよと 呼びて励まん 今日もまた

手にくるわざを 御国めあてに

と、この歌に尽きるのでありまして、この歌について少しく解釈を試みたいと思います。

主イエスよと 呼びて励まん 今日もまた

手にくるわざを 御国めあてに

と、これは一つの和歌ですが、一つのギリシヤ文とみてもらったらいのでありまして、ギリシヤ語の sentence とみてもらったらいのであります。

ギリシヤ語におきましては、初めの言葉に最も重点がある。私の歌もこの「主イエスよと呼びて」というところに、これに九九パーセントの重みがある。九九パーセントというのが大きければ、九五パーセントと言っても良いでしょう。それから最後の「御国めあてに」です。ギリシヤ語では初めの言葉に最も重点があつて、最後の言葉に次の重点がある。だからこの歌も「御国めあてに」という、これにすなわち重点がある。これが四ぐらいの重さ。これで九九の重み。それから「励まん 今日もまた 手にくるわざを」、これが一ぐらいの重さです。

重さを言えば、「主イエスと呼びて」というのが九五パーセント、「御国めあてに」が四パーセント、それから「励まん 今日もまた 手にくるわざを」と、これが一パーセントであります。

以下、簡単に説明を加えたいと思います。

「主イエスよと呼びて」、主イエスと呼ぶこと、これに私の九五パーセントがかかっている。それは、今日読みましたロマ書の一〇章九節「自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる」。救いの条件としてパウロが言っているのは、イエスはよみがえったということを中心で信ずる。イエスはよみがえったと心で信ずるということは、自分の罪のために罪を贖ってイエスはよみがえったと、贖いを信ずることを言う。心ではイエスの贖いを信ずると、口では「主は、わが救い主なり」と言い表すと、これがパウロの救いの条件です。

「わが主イエスよ」と口で言うということは、これはパウロのロマ書一〇章の言葉で言えば「人間的救いの条件」です。そうですから、「主イエスよ」と呼ぶことは人間側の救いの条件を成就することになる。「主イエスよ」と呼ぶということは、人間側の救いの条件の成就です。

イエスは、「『主よ、主よ』と言う者ことごとくは天国に入らず、ただ御旨を行なう者が天国へ入るのである」と言われたが、この言葉によって「主よ、主よ」と呼ぶということを非常に軽視する人がありますが、この文章をよく読まれる必要がある。「主よ、主よ」と言う者、ことごとく天国は入らんぞ、御旨を行なう者が天国へ入るんだとイエスが言われたということは、「主よ、主よ」ということは天国へ入る条件であるということとはちつとも変わっていない。東大の入学試験を受けるということは、ことごとく東大へ入学せんぞ、ということをしてイエスが言った。入学試験を受ける者はことごとくは入学しないぞとイエスが言われた。「主よ、主よ」と言う者、ことごとくは天国へ行かないということは、少なくとも「主よ、主よ」ということが条件になっている。そうでしょう。試験を受ける者はことごとくは入学させないということは、試験受けるということは条件になっている。試験を受けなければ東大に入れない。

そうですから、同じ「主よ、主よ」といっても、すなわちイエスは救いのために復活したんだというこの贖い、イエスの復活、を信じて「主よ」と言うのはこれは救いの条件でありますけれど、ただこの世のものを欲しさに「主よ、主よ」と言っている者は、これは天国へ行かんぞと言った。当然ですよ。だから、「主よ、主よ」と言うことは、これは私は人間的条件、人間側の救いの条件、成就。

それからもう一つは、「わが主イエスよ」と言うことはこれは祈りの極致だ。諸君は「主の祈り」を繰り返してよく読んでみたまえ。「主よ、主よ、わが主イエスよ」と言うことは、全く主イエス・キリストの「汝らはかく祈れ」という祈り、これを一口に言い表したらこれになると私は信ずる。間違いかもしれない。諸君ら、研究したまえ。これは「主の祈り」。

祈りのないところにキリスト教生活の力はない。キリスト信者の無力ということは、祈りがないということとを意味している、このごろのクリスチャンの無力ということ。僕はそう信ずる。このごろは、祈ということとは、クリスチャンの生活においても無くなっている。そうですから、少しも力がない。このごろのクリスチャンはふらふらしている。

一つ「わが主イエスよ」と祈ってみなさい。僕はいつも朝起きる時に「主イエスよ、主イエスよ」と、一遍「主イエスよ」と呼んで、「きょうは主よ、守りたまえ」と言って起きる。諸君も一つ、明日から起きる時と寝る時と祈りたまえ。少なくとも、起きる時と寝る時に祈りたまえ。諸君に勧める。

これは祈りの極致であるのみならず、もう一つは、「わが主イエスよ」と呼ぶことはこれは愛の実行です。愛の実行というのは、アガペー、愛を実行するということは「身を焼かるるために人に施しても、アガペーがなかったら、そんなものは愛と言わない」とパウロは言った。コリント前書一三章においてパウロは、ア

ガペーの愛というのはどういうものかということを展開した。身を焼かれるために人に施しても、そんなものは愛と言わない。親が子どものためにがたがたやっている。そんなものは愛と言わない。似たところもあるけれど、そんなものは、アガペーと言わない。

アガペーという愛は、すなわちキリストの愛。その愛。永遠の命と関係ある愛をアガペーと言う。永遠の命と無関係の愛は、そんなものは人間の愛です。ちよつと人を甘やかして喜ばせているようなもの。甘いものを食わせているようなものです。胃に悪いかも分からない、ひよつとしたら。当初はいいかもしれないけれども。

キリスト教の愛、アガペーというものは、岩石のようなものです。内村先生はそう言った。「愛というのは岩石のようだ」と。甘いものではない。

そうですから、「主よ、主よ」ということは、これは、キリストが十字架にかかってわれわれの罪を贖って、われわれに永遠の命を与えて神の子としたということを感じた時に「わが主イエスよ」と出る言葉です。神の愛が分かった時に、アガペーが分かった時に、わつと出る言葉です。「わが主イエスよ」という言葉は、愛の発現です。

私は、人間のアガペーを表す単純にして究極の言葉は、「わが主イエスよ」という言葉だと思う。

そうですから、私のキリスト教というのは九五パーセントは「わが主イエスよ」と呼ぶにある。パウロが書いてあるとおりイエスの復活を信じて。イエスの復活を信ずるということは、わが罪のためにイエスは十字架にかかってわれらに永遠の命を与えてくださったと、イエスの復活を信じて、「わが主イエスよ」と呼ぶ。これに、キリスト教は九五パーセント尽きている。単純にして容易です。

そして「わが主イエスよ」ということは、人間的わが救いの条件の成就であるのみならず、これは祈りである。愛の実行である。

病気になったらできないですよ。病気になったら、何かやっていけないのですか。病気になっても、けがした時になっても、死ぬ時でも、「わが主イエスよ」ということは言える。

「男女・貴賤、行住坐臥、時処諸縁を論ぜず、これを修するに難からず、乃至、臨終に往生を願求するに、その大儀を得たりと、恵心の先徳の書き置き賜えるかなや」と法然上人が言った。源信・恵心がそう言った。男女・貴賤、阿弥陀仏の名を呼ぶ、南無阿弥陀仏と称えることは、これは易い。「男女・貴賤、行住坐臥、時処諸縁を論ぜず、これを修するに難からず、乃至、臨終に往生を願求するに、その大儀を得たり。誠なるかな」と言つて、源信の言葉に法然が賛嘆した。

少しく浄土門について学んだ者は、パウロのロマ書一〇章の「心に信じて義とされ、口に言い表して救われる」とあるこのことは読過できないですよ。少しく浄土宗について学んだ人は、ここは黙って読むことはできない。

このロマ書一〇章の一節から二三節について僕は、必ずこれは世界的注目をひく時があると思う。私は「主よ、主よと言う者、ことごとく天国に入らず」という言葉があるが、パウロはロマ書一〇章一三節において「なぜなら、主の御名を呼び求める者は、皆救われる」と、救いの条件として主の御名を呼び求めるということを言っている。実にこのロマ書一〇章の一節から二三節は、世界的にこの真理はまだはつきりされていない。私はそう思う。ここはまだ、世界的に問題になっていないです。ここは日本の浄土門を分かった人がこれを明らかにする義務がある。私はこれを確信する。

「贖いを信ずる」ということについて、一つ注釈を加えておきたい。

カトリックでは、信仰と行ないと二つで救われる。新教では信仰だけで救われる。信仰だけで救われるとはどういうことかという点、もう一度それを具体的に言えば、十字架の贖い、イエスの復活、その贖いだけで救われるか、贖いと信仰というものが要か。信仰だけで救われるというのは、贖いだけで救われるのか、人間の信仰というものの二本立てで救われるのか。贖いだけで救われるのか、贖いと信仰の二つで救われるのか。現代は、この「贖いを信じて救われる」ということについての理解がはっきりしていない。

浄土門の信仰を学んだら、これがはっきりする。「贖い」というものを信じて救われる」と聖書に書いてありますから、贖いというものと信仰というものと二つ必要のごとく、われわれは思いがちです。これははっきりしなければいけない。これは日本の浄土門を学んだらはっきりする。

救われるのは、ロマ書三章二四節「彼らは、価なしに、神の恵みにより、イエス・キリストによる贖いによって義とされるのである」と。ここには「信仰」という言葉はない。「彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって義とされるのである」。ここには「信仰」という字はない。

そうですから、よろしいか、主観的に言えば、この二四節です。私たちは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって救われる。主観的に言えば、信仰というのではない。贖いだけで救われる。

主観的には、私は信仰ないですよ。私の理解は「贖いだけで救われる」と信じている。信じているという言葉が言ったら信心が出てきますが、私は「贖いだけ」、「贖いだけ」です。それを丹羽君が「小西先生は贖いだけで救われると信じている」と言う。第三者の丹羽君が、「小西先輩は贖いだけで救われると信じてい

る」と言う。そうですから神は「汝の信仰」「汝の救い」と言っておられるのはそのことです。私自身、主観的には信仰というのはいけません。私自身は「贖いだけで救われる」、この二四節です。「彼らは、働なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって義とされたのである」、それだけです。そういうふうにはわたしは理解している。それを丹羽君は「小西先輩は贖いによって救われると信じている」。僕は信じているんですよ。しかし、私の主観的理解というものは贖いだけです。贖いだけで救われるという理解です。信仰というものはないです。よろしいか。

「贖いを信じて救われる」といったら、贖いと信仰と二本立てではない。贖いと信仰の二つで救われるのではない。キリストの贖いだけ。十字架の贖いだけで救われる。たやすいですよ。そう理解していることを、他人が私を「小西は贖いだけで救われると信じている」と言う。そういう理解は浄土門を勉強すればはつきりする。

文字にすれば客観的に言わなければならないから、「恵みを信じて救われる」とこうなりますから、信仰と贖いと二本立てのようになっていく。そうですから、「いや、私は信仰が薄いですから」と、「信仰が薄い」というのは贖いが分かっている証拠です。「私は信仰が薄いですから、何年たっても分からない」、それは贖いが分かっている証拠ですよ。「贖いで救われる」と理解するのは、信仰は薄いも厚いもない。受けるか、受けないかだけです。「贖いを信じて救われる」と書くと、贖いと信仰と二本立てに見えるけれど、一本立てですよ。贖いだけで救われる。それが口で言ったら「わが主イエスよ」となる。

それから「御国めあてに」、これは、「主イエスよ」と本当に言えたら「御国めあて」が付いてくる。また「励まん今日もまた 手にくるわざを」も付いてくる。「御国めあてに」と、これは「主イエスよ」と言えば

天国に行くという望みが出てきますから、毎日、天国をめあてに生活する。

これが信者と未信者との区別です。信者は御国めあてに生活していますし、未信者はこの世のものをめあてに生活している。これが信者と未信者の分かれるところです。このごろのクリスチャンはクリスチャンでございと、この世のものをめあてにしている。それはクリスチャンではないですよ。

この世のものは移り変わる。この世において大学者、大政治家、大実業家になっても、それは過ぎ去る。パウロは「これは糞土のごときものだ」と言った。そうですから、この世においては尊いものでありますけれども、永遠の天国へ行けば、そんなものは小さいものです。信仰の問題を論じて、永遠の命の問題を論じて言えば、この世においては大きいけれども、この世のことは小さいことです。この世においてはそれに対して尊敬をし、それに敬意を表する必要はあるけれども、ひとたび永遠不滅のものと比べたら、それは小さい。

だから「御国めあてに」となるまでは、キリスト教が分からないということです。この世のものをめあてにしている間は、まだキリスト教が分かっていない。永遠不滅のものが分かっていない。牧師でも、じきに牧師を辞めて信者に返るといふ。それは天国が分かっていない。正直な牧師は牧師を辞めてこの世の人に返りますよ。永遠不滅のものが分かっていない証拠です。

この「御国めあてに」といふのが、これが恵心流キリスト教の第二の強調点です。「主の名を呼ぶ」といふことが、これを恵心が「称名」、名を呼ぶといふことを言った。それから恵心は「御国めあてに」と。永遠不滅の命を日本において最も明瞭に表したのは、恵心僧都です。日本仏教史において浄土というものの、人間のこの世の命に対して永遠不滅の命を明らかにしたのは源信です。

それから「励まん今日もまた 手にくるわざ」、これは一〇〇分の一、毎日手にくるわざを御国めあてに。神の意思を行なうということは難しいようでありませけれども、自分の手にくるわざのうちで、自分が自分を見いだして行なうこと、その手にくるわざの道で自分の義務を見いだして行なうことが、神の意思を行なうということになる。神の意思を行なうと言ったら、空漠にこのように考えるのではない。目の前に置かれた仕事において、実証的に考えて行なう。そうですから、われわれの一日というのは、実に無限、天国に直結している一日です。「手にくるわざ」というのは、自分が義務と思うことを行なう。イエス・キリストの三三年の生涯と言っても、一言にして言えば、手にくるわざをなさったにすぎない。

昔から仏教では、身・口・意と、三つの修行を言う。口と心と体と、身・口・意と言います。

イエスは、口では祈られた。イエス・キリストは朝早くから祈ったと聖書、ルカ伝に書いてます。朝早くから祈った。口ではイエスは祈った。心では、イエスはどういうことをやっておられたか。「自分は神の子であって天国へ帰るんだ」ということを思っておられた。自分は神の子である、天国へ帰るんだ、主のもとへ帰るのだと、そういう心を持っておられた。それから身では、「手にくるわざ」、毎日大工の時には大工をなさるし、十字架が来たから、これは担うべきものであると思つて十字架を担われた。手にくるわざをせられたにすぎない。

われわれも救われて、口では「主イエスよ」と言う。心では「御国めあてに」、そして手では「手にくるわざ」をする。イエス・キリストのまねです。これでわれわれの生命は永遠性を帯びてくる。大工の職でも、家の掃除でも、洗濯でも、飯炊きでも、外の人からは小さく見えるかもしれないけれど、それがわれわれは永遠不滅の復活の天国に直結している。これをクリスチャンと言う。

能力のある人は大いに勉強して、大学者、大政治家、大実業家になってよろしいですよ。僕は止めていない。それはしかし、永遠不滅の宝に比べれば、この世の宝です。政治、経済というのはこの世のものです。それは五〇年、一〇〇年のものです。

私の歌は、

主イエスよと 呼びて励まん 今日もまた 手にくるわざを 御国めあてに

そして今言ったとおり、「主イエスよ」ということが九五パーセント。「主イエスよ」と呼ぶということ、これが呼べたら「御国めあてに」が付いてくるし、「手にくるわざ」が付いてくる。

私はこのごろ時間割を決めまして、中学生のように六時間勉強しているのですが、私の人生において中学一年から四年までに楽しかった時代を、今再現している。実に私は愉快です。

特にエペソ書、去年から今まで、主に英語の注解書を通じて聖書の研究をやっておりましたが、去年のエペソ書に入りましてからも注解書は一冊、英語とドイツ語一冊に決めた。それから、原文を読むということ。原文は幸いにギリシャ文でありますので、よくは読めませんが、字引を引いてこつこつと幼稚園の生徒のように学んでおります。すなわち原文を読むということをして、そうですから注解書は一冊。原文を読むことをやった。

そうですから私の聖書講義というのは、原文を読んでいるだけです。ルターの英訳、独訳の注釈を主に参考いたしましたして、パウロ先生に学んでいるようなものです。パウロの書いた本を読んで考えて説教しているだけです。毎日曜、私の説教はパウロとルターとから出ている。そうですから、ロマ書の研究になると内村先生が出てきますが、現在はもうパウロとルターです。パウロの本文、それからルターの独訳の聖書、こ

れが唯一の私の基準の聖書。聖書講義は、もう注解書を読む力がありませんから、だからそういうものを読  
んで、皆さんに講義を聞いてもらうのです。

## 補遺C 私の信仰——信仰はただ一つ

(昭和四二(一九六七)年八月二七日)

本日は柴田(徳衛)兄弟がお話しをいただく予定にしておりましたが、奥様のお母さまが亡くなられまして、ご葬式その後いろいろまたご用事のために、本日はご出席なれませんので、私が代ってお話しをすることにいたしました。ご了承願います。

「信仰はただ一つ」と題を書いておきましたが、八月六日には「私の信仰」と題しましてお話しいたしました。そして、「恵心流キリスト教」という副題を掲げました。本日も私の信仰について語るわけでございますけれども、名前を付ければ「信仰はただ一つ」ということになります。

「信仰はただ一つ」というこの題は、本日私が朗読いたしましたエペソ書四章の一節から七節のうちに「主は一つ、信仰は一つ」と言っております。これはエペソ書を学びました時に詳しく勉強いたしましたけれども、この夏休みにエペソ書を復習させていただきまして、この「信仰は一つ」ということに深く感銘を受けましたものですから、本日はこれをもって題として話したいと思えます。

古い話になりますが、大正一〇年(一九二一年)、大正一一年(一九二二年)と、四五年、四六年前になりますが、その時に私はちょうど大学の学生でありまして、同志会というところにおりました。当教会のこの椅子は同志会の椅子ですが、キリスト教の寄宿舎でしたから毎朝その椅子に座って朝の朝礼をいたしました。それから日曜日は内村先生の集まりに行つて内村先生の講義を聴いていました。毎日曜。その時、ちょうどこの大正一〇年一一年は、二カ年にわたつて内村先生が有名なロマ書の講義をされていた時であります。

その当時、内村先生の集まりの中で『靈交』という雑誌が出た。これは一年間続いたのですが、第一号が大正一〇年、一九二一年の一〇月に生まれて、それから大正一一年九月に第一二号が出ました。別に内村先生の『聖書之研究』というマンスリー・マガジンがありました。その内村先生の『聖書之研究』とこの『靈交』というのを二部出すのはなかなか困難であると、その一二号の終りで、『靈交』は『聖書之研究』に合併することになって、これは一年で廃刊になりました。

その『靈交』という雑誌は内村先生の集まりで出された本ではありますが、編集者は黒崎幸吉、発行人は畔上賢造となっております。

その雑誌に、当時ロマ書を聴いていた私が自分の信仰を書いて、投稿した。黒崎編集人がそれを採用してくれまして、「私の信仰」が五つここに載っている。第二号、第四号、第六号、第八号にわたって、四回にわたりまして「私の信仰」をここへ載せてくれた。

それが現在の私の信仰である。四五年間になりますけれども、少しも変わっておりません。そのままです。「私の信仰」と題しますので、ちょっとそれを読みたいと思います。

『靈交』という雑誌ですが、執筆者の目次が出ております。内村鑑三、黒崎幸吉、小西芳之助。私その時には小西ではなかった、今西ですから「今西芳之助」。内村鑑三先生と名前を並べてプリントになって出ているのは非常に光栄であります。大先輩の黒崎幸吉、それに小西、今西芳之助。

題は、内村先生は「信仰と教会」、黒崎先生は「偶像の数々」、私のは「信仰」。誠に光栄でありまして、記念にとつてあります。もう四五年たちますが、これは焼けずに残っておりますから、その五題を、簡単なものですからひとつ読ませていただきます。

原文は「今西」となっていますが、今は小西ですから小西と読み替えます。

### 「信仰」 小西

「お前は神の子か？」

「そうです。主イエス・キリストの贖いによって神の子です」

「お前のような祈りの精神の少ない、聖書を読まない、感謝の心の乏しい者が神の子か？」

「そうです。あなたは、天にまします私たちのお父さまをご存じないのです。そんなつまらぬ私を神の子とせんがために、御子キリストをこの世にくだし、十字架におつけくだされたのです。十字架を仰ぎ見よ。鈍き私ですら、折々感恩の情にあふれ、十字架のもとにひれ伏すことがあります。人間の言葉で言い表せばこそ、『キリストの血、すべての罪よりわれをきよむ』とか、あるいは『キリストの義』『われらの義』『キリストはわれらの義、聖、贖いとなりたまえり』とか、そういう言葉になりますが、これを味わった人は皆、神の力たることを知っておるのです」

「十字架の贖罪のことを君らは言うが、それにはなんか哲学的、哲理的根拠があるのか」

「心の実験なんです」

「奇妙なことを御信心だね」（会話であります）

おお、主よ、信仰を共にせざる人に会えば、いつも右のごとき経験をいたします。そして寂しくなり、悲観いたします。おお、主よ、われらを励ましたまえ。強めたまえ。主よ、感謝いたします。毎日曜日、大手町で内村先生にお話を伺うことに確信が強められます。御心ならば、パウロ先生のロマ書八章の実験がうそ

事ではなく、われらの実験となることができますように導きたまえ。」

これは私の祈りではありますが、こういうふうな私の信仰の告白であります。大正一〇年ですから一九二一年、ちょうど四六年前に私が書いたのですが、今と少しも変わらない。四五年このままを持続しておりますけれども、現在も少しもこれは変わっていない。不思議であります。

それからもう一つは、これは四号です。

### 「信仰」(其の二)

信仰とは、主イエス・キリストを知ることです。なお一層強めて言えば、彼の十字架を知ることです。あります。

十字架をいかにして知りましたか。まず自分の罪人たることを知ったのです。聖霊により、自分の罪を深刻に認めるようになったのです。私も道徳家をもって任じてきましたが、一高三年の生活以来、道徳的にも知力的にもいかに貧弱なる自分であることを深く感ずるようになりました。十字架の贖いを信知することができるようになりました。

内村先生に「われわれは平生、縛られていて、本当に哀れな状態にあるにもかかわらず、義人であり道徳家であると自慢しつつある者である」と教えられておりますけれども、本当にしみじみと自分の罪人たることを味わいまして、十字架を見上げるようになりました。私はこれを信仰と言いたいです。

信仰はいわゆる善をなすことでもなく、いわゆる祈禱することでもない。ただ神に頼ることです。

私の友人で「汝ら、わが愛におれ」というセリフをいつも口にされるのを聞きますが、信仰の真髄はここにあると私は信じております。私は常に思います。信仰の中心は十字架を信受することであると味わっております。

キリスト、罪人を救わんがために世に來たれり。信すべく、疑うことなく聞きおくべき話なり。キリストの血、すべての罪よりわれをきよむ、これが十字架の説明であります。福音とはこれをいうのであると信じます。

一九二二年四月一五日 母の死後、満七年

大正一〇年の四月一五日は母が死にましてからもう七年目になっているようであります。これが「信仰」の其二。

もう一つの「信仰」。

### 「信仰」(其の三)

「信仰は努力ではない。努力の中止である。信頼である。そのままである。キリスト、われにありて生けるなり。われ生くるにあらずである。主よ、主よ、主はわれのすべてである。われわれは、主に一点一画を付け加えるを要しない。主を受くることは全部である。福音とはまさにこれではなくてはならぬ。」

これは、大正一〇年一月号であります。

もう一つの「信仰」。四つ目。

「信仰」(其の四)

「パウロの信仰と、内村先生の信仰と、私の信仰とは同じである。感謝。僭越か、狂か暴か、また何か。世界最大の伝道者の名を自分と同列とするのは。しかし、よく味わえば味わうほどありがたいのである。もしイエスの福音(ヨハネ伝三章一六節、コリント前書一章三〇節)が真実とすれば、私の見解は正当である。しかしイエスの福音が真実だとすれば、この前提は私には問題にならぬ。なるほど、徳や、学識や、能力や、事績においては大差あらん。しかし、感謝である。

両先生(パウロと内村先生です)が神の子たるを得られたのは、ただイエス・キリストを救い主として受けられたことによる。主は私のすべてであると思うように、両先生のすべてでありたもうた。両先生が父の前に立たれる時には、人格や事業や学識をもつて讃えるにあらざして、主イエス・キリストをただ讃えるのである。私が彼に帰依するのと少しも変わらないのである。なんたる神の賜物ぞ、これをもしも福音と言わば、何をか福音と言わん。余輩はこの何を何事をも言い得ず、実に主はわが歌、わが喜び、わがすべてでありたもう。

一九二二年一月二六日午前

これは大正十一年の一月二六日の朝三時か四時ごろ、私の頭の中に浮かんだ文面であります。それで「午前」と書いてあります。

以上四つで、大体私の信仰を言い表したと思います。

もう一つ「信仰」。今度は「日本の女性を信ずる」。

### 「信仰」(其の五)

「八年前に死にました私の母の愛につき、一言したいのであります。

私の信仰を得るについて、先生はじめ、主にある数人の兄弟姉妹は特になくならぬものであります。しかし、その根底をなして私を励まし、信仰のなんたるかを了解せしめたものは、母の愛であります。私のもつて福音とするヨハネ伝三章一六節、コリント前書一章三〇節も、母の愛を通じてみる時、自分のものとなつたのであります。愛なる神はわれわれを救わんがために人の肉体を取りつたもつて、われわれの身代わりとなりたもつたことも、母の愛を通じてみる時、あり得べきことと存じます。母も私を救わんがためならば、私に代わつて永遠の刑罰をも必要ならば受けてくれたと信じます。私にしてみても母なかりせば、十字架の贖いを信知することができなかつたであります。

日本において浄土門の元祖ともいふべき恵心僧都が、いかに彼の母に思うところがあつたかを思う時に、これのみにても、日本女性の浄土門に対する地位を深く思わせられるのであります。またイエスの福音が日本に伝えられる時、日本女性の地位のいかなるものであるかを思わせられるのであります。

しかして私は母を通じてみる時に、日本女性がこの重大なる責任を果たしうる者たるを信ずるものであります。」

これが私の「日本女性を信ずる」という文。これも私の信仰の一つであります。

以上五つ、私の「信仰」を申しました。これは四五年前、四六年前書いたのでありますが、昨日のごとく感ずる。そしてこれが私の心へしみ込んだ。しみ込んだため、とれない。教会へ行こうが行くまいが、聖書を読もうが読むまいが、感謝しようがしまいが、これが心からとれない。これが、本日君たちに話している福音です。これです。これをしゃべっているだけです。

特に今日は「信仰一つ」といった。内村先生と、パウロの信仰と、われらの信仰とは一つです。

例えば、これは例がまずいかもしれないが、私の親父はウォルサムの時計を持っていた。もしウォルサムの金時計を天皇陛下も持っておられたとしたら、ウォルサムの会社、製造元からいった時計が、日本の天皇が持っておられようが、うちの親父が持つてようが、ウォルサムのこの金時計というのは一緒です。誰が持つていようが、天皇陛下が持つていようが、うちの親父が持つていようが、徳の高い人が持つていようが、徳の低い人が持つていようが同じ物で、もらい物だったら同じ物です。他者からくる信仰というのは、そういうものです。

浄土門の信仰にもそういう話がある。『歎異抄』にもそういう話がある。親鸞は善信と言いましたが、親鸞が「私の信仰は、師匠の法然上人の信仰と一緒だ」と言った。そうしたら法然上人の弟子がおさまらない。「善信、お前は何を言うか」と。「君みたいな信仰の薄い人間で、学問もなしに徳もない人間が、ご師匠の法然上人と信仰が一緒だとは何事だ！」と言って争いになった。それで、これは法然上人、師匠に言わなければいかんといって、師匠を呼んで、勢観房とかそういう一流の弟子をみんな呼んで師匠に聞いた。先生どうですか、法然上人どうですか、この善信はあなたと一緒だと言うと。すると法然上人が「善信の信仰も如来からもらった信仰。わしの信仰も如来からもらった信仰。同じ一つだ。同じだから同じところに行く」。法

然は「違つたら、僕の行くところに君は来れんぞ」と言われた。

他者からくる信仰は一緒です。ウォルサム会社で製造していたウォルサムの時計は一緒です。違うわけがない。そうですからパウロはここで「主は一つ、信仰一つ」と、パウロはエペソ書で言った。

もらいものです。信仰というのは自分でこねあげて、自分で信仰をもって自分でこねあげてるものではない。イエス・キリストの贖いで、救われるのです。そういうことであります。

これは、私が勝手に言っているのではない。内村鑑三がちゃんと同列に書いてある。パウロの信仰と内村先生の信仰と私と同じであるという。この号は『靈交』第六号です。この『靈交』には、「信仰と寛容」という題で内村先生が書いている。「偶像の数々」という題で黒崎幸吉が書いてる。そして畔上賢造が「来世の問題」ということで書いている。この間に挟まれて、今西芳之助が「信仰」を書いている。これは内村先生が認めているのです。「小西、お前の信仰はそれで、僕は印を押す」と内村先生が言つて。内村先生に印を押してもらわんでもいいですよ。聖霊自身が、われらを神の子たることをわれらに教えるのです。信仰とはそういうものです。自分でこねあげているものではない。こねあげているから、「いや、私は信仰が薄うございます」「私は」と、そういう必要はない。ウォルサムの時計は一緒です。

私は今ごろになってこれを出して、非常に光榮に思う。今日は話しすることがないから古い本を出してきた。私の「信仰」の号に、畔上賢造先生は「来世の問題」。『靈交』の私の「信仰」と同じ号に出ている、その畔上先生の「来世の問題」を読んで終わりたいと思います。

「来世問題」、畔上賢造。これは私の「信仰」の続きです。

「来世問題」四回目 畔上賢造

「来世問題は、宗教問題の最も大切な部分であります。というよりも、来世問題はある意味においては宗教問題の全部でありますと言うほうが、はるかに適切であるように思われます。このことは、人間というものの死ぬべきものであるということを考えれば、誰にも分かるはずであります。しかるに、このことが案外分らないでいるのが目下の大体の実情であります。ことに、二〇〇〇年間キリストの貴重な福音を委ねられたる欧州人において、キリスト教の外に来世問題を追い出しているのは、実に不可解なことであります」

現代だけでない。もう四〇年前に西洋人は大体来世問題を、キリストの復活とか、キリストの再臨とか、みんなそうやってしまっている。

「彼らのうちに少数の熱心な来世的信者のあることは事実であります」  
「やっぱりそういう人はいる、欧米人にも。」

「しかし彼らを大体において眺めて、最近数十年の強き傾向として、来世を忘れ去ったことを教えねばなりません」

もう畔上賢造先生の四〇年昔において、これは大体主流から変わらなない。

「この原因はどこにありますか。かつて米国の思想家がパウロについて言ったことがあります、今の人はあまりに地に膠着しすぎて天を忘れてしまったと」

地にへばりついて天を忘れてるといふのは、これは人間の習性です。猫は鯉節が欲しい、小判はいらない、これが猫の習性です。それと同じく人間は地のこと、この世のことにかじりついて、これは人間の習性です。

これは今に始まったことではないです。

「彼らは、地において勢力を張り、地上にあらゆる文明の便安（便利と安さ）を積み重ねることに極端に努力しました。彼らはそのため天を忘れてしまいました。もう天国は不要であると。なんとなれば、われらは地を天国となしつつあるからであると放言しました。彼らの中ではキリスト教的思想家であると崇められているオイケンのごときでさえも『地は今や文明の力をもって天国になりつつあるゆえ、在来のようないわゆる天国は不要である』と断言いたしました。

この世の制度や状態がいかにも理想的に完備しても、人間に「死」ある以上、到底天国となり得ないという簡単な一条を、彼らは愚者のごとく忘れたのであります」

人間というのは死ということを考えたくない。あっちへやりたい。死ということを言ったら、みんな嫌う。現実の姿は死に脅かされるということです。人間の本当の姿というものは。これを解決せずして宗教というものはないですよ。

「それでも彼らは、人間の力を過信したこの企てにおいて成功したでしょうか。あるいは成功の見込みがあるでしょうか。それならば少しは良いかもしれません。事実はその正反対として表れました。また表れつつあります。

地上を善化しようとする考えは、自分の国民を世界の主人としようとする考えにすぐ落ちていきます。この考えから欧州の各民族は、激烈なる争闘、競争、排外、嫉妬に陥るに至りました。平和の時においても、その内部にいかにも激しい争いと憎しみとが生じたことでしょうか。それがついに爆発すれば、人と人との相殺すという戦争となるのであります。このたびの世界大戦乱（第一次世界戦争）のごときは、実に過去数十年

の争いとねたみの爆発たるにすぎません。彼らは同一の神を父とする兄弟姉妹であると称しながら、たびたびこの大規模の国際的殺戮、殺すことに全力をあげて従事するのであります。

一七世紀のフランスに生まれた大思想家パスカルは『国内の小殺戮は殺人罪として問われ、国と国との間の大殺戮は勇ましき行為として賞せらる』というするどい言葉をもって世の人を戒めました。しかし、かかる思想家の戒めは顧みられないのであります。

そしてこの世を完全にしようという努力の表れであるところの文明の利器は、この戦争に悪用せられて、人命を破壊し、天然を破壊し、いわゆる彼らの天国に達する階段と自信しているところの文明都市の諸設備を破壊しさるのであります」

日本の二〇年前を見たら分かる。威張っていた文明も、破壊したら今はもう灰になってしまっている。

「彼らがそう託されたる福音の根本義を忘れ、神の備えたもう天国を捨てて、自分の力で地を天国にしようとした時に、そこにあまたの失敗がきたり。当然の結果を受けますのであります。

人が来世を忘れる結果は、現世に勢力を見いだそうとの努力となります。そのためにあらゆる迷執（頑迷と執です）、嫉妬、排斥、戦乱、墮落、罪悪が生まれます。われらはその生命の置き場所を間違えてはなりません。地に宝を積んではなりません。宝はぜひとも天に積むべきなのであります。

私はこのごろ仏典の浄土三部経をその和訳で読んでみました。そしてそこに浄土のありさまが実にうるわしく書かれてある、その想像の優雅なるに驚かされました。西方浄土の存否いかんは私どもの問題とするところではありません。その来世的憧憬の生み出した盛んなる文字が、われらをして嘆賞の心をおこさしめるのであります。

そして幸いにして、われらの先祖のうちには、この仏典の教えにしたがって純来世的信念に立った幾人かの  
大宗教家があり、そして彼らの言に聞きしたがって同じ信念に闡明を見いだした幾百万の平信徒のありしこ  
とを、われは誇りといえます。彼らが宗教というものの根本に至る来世憧憬の信念に生きたということ、  
バベルの塔を地に築かんとせずして、実に未来の浄土を思ったということと、その宗教的純真を、われらは  
喜びかつ誇りとするのであります。

われらは、かかる祖先の子孫として生まれました。われらは、祖先の御名を辱めてはなりません。われら  
は、近代の欧米人をまねてはなりません。幸いに仏教以上の神の教えを示されたわれらは、その宗教的純真  
を汚さずに保とうではありませんか」

これが畔上賢造先生の来世に対する一言であります。

たびたび申しますとおり、福音というものは、われわれにキリストの贖いによつて永遠の命を頂戴する、  
永遠の命がわれわれのものとなるということです。この世で健康になるとか、この世で偉いことをするとか、  
「この世で」というようなことはない。

そして、この永遠不滅の命を持った人が、この世において偉大なることをするのです。Greatなことを  
する。Large と quantity のと Great と quantity のは違ふ。Large と quantity のは大きくて quantity 分量が大きいこと  
なのです。Great という字は、これは立派なことです。このころの人間は Large です。大きいことばかり  
望んで、Great な人を知らない。

## 補遺D ロマ書大観

(昭和三七(一九六二)年二月二三日)

当教会は、第一四回目のクリスマスを迎えるわけでありまして、毎年こうしてクリスマスの礼拝を持たせていただけることを、誠に不可思議なるお導きと感謝をいたしております。本日は特に幸いにも、二年間にわたりまして講義して参りましたロマ書が丁度終わりにあたっております。第六〇回目、第六〇講にあたっておりました、先週一六章全部終わりましたが、本日は締めくくりといたしまして、ロマ書大観と題しまして、ロマ書全体につきまして、ロマ書の精神を学びたいと思います。

ヨハネは、イエスを信じその御名を信ずるものは、神の子とせられる力を与えられたということを言いました。すなわちイエスを信ずる者は救われるということをヨハネは言ったわけです。このイエスを信ずる者は救われると、信ずるといふことと救いということ、この問題を展開いたしましたのがこのロマ書一六章であります。ロマ書の全体は、信ずる者は救われるという説明であります。以下信ずるといふこと、それから救いということについて、説明をしたいと思えます。

ロマ書は信仰の書と言われておりますが、信ずるといふことを、本日は今日の私の説明を理解しやすいように、絵を描いておきました。

信仰という言葉、信ずるといふこと、これがキリスト信者の終生かかって学ぶ問題であります。このことが非常に簡単であると共に、これはまた非常に難しいと言えらるわけでありまして、ここにわれわれの全体がかかっていると言えらる問題であります。そうでありますので、パウロは一六章のうちの始めの八章を費やし

まして、信仰のことを説明したのです。

信仰のことにつきまして、まず感ぜられる問題は、信仰ということ論ずる前には、二つのことが問題になってくるわけでありませう。信ずるといふからには「信ずる人」と、それから「信ぜられる対象」、「何を信ずるか」といふ「信ぜられるもの」と「信ずる者」と、この二つが問題になってくるわけでありませう。

信ずる主体、この人間、私という言葉、これをパウロはこの始めの三章に向かって展開した。パウロは始めの三章を使って、われわれはどういう人間であるか、信ずるその主体はどういう者であるかということ、展開していった。この信ずる私はどういう者であるかということ、これがどういふ者であるかということを知ることが、これが信仰の基です。われわれが信仰を分らないといふのは、自分がどういふ者であるかということが分らないから、信仰の対象の信ずるものが分らなくなってくる。

そうでありませうので、信ずる自分といふものは、これはパウロのみならず、この信ずる人間といふ者が、自分という者が本当に神の前に正しきを行なうことができなものであるといふ、そういう者なんです。

そういう人間の自分が、聖書の言葉を借りて言えば、自分は神の前を歩いている罪人であるといふことなんです。そういうことをパウロは懇々と教えました。始めの三章を使って、人間といふものはすべて律法、道徳をもつてしては、神の前に、私は立派な人間である、本当に神の前に生きていける、といふふうな、神の前に正しく生きているといふそういうことを言える人は一人もいないといふことを言った。

これは、あまりパウロの言い過ぎであるごとく、われわれは初め思いますけれども、真実にわれわれの状態を見てみますと、どうしてもわれわれは本当に神の前に正しく生き抜くことができないものであるということが分かってくる。これがすなわち宗教の始め、キリスト教の始めであります。

多くの人が何十年やつても信仰が分からないというのは、この根本の問題が分からないから、自分は何かであるように思っている。自分は、私は信仰がありません、私は駄目ですと言っているけれども、大抵の人は、自分は何かによって救われる力があると思っている。それで、この福音ということが自分に来ない。腹いっぱい入っている者にはどうしても飯は食えないですよ。そうでありますので、どうしてもこの始めの信仰のほうには、自分の認識、自分が罪人であるということ、これがどうしてもこれが始まりになってくる。これをわれらは終生かかってこの問題を学ぶ。

親鸞上人はその『教行信証』の名著において言いました。「濁世じよくせの群生ぐんじやう、今の時の道俗ぢやくおのれが分を思量せよ」と言った。この濁った世の中に住んでおるわれわれ僧侶も俗人も自分の力を考えよと言った。私はこの心のここに宗教のほんとうの底があると思う。

ほんとうに自分という者は、善が行えない、ほんとうに自分という者は神の前に正しく行えない者であるということが分かってくるときに、われらはどうしたなら神の前に生きる者となるかという問題、正しく行えるか、正しく生きることが出来るかという問題になってくる。

その問題が、神から来る救いの問題でありまして、これが救いの中心問題、中心の賜物の何を信ずるか、信仰の客体、信仰の対象がこれなんです。神の知恵から、すなわちこれをパウロは神の奥義と言った。神の知恵です。神が知恵をもって神の奥義、神が知恵をもってそういうふうなこの正しからざる人間を救うのにかにしたら救えるかということ、神が知恵で考えて、神が方法をもってある救いの方法を考えた。それが十字架の贖いです。

独り子を下して、彼に平凡なる人生を送らせて、そしてついには人間の罪とがを贖うところ、十字架につ

いて罪を贖ってくださった。その贖いによってわれわれは神の子となる。これがヨハネの「彼を受けそれを信ぜし者には神の子たるの力を与えた」というのはこのことを言う。これが、十字架の贖いです。これがすなわち神の知恵であります。

その神の知恵を、その贖いを、真受けに受けるときにこれを信仰といいます。信仰というのはその贖いを、自分のために、これはいよいよ信仰の客体に触れてくるわけで、すなわちわがためにイエスが十字架について、自分の罪とがをすべて贖ってくだされて、自分を神の子とされた、神の子としてくださった、すべての救いの力、すべての救いの仕事は、全部神がしてくださいましたと、そういうことなんだ、それを受けることを信ずるという。受けることです。信ずるものは救われるというのはこのことです。

そうでありますので、何かここに「信仰」というときに誤解がある。というのは信仰によって救われると言えば、何か自分のほうで、信仰という受ける心の状態をつくった時に救われると、そう思ったらいかん。信仰によって救われると言ったらいかん、それはいけない。贖いによって救われるという。

これは言葉の綾ではありませんよ。そういう誤解を持って読めば聖書もそう読める。誤解を持たずに聖書を読んでください。ロマ書三章の二一節から終わりまで、虚心坦懐に読んで、十字架は完成されている。自分の信仰というある力を加えて、救いの力を成就するのではない、完成されている。それを受けるだけです。自分の信仰というものをもって、贖える力をプラスしているのではないですよ。ここに誤解がある。

二〇年三〇年やっても、いや私は信仰が薄いから救われませんと言う人がいるが、信仰で救われるのではない、贖いによって救われる。そうですから信仰によって救われるということは言わないでください。贖いによって救われると言ってください。ロマ書三章を、私は今度は自分で訳するときには、その誤解を解くよ

うに、三章二一節以下をちょっと改めたいと思えますが、現在のままでも十分に読める。贖いで救われると読める。これが分かるときに、本当にわれは神の子とせられたという信仰が起こる。彼を受けその名を信ぜし者には、これを神の子とするとヨハネ伝に書いてある。

そうですから、私は十字架を信じているということは、私は、私個人の主観的には、小西お前はなんで救われているか、私は十字架の贖いで救われていると言う。私は、主観的には、私は信仰で救われていると、そんなことは言いません。私には信仰が無い。主観的には、十字架の贖いで救われると言う。主観的には信仰という言葉はない。他人が、石館兄弟が、小西は十字架の贖いを信じていると、石館君が言う。信仰という言葉は石館君が言ってくれる。私においては、私は十字架の贖いで救われると言っている。それを信仰によって、そういう理解を信仰で救われるという。

ここは、ロマ書三章の講義のときに力説いたしました、ここを分かれば信仰は確立する。それで主観的な信仰告白としては、主は救い主だと、わが主よと呼ぶ。これが主観的な信仰告白、信仰の表し方です。わが主イエス、主はわが救い主だということです。

あるいはまた、十字架を見上げる。それが主観的な信仰告白です。わが主はわが救い主だ。わが主イエスよと十字架を見上げる。これが信仰の告白です。自分が信仰するということは無いですよ。自分は信仰で救われている、そんなことは言うな、間違えるな。

そうでありますので、この恩恵、主の神の知恵、すなわち奥義、十字架の贖い、これが救いの中心であり救いの全部です。これは神の愛です。神の子の人を救わんとする知恵が、このイエスの十字架の贖いと相なって現われた。これは神の愛です。愛と言ってもいいし、神の知恵と言ってもいい、十字架、贖い、これ

は神の愛です。これが分かる時に、すなわちわれわれに神の子たる信仰が起こってくる。これはもう最もなくてはならぬ。これがなければキリスト教は始まらない。最もなくてはならぬものです。そうでありますので、キリスト教の特徴はこの神の知恵、恩恵にある。神の恩恵にある。

これは、対価無しに神が完成して下された。われわれの信仰とかならないとか、われわれから持ち出すという対価無しに、フリーリーに神から提供されている。これは大事ですよ。福音とはこのことを言う。フリーリーに、対価無しに、信仰とかならないとかという対価をわれわれが持ち出して、向こうが下さるんじゃない。これが神の知恵です。

これをパウロが明らかにした。これがパウロが明らかにした第一人者、オリジナリテイはパウロがこれを持っている。パウロの偉大、ロマ書の偉大はここにある。それを受けることを、信仰で救われると言う。

そうでありますから、この恩恵の書は無対価です。無対価という字を覚えておいて下さい。これは諸君が間に合う時が来るよ。無対価でいただく、フリーリーに。きょうの説教は全部忘れてもいいけれども、われわれはフリーリー、無対価で救われるということ覚えておいて下さい。それを受けるという条件で、救いは成就しているということ。条件があるとすれば、受けるという条件だけです。

そうでありますから、「無対価」という特徴から、「誰にでも」という特徴は出てくる。無対価であるから誰にでもですよ。何十年信仰に教会来ている者と、きょう初めて来た者と平等です。これがパウロがユダヤ人とそしてこの異邦人との区別は無いと云った。パウロの深い意味はここにある。何十年経験ある者も、経験ある者も無い者も、神の信仰のある者も無い者も、平等である。「誰にでも」という字、これが出てくる。そうですから、聖書をよく注意して読んで下さい。「信ずるものは誰でも」とか、「すべての人に」という字

がこれで、いつでも出てくるというのは、それは自分を含んでいる。

そうですから、この福音の特徴は、「無対価で」「正しい」「誰にでも」という、この三つの特徴を持っている。

もうこれで、キリスト教の特性は言えていると思いますが、すなわちキリスト教の特性をも一遍繰り返し返して言えば、神が人を求め給う、求め給うた、神からそれを提供して人間が求めているのではない。神のほうから受けてくれと言って、来ている。特徴はそういうものなのだ。それを啓示という。われわれの信仰とか行ないとかいう、われわれの何らの努力によらない、神から提供されていると言う。それがすなわち神が人を求め給うと言うんだ。それがキリストの特性です。これが大体信仰という字の解釈。

今度は、「救い」について話したい。

「救い」というのは、この信仰によって救われたら、これを受けたら、罪を許されて神の子とせられたという信仰が起こってくる。そういう信仰を持っていらつしやいますか？ そういう信仰を持っていらつしやらなかったら、キリスト教を何十年やっていらつしやっても、それはまだキリストを信じていないということになる。

自分は神の子とせられた、これは最もなくてはならぬもの、*indispensable*な（欠くことができない）ものです。なくてはならぬもの。この神の子とせられたという「信仰」が、これがすなわち、「望み」、「愛」の出発点です。これから始まる。

これからこの円を描きます、この円がクリスチャンの生活、永遠の生命の転化した姿です。これがロマ書の一一章以下ずっと一六章までの後半がこれです。ロマ書を初め信仰するときには、この生命、下手な円で



(参照 グラビア頁に拡大図)

ありますけどこれは円であります、これが信者の生活です。それで、これから始まって神によってつくられたというのであれば、毎日毎日復活に近づいている。栄化復活する。肉体は、五〇年七〇年でこの肉体は朽ちますけれども、時来らば、われわれはイエス・キリストの復活と同じく、復活をさせてもらう。復活をする。永遠無限の栄光の体を頂くというのは、これが栄化復活なのだ。これがすなわち、最も大切なものになる。これがすなわち、キリスト教の頂点。ちよūd絵に描いた頂点になりまして、これが頂点、完了、consumation。これがすなわち望みです。われわれが日々、これに向かって進む。これが私の歌の「みくにめあてに」というのがこれです。望みです。

ロマ書は、これに尽きる。第八章の最も重大なる場所において、パウロは八章ほとんど全章を使って望みについて述べた。また、一二章と一三章と道徳論をやったときに、その最後に、日は近しと、望みを述べた。一二章の終りの望みの文句によって、オーガス

ティンは引っ掛かった。

また、一五章の一三節、もう最後の道德の終わりに、いよいよこのロマ書の本文が終わったときに、一五章一三節に、「望みの神が、汝らをして聖霊によつて望みに満ち溢れんことを」と言つてロマ書を閉じた。これは、この神の子とせられた神の子たる信仰から出てくる。この神の子の信仰と望みに励まされて、われらは毎日目の前の義務を遂行する。これが愛です。

目の前に落ちてくる、手の前に置かれた義務を実行するということは不可避です。愛ということは甘いものではない。愛は、岩石のようなものだ、内村先生が言った。西洋の偉い学者が言った。愛というものはよく見れば、岩石だと言った。愛というものは、相手の人を良くすることなので、*better*、より良くすることを愛というんだ。神の知恵、愛というのは、われわれを、人間をより良くするためです。

愛というものは、善ということを離れてない。愛というのは、人をより良くすることです。喜ばしたり満足したりすることのみが愛ではない。病気であればその病気を本人が嫌がっても、親は子供が泣いても悪いところを取る。それを愛という。気持ちがいよことだけが愛ではない。愛ということは人をより良くすることを愛という。目の前の義務の実行なのだ。カーライルが『サーター・リサータス』において、*"Do thy Duty, which lies nearest thee, which thou knowest to be a Duty."* カーライルは、「汝の義務を尽くせ。汝の最も近くにある義務を尽くせ。汝が義務と知れるものを尽くせ」と言った。

キリスト教の最も偉大なるものは愛であると、パウロは言いました。コリント前書一三章でそう言いましたが、実にこのわれわれの目の前の義務の実行こそ、これがキリスト教の外に現われた姿です。自分の仕事を誠心誠意やるのが嫌な人は、もうこの教会へ来て下さるな。そんな怠け者は来て欲しくない。これをパウ

口は「最も偉大なるもの」と言った。キリスト教は真剣に生きるということに尽きる。

パウロの喜びはここにあった。「I enjoy in this hope.」と、パウロは言った。パウロはこの喜びを喜んだ。彼が驚天動地の一〇〇〇キロ以上にわたる大伝道をやりましたけれども、それは少しも喜びとしなかった。彼はこの喜びを喜んだ。

たびたび言うとおりイエスが、五〇人七〇人の伝道者を遣わして、伝道者たちが多くの業績を上げて、病人が治った、悪鬼が出たと言つてイエスに喜んで報告した時にイエスは、「汝、業績の上がつたことを喜ぶな、汝の名の天に記されたることを喜べ」とイエスは言った。

われわれの喜びはここにある。われわれの平安はここにある。罪を許されて神の子とせられた、神われらと共にあるところ、ここに平安がある。「われの与うる平安はこの世の与うる平安にあらず」という具合にイエスは言われた。ここに平安がある。この平安があつてここに喜びがある。平安と喜びとに支えられて、義務の実行がある。嫌々ながら人生を生きようなどでは、人生の義務に対して、張りが出ませんよ。人生は、ちよつとした困難にへこたれますよ。

また、パウロは、この永遠の生命を生くるときに、個人が救われると共に民族が救われ、人類が救われると言つた。人類全体が救われる神の計画を展開した。これらの場所も、九章から一〇章までであります。

要するに、キリスト教二〇〇〇年の歴史は、大なる指導者はいつもこのロマ書からおこつた。四世紀のセント・オウガステイン、一六世紀にはルター、カルヴィン。一八世紀のウエスレー。二〇世紀のバルト、内村鑑三。皆、聖書のロマ書のこの真理の再発見にすぎない。将来も然らん。

実に、ロマ書は伝道の書であります。この信仰によつて救われるということの説明して、展開した伝道の

書であります。

そもそもパウロとはいかなる人でありましたか。彼はこの神の、“un ergründlich denken (神の計るべからざる計画)”を、彼になし示された。彼はそれが分かった。そういう説明が分かった。神の救いの、そういう神のこの知恵が分かった。示された。これはパウロの独創、オリジナリティ、独創です。これは独創というでもパウロが発見したのではない。こういう神が計画したことをパウロに示した。われはまたこの神の深き知恵を示される、再び示されるに過ぎない。

私はこの前述べましたアルトハウス先生の言葉をもう一度、ここに言いたい。“Alles Menschedenken kan nur ein Nachdenken seiner er un er grundlich Gedanken sein”。すなわち、このパウロが発見したこの知恵は神の知恵でありますが、その知恵をわれわれは繰り返し“nachdenken”、それをフォローしてそれを再発見するに過ぎない。

パウロ先生は、狂信者ではなかった。理性的な人でありました。しかるにその理性的な人が、確信を持ってロマ書八章において、いかなる悲しみ、苦しみ、どういことがあっても、死そのものさえも、私をこのキリストの愛から離すことができないと言った。彼パウロは、透徹せるこの彼の理性をもって、人生のいかなる悲しみ、苦しみも勝ち得て余りがあるということを公言した。そういう人の書いた手紙をわれわれが学ぶということとは、こういうパウロに出会うということとは、われわれの人生において幸いなことではありませんか。

最後に私は、これを信ぜざる人、これを受けない人に申し上げたい。現在は、信じない皆さまにはこれは無用であるかもしれない。しかし、これは現在無用でありますけれども、将来必ずあなたに必要な時が

来るということを、私は断言する。人が真に正しく生きるとは如何ということが、われに目覚めた時に、われわれの無力を知った時に、遅くとも一度は死の波河を渡る時に、これを思い出して下さい。

## あとがき

本書に収めた説教をされた日本基督教団元高円寺東教会牧師小西芳之助先生は、ロマ書第一〇章第一三節の「主の御名を呼び求めるものはすべて救われる」とある聖句を聖書中最も大切な聖句と考えられ、仏教浄土門の信者が「南無阿弥陀仏」と救い主の名を呼べば極楽浄土へ行けるように、キリスト者も「わが主イエスよ」と主の御名を称えれば、永遠の生命が与えられ、復活する者となるという簡単明瞭なキリスト教を説かれました。小西先生は、ご自分のキリスト教を、恵心流キリスト教と呼んでおられました。

本書は、小西芳之助牧師の最晩年、昭和五一（一九七六）年から五三（一九七八）年にかけて、高円寺東教会で、クリスマス、新年などの機会に話された特別の説教、夏休み中証言を予定されていた信徒の都合が悪くなつて代わりにされた時の説教、——おもに「わが主イエスよ」と称名するだけで救われ、永遠の生命をいただき、復活する者となるという恵心流キリスト教に関する説教を中心に収めてあります。

本書の実質上の編集者は、元高円寺東教会の会員であつた村山<sup>げん</sup>愿兄弟（一九二一—二〇一一）です。村山兄弟は、小西先生の信仰の忠実な信奉者でありましたが、高等学校教師を定年退職後は、再就職の道を選ばず、小西先生が遺されたロマ書、コリント前・後書、ガラテヤ書、エペソ書などの講解説教のテープを、日本点字図書館の協力を得て、複製を制作し頒布するという伝道活動を続けられました。村山兄弟のテープによる伝道活動には、約三〇名の元教員が購入し、聞いておりました。

村山兄弟は、エペソ書講解説教の頒布が終わつた後、小西先生の最晩年の昭和五一年から五三年にかけて特別の機会にされた説教を、「特別説教」と名付けて編集され、同じように頒布されました。本書は、村山

兄弟が編集された特別説教を中心として、テープ起こしをし、活字化したものであります。

本書には、以上の特別説教一六講のほかにも、それ以前の四つの説教を補遺として収めてあります。

補遺A 「私の人生」、昭和四三（一九六八）年六月二日説教。小西先生の自伝的説教。

補遺B 「私の信仰——恵心流キリスト教——」、昭和四二（一九六七）年八月六日説教。

「恵心流キリスト教」という言葉を出された最初の説教ではないかと思われまます。

補遺C 「私の信仰——信仰はただ一つ——」。昭和四二（一九六七）年八月二七日説教。大正一〇年、内村聖書研究会で出していた『靈交』に掲載された小西先生の文章の紹介。

補遺D 「ロマ書大観」、昭和三七（一九六二）年一月二三日説教。昭和三六年から三七年にかけて、高円寺東教会で行われた第一回ロマ書講解説教の最終回の「ロマ書大観」。キリスト教の十字架の贖いと信望愛に関して、小西先生が書かれた図を用いて説明されました。キリスト教を一枚の紙で要約すると、こうなるという壮大な図であり、本書のグラビアページに収めました。

以上のように、本書の実質的な編集者は、村山愿兄弟であります。小西先生と共に、地上に残されている我々に向けて、天国から伝道をされているように思います。

本書に収められている講解説教は、石館家庭集會を引き継いで、今井館の集會室をお借りして続けられている高円寺東集會において、エペソ書、ピリピ書などの講解説教の間に、時折は喜んで聴いたものであります。集會でテープを共に聴きながら学んで下さる皆様、テープ起こしをして下さったユウエス・プランングの皆様、いろいろな形で温かいご援助を賜りました千葉県佐倉市、新潟県胎内市、滋賀県大津市にお住いの元高円寺東集會の姉妹の皆様、出版を引き受けて下さった横浜大氣堂の方々に対して、ここに厚くお

礼申し上げます。

本書をお読み下さる皆様おひとりおひとりの上に、聖霊豊かに降り、主イエス・キリストの恵みと平安豊かならんことを祈ります。

二〇一六年九月

高円寺東集会

山口周三

## 【小西芳之助 関連出版物】

- 『その時の喜びや如何』（小西芳之助先生召天記録） 発行者小西美江 昭和五五年一月
- 『小西芳之助先生余芳』 元高円寺東教会共励会 昭和五六年九月
- 小西芳之助『ローマ人への手紙講解説教―恵心流キリスト教』 キリスト新聞社 平成六年九月
- 小西芳之助導源『主の御名を呼ぶ』 石館基編 高円寺家庭集会 平成一二年四月
- 小西芳之助『コリント第一の手紙講解説教』 高円寺家庭集会 平成一五年五月
- 小西芳之助『コリント第二の手紙講解説教』 高円寺家庭集会 平成一六年十一月
- 小西芳之助『ガラテヤ人への手紙講解説教』 高円寺家庭集会 平成一七年四月
- 『天国の外交官 小西芳之助・恵心流キリスト教』 石館基編 高円寺家庭集会 平成二二年四月
- 小西芳之助導源『エペソ人への手紙講解説教』 高円寺東集会 平成二七年九月

（お問い合わせ先）

山 口 周 三 一 二 二 四 一 〇 〇 一 五 横 浜 市 都 筑 区 牛 久 保 西 二 一 一 四 一 二 八

shuzo\_yamaguchi@tmtv.ne.jp

小西芳之助（こにし よしのすけ）

明治31(1898)年、奈良県に生まれる。第一高等学校、東京帝国大学法学部卒、安田信託銀行を経て、49歳より、キリスト教伝道者に転身。以後日本基督教団高円寺東教会牧師として、31年間にわたり、福音の伝道に尽力。特に内村鑑三及び恵心僧都の信仰から大きな影響を受け、晩年、恵心流キリスト教と称した。昭和55(1980)年、満81歳で召天。著書に『ローマ人への手紙・講解説教』他がある。

小西芳之助導源

わが主イエスよ

— 恵心流キリスト教・説教集 —

平成二八(二〇一六年)二月二〇日 初版発行

頒価一、〇〇〇円

編者 高円寺東集会 (代表 佐生健光・山口周三)

〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西二一四二八 山口周三方

電話・FAX 045-912-1960

携帯電話 080-1232-0905

Eメール shuzo\_yamaguchi@tmtv.ne.jp

ゆうちょ銀行振替口座 山口周三 00250-9-83946

発行人 渡辺嘉章

発行所 株式会社 横濱大氣堂

〒231-0016 横浜市中区真砂町四一四〇

電話 045-641-4161

FAX 045-681-0957

Eメール yokohama@taikido.jp

印刷・製本 株式会社 横濱大氣堂



9784990884819

ISBN978-4-9908848-1-9  
C1016-¥1000E



1921016010007

頒価： 本体 1,000 円 +税